

岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集

二戸市 沢内B遺跡

(昭和53年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

沢内 B 遺跡

1. 遺跡所在地 二戸市米沢字家の上
2. 事業主体 岩手県
3. 調査主体 (財)岩手県埋蔵文化財センター
4. 調査員 技師 高橋与右工門
5. 調査期間 昭和53年5月8日～6月26日
6. 調査面積 600m²
7. 発掘面積 600m²
8. 遺跡記号 S U B 78
9. 協力機関 二戸市教育委員会・岩手県二戸土木事務所
10. 協力員 藤原 彰

序

岩手県二戸市周辺は、北上山地と奥羽山脈にはさまれ、馬淵川によって開析された標高 100～140m の段丘が存在し、この段丘上に数多くの遺跡が存在することが古くから知られております。本遺跡もこの段丘上に立地するものであります。

本遺跡は、二戸バイパス建設工事に伴う県道田子線改良工事区域内三遺跡のうちの一つであり、工事以前に調査記録保存するために、岩手県より当センターが委託を受けて調査を行なったものであります。

遺跡の面積は路線内に限っており、600 m² と小さいものであります。調査の結果は、縄文時代早期、中期、中世遺構と貴重な資料を得る事ができました。二戸市における遺跡は一時代単独というものは少なく、いずれも時代が重複しておりますが、当遺跡においてもその事を実証したものと思えます。遺構としては、中世竪穴住居址が4棟精査され、この時代の竪穴住居址としては稀な切り合い関係をもつものが精査されており、中世竪穴住居址の時代差をつかまえ得るもの期待しています。

本報告書の上梓に当り、関係各位に感謝申し上げるとともに、本報告書が広く学術研究、文化財保護の資料として活用されることを心から願っております。

昭和 54 年 3 月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 畑山 新 信

例 言

1. 発掘調査は高橋与右工門が担当し、調査協力員藤原彰が参加した。
2. 発掘調査では次の機関の御協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
岩手県土木部二戸土木事務所 二戸市教育委員会
3. 発掘調査および整理にあたっては次の諸氏の御教示を賜った。
草間俊一 (岩手大学教授) 鈴木克彦 (青森県立郷土館研究員)
相原康二 (県教委文化課)
4. 石器の石材鑑定は、県立杜陵高校教諭 佐藤二郎氏にお願いした。
5. 発掘作業は、沢内義一ほか20名の方々の御協力を得た。
その中で次の方々が実測班として遺構実測を行った。
久保田久子 欠端光子 横山スエ
吉田 輝子 小林和子 平 貞子
6. 遺物の実測トレース、遺構実測図のトレース、拓本図の作成は次の方々が行った。
滝村キヨ 村上幹子 浅沼朝子 小笠原邦子
7. 遺構実測図は縮尺率を統一できなかったので、各ページにスケールを挿入した。
8. 遺物実測図は、土器は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、石器は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ になる様にし、その旨明記した。
9. 拓本図は $\frac{1}{2}$ で統一した。
10. 本報告書の原稿執筆は、第I章 調査に至る経過は瀬川司男が担当し、第II章から第VI章までは高橋与右工門が担当した。
11. 本報告書のレイアウト、編集は高橋与右工門が担当した。

本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経過	2	1	土器	29
第Ⅱ章	遺跡の位置と地形	3		第Ⅰ群 縄文土器	30
第Ⅲ章	調査方法と調査経過	6		第Ⅱ群 土師器	37
第Ⅳ章	基本層序	10		第Ⅲ群 陶器	41
第Ⅴ章	調査結果	12	2	石器	41
1節	遺構	12	3	鉄器	50
1	住居址	12	第Ⅵ章	まとめ	51
2	溝址	21	1節	遺構と火山灰・浮石の関係	
3	土壇	23	2節	遺構	
4	柵列址状遺構	26	3節	遺物	
5	焼土遺構	26			
2節	遺物	29			

挿図目次

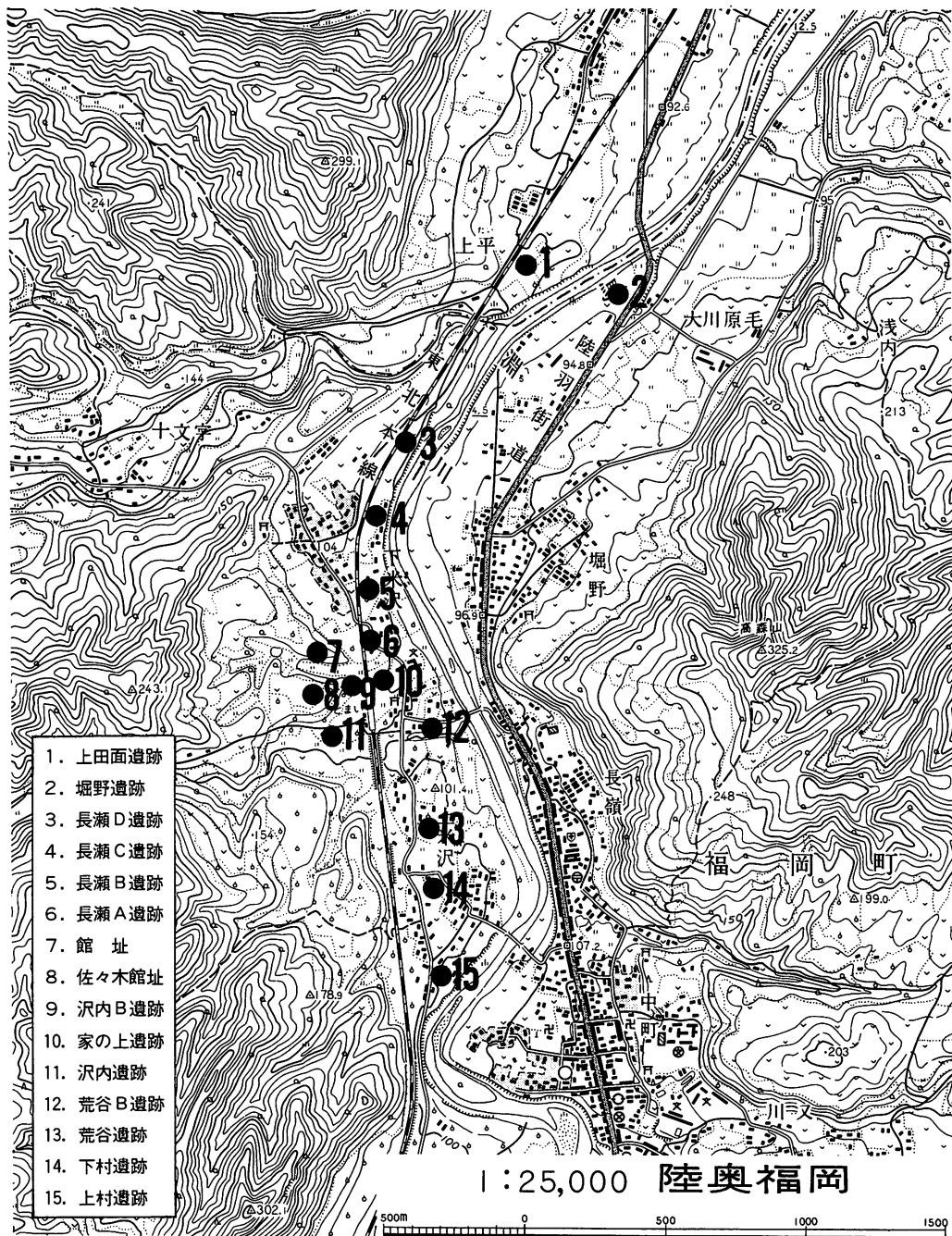
挿図1	遺跡の位置図(25,000分の1)	1	挿図14	焼土遺構・土器密集地	28
挿図2	遺跡付近の地形図(1,000分の1)	4	挿図15	土器実測図	32
挿図3	二戸市地域の地形面区分図(50,000分の1)	5	挿図16	土器実測図	33
挿図4	グリッドおよび遺構配置図	7	挿図17	土器実測図	34
挿図5	基本層序	9	挿図18	土器拓本図	35
挿図6	B-2 住居址・C-2 住居址	14	挿図19	土器拓本図	38
挿図7	同上	15	挿図20	土器拓本図	39
挿図8-A	A-2 住居址	16	挿図21	土器拓本図	40
8-B	D-5 住居址	16	挿図22	石器実測図	45
挿図9	A-4 住居址	19	挿図23	石器実測図	46
挿図10	C-6 住居址	20	挿図24	石器実測図	47
挿図11	B-8 構址・C-8 溝址	22	挿図25	石器実測図	48
挿図12	C-3 土壇・C-7 土壇 B-3 土壇・D-7 土壇	24	挿図26	鉄器実測図	50
挿図13	柵列址状遺構	27			

図 表

表 1 石器集計表 42・43

写真図版目次

PL 1 a	調査前全景	62		d	C-3 土 塚	
	b	調査後全景		PL 7	復元土器	68
PL 2 a	基本層序	63	PL 8	復元土器		69
	b	B-3 住居址・C-2 住居址	PL 9	土器破片		70
PL 3 a	A-2 住居址	64	PL 10	土器破片		71
	b	D-5 住居址	PL 11	土器破片		72
PL 4 a	A-4 住居址	65	PL 12	土器破片		73
	b	C-6 住居址	PL 13a. b	土器破片		74
PL 5 a	C-8 溝 址	66		c	鉄 器	
	b	B-8 溝 址	PL 14	石 器		75
PL 6 a	柵列址状遺構	67	PL 15	石 器		76
	b	C-7 土 塚	PL 16	石 器		77
	c	B-3 土 塚				



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5・5万分の1地形図を複製したものである(承認番号)。昭和53東複・第558号」

挿図1. 遺跡の位置

第Ⅰ章 調査に至る経過

二戸市沢内B遺跡の調査は、県道二戸～田子線の改良工事に伴う緊急発掘調査である。県道二戸～田子線は、県土木部によって、二戸バイパス建設に伴って改良工事が進められているものである。工事に先だって、県文化課によって分布調査が行なわれ、遺跡の存在が確認され、協議の結果発掘調査を行ない記録保存することとなった。調査は昭和51年度県文化課によって荒谷B遺跡が調査され、歴史時代および縄文時代の遺構が精査され、調査報告書が刊行されている。

昭和52年4月に（財）岩手県埋蔵文化財センターが設立され、調査機能の移管に伴って、県道二戸～田子線改良工事関係遺跡調査も県文化課から（財）岩手県埋蔵文化財センターに移され、県文化課の調整を経て、県土木部との間に委託契約が行なわれた。昭和52年度に沢内遺跡が調査され、歴史時代遺構と縄文時代遺構が精査され、調査報告書が刊行された。

昭和53年度は沢内B遺跡 600 m²の委託を受けて調査を行なった。二戸市内における遺跡調査は二戸バイパス建設予定地を中心に数多く行なわれ、福岡段丘面、米沢段丘面上に非常に多くの縄文時代～近世にかけての遺跡が存在する事が明らかになってきている。遺跡の殆んどが複合遺跡であり、遺構検出面が火山灰の堆積によって判然と区別されるという特徴をもっている。

沢内B遺跡においても、現地地表上において、縄文土器の細片を採取し縄文時代遺跡としたが、遺跡西側直上に中世館址が存在しておる事から、縄文時代遺構と共に中世遺構の存在が期待された。調査が進行するに従って中世堅穴住居址が確認され、縄文時代、中世の複合遺跡である事が確認された。

調査は当初より全面調査を予定していたが、中世遺構の下に縄文時代遺構が存在するため、二重、三重の土の除去という調査をせざるを得なくなり、予定の調査日程を延長しなくてはならなくなった。又下部にいくに従って土砂の崩壊を防止する手だてを講じざるを得ない状況となり、一部段差をつけての調査となった。幸い土砂の崩壊もなく無事終了する事ができた。

調査は路線巾のみであり、調査区域の西側、東側にそれぞれ遺跡範囲は広がっており、今回の調査区域と東北本線との間の区域が遺跡中心部と考えられる。

なお本遺跡の名称は、昭和52年度調査を行なった沢内遺跡と同一遺跡であるという推定に基づき、年度区分の意味から沢内B遺跡としたが、今回調査の結果沢内遺跡と時代が異なり、沢内遺跡中心部よりの距離が150 m あることから、今後は独立した遺跡としての名称とする。

(瀬川 司男)

第Ⅱ章 遺跡の位置と立地

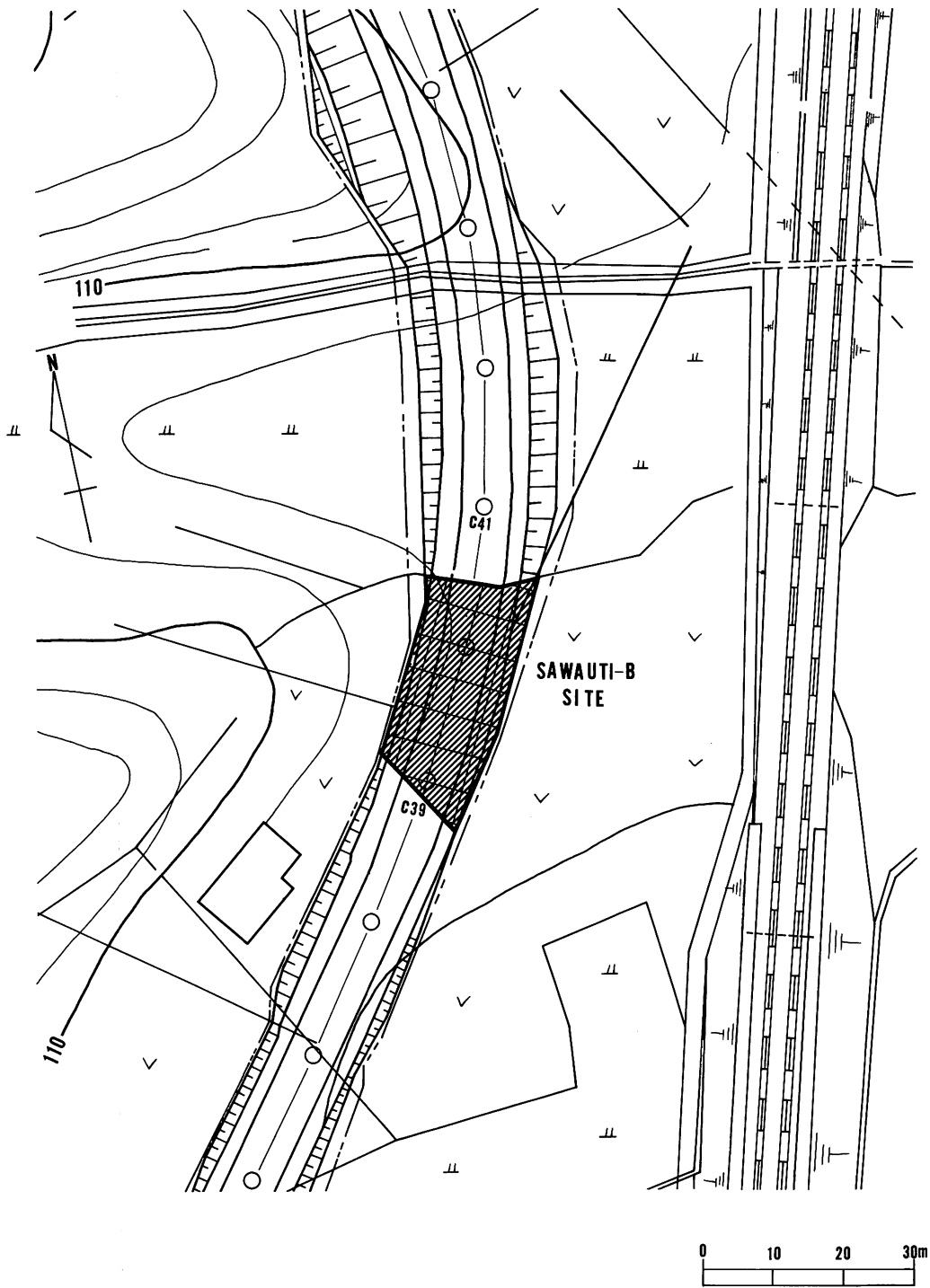
沢内B遺跡は、二戸市米沢字家の上に所在する遺跡であり、国鉄東北本線斗米駅西側50mの地点である。県道二戸～田子線改良工事路線内に位置し、調査区域は600㎡である。昭和51年度に二戸バイパス関連遺跡として調査された家の上遺跡（県教委調査、未報告）は、東北本線をはさみ東100mに位置し、同一地形面に立地している。また、前年度調査の沢内遺跡は南150mに位置しているが、間には小沢が存在する。

二戸市は、東北本線沿いでは最北部に位置し、青森県と接しており、岩手郡葛巻町多々良山付近を源流とする馬淵川によって形成された河岸段丘上に発達した町である。市街地は馬淵川の左岸石切所地域と、馬淵川右岸の国道4号線沿いの約4kmに亘って密集し、中心部は馬淵川の支流白鳥川にかかる岩谷橋付近である。市街地の立地する段丘は、馬淵川の両岸に細長く形成されており、比較的宅地化の進んでいない左岸地域にも最近が開発の波が押し寄せ、次第に宅地化されてきている。国道4号線二戸バイパスの路線も左岸段丘上に決定し、現在工事進行中である。

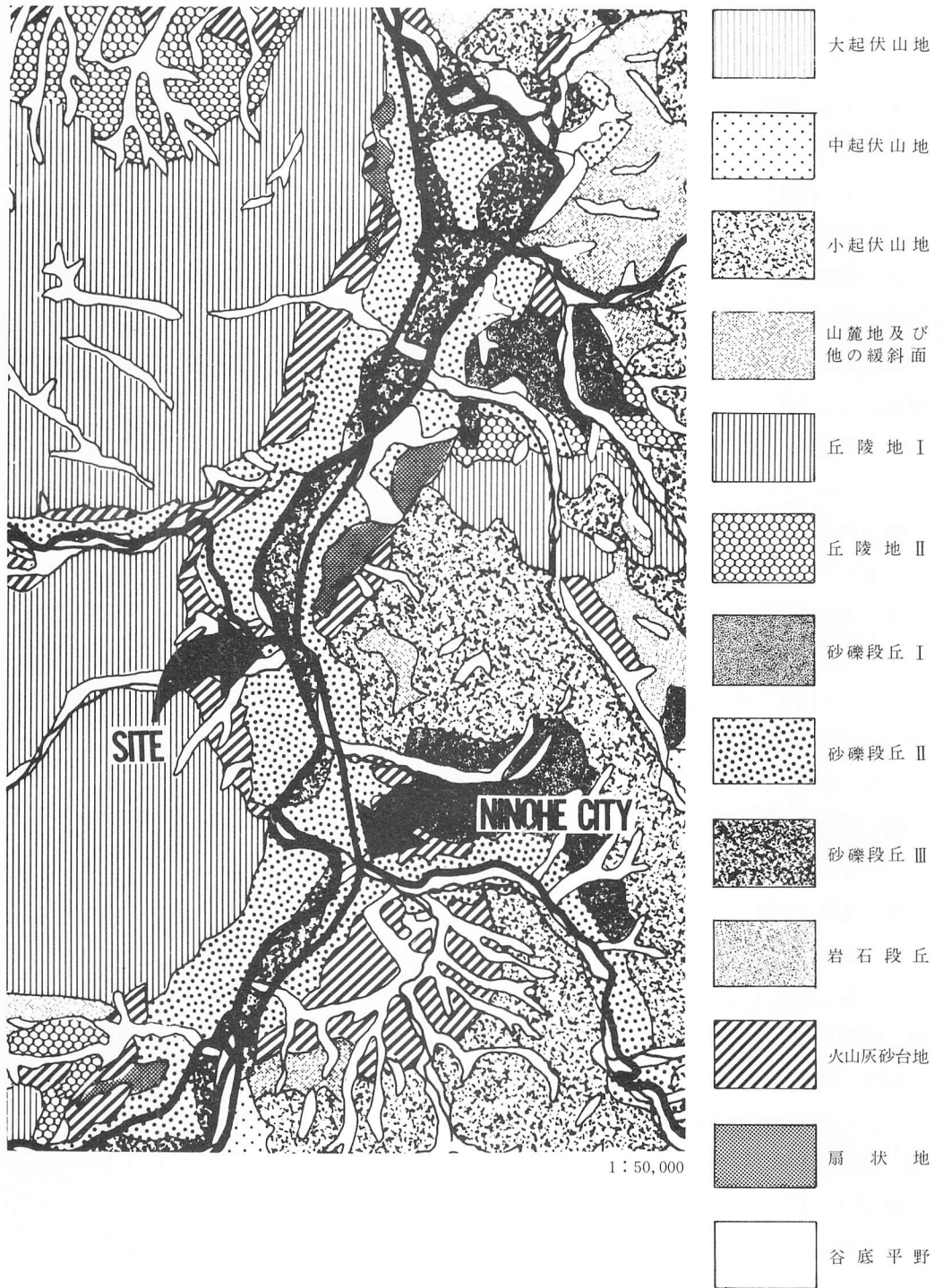
遺跡の標高は106m±であり、馬淵川は遺跡の東方約400mを北流し、比高25m±を測る。遺跡の西側に、比高15m±、標高120～140mで上位段丘の福岡段丘が形成されており、その段丘崖より斜面状に張り出した舌状台地の基部に立地し、段丘面としては米沢段丘面に相当する。本遺跡の北側には、流水を伴う沢が存在し、現在水田として利用されており、比高1.5m±を測る。沢の北側には、本遺跡の立地する地形面と同位の段丘が存在し、縄文土器や土師器の破片が表採される。遺跡の南側は約250mで沢内川に達し、沢内川は約500m東流して馬淵川に合流する。

本遺跡の層序は、中振浮石と南部浮石が明瞭な純層堆積としてみられ、米沢段丘の基本的な構成層と同じである。地質関係の文献によれば、米沢段丘は標高100m±で、上位段丘の福岡段丘（標高120～140m）とは比高20m±を測るといわれる。また、本遺跡の堆積土層が南に向かって傾斜しており、かつては沢の北側の同位段丘と続いていたのが、沢の開析によって分断されたものと考えられる。

遺跡の周囲には、長瀬遺跡群、家の上遺跡、荒谷遺跡、荒谷B遺跡、上村遺跡、下村遺跡、沢内遺跡、上田面遺跡等数多くの遺跡が同位段丘上に立地しており、上位の福岡段丘上には、佐々木館址、円館址や無名の遺跡が数多く存在する。米沢段丘より下位の堀野段丘上には、堀野遺跡や中曽根遺跡が立地している。



挿図2. 遺跡付近の地形図



挿図3. 地形面区分図

第Ⅲ章 調査方法と調査経過

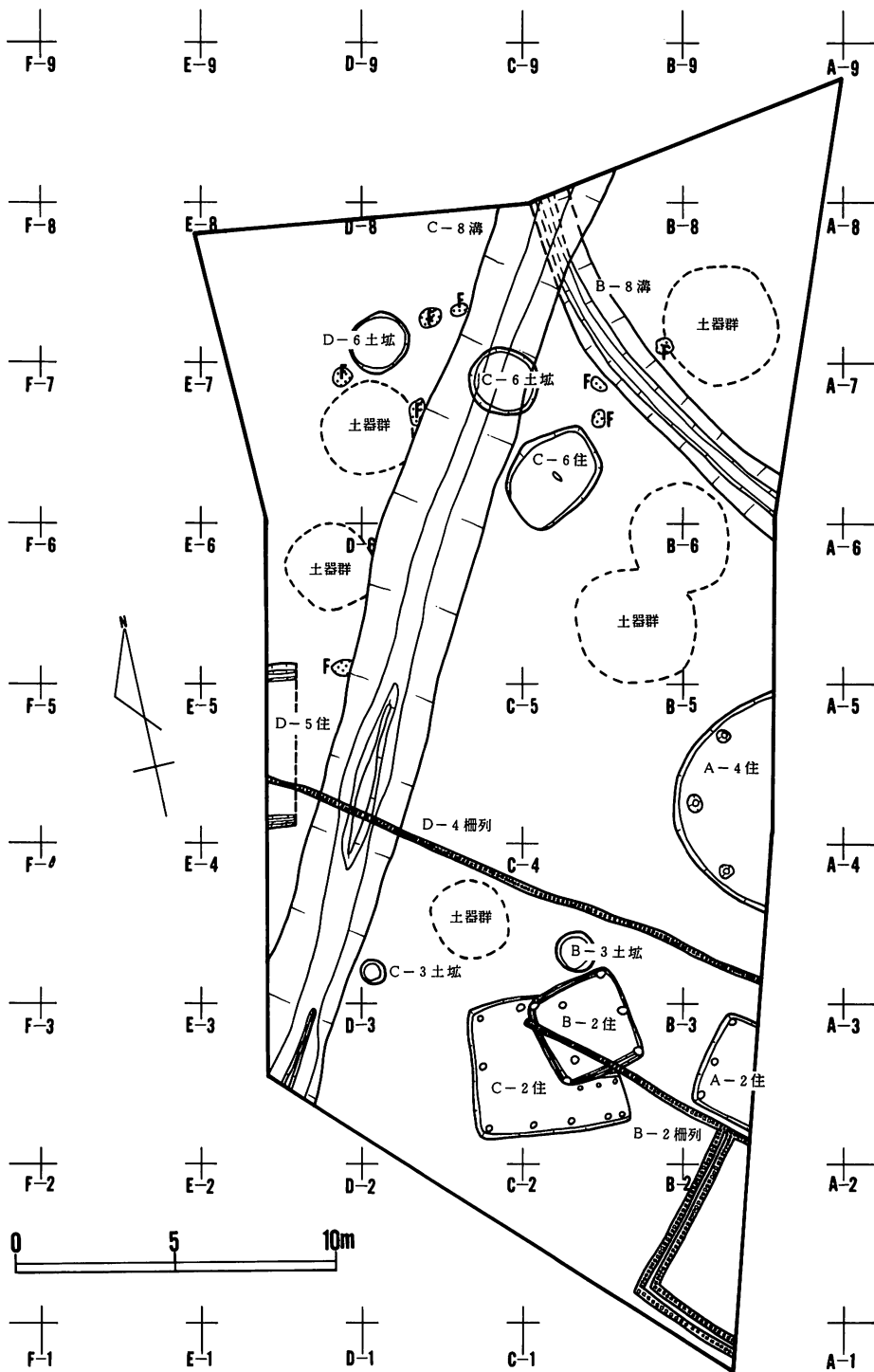
調査グリッドは、道路路線の中心杭C39とC40の2点間を直線で結び、この線を基準線にして、縦軸（南北軸）、横軸（東西軸）ともに5m×5mのメッシュで、調査区域全面をカバーできるように設定した。南北軸はアルファベットでA～Dまで、東西軸は南よりアラビア数字で1～8までそれぞれ命名し、各グリッドの北東隅の地点名を呼称し、A-1、A-2、……とした。遺構名は、遺構北西隅の位置するグリッド名で呼称し、A-1住居址、A-1土坑、A-1溝址と命名した。

調査班は、調査員1名、協力員1名の2名という非常に少ない人数で編成したので、実際の調査に当っては、調査能率を向上させる為に次の様な基本的な調査計画を立案した。

- (1)、調査員は遺構の精査だけに没頭せずに、大局的見地から状況を把握し、的確に判断を下すこと。
- (2)、(1)の目的を達成させるために、フィールドでの情報収集に努力し、フィールドカードを多用すること。
- (3)、調査員は、役割分担でその部署を担当し、遺跡担当の高橋が総括する。役割分担は次の通りである。
 - a、高橋は、遺構の精査についての指示や、その他作業員に対する全体的な作業指示および全体総括。
 - b、藤原は、写真撮影、各種実測図の作成等記録を主とし、高橋が点検する。
- (4)、時代が重複している可能性を考え、分層発掘に徹し、1層除去するごとに遺構検出を行うこと。
- (5)、遺構の実測は、作業員の中から実測班を編成すること。
- (6)、遺物の水洗、ラベル記入は現地で終了させること。

以上の様な調査計画のもとに調査を開始し、実際の調査では次の様な方法をとった。

- ※ 粗掘りは、全層人手によって行い、遺構検出は各層ごとに行い、粗掘り中の遺物は、出土層位を確認し、グリッドごと一括して収納した。記録を必要とする場合は、フィールドカードに記入し、更に写真撮影を行った場合もある。
- ※ 遺構精査は、住居址は4分法、土坑、焼土は2分法を原則とし、溝址は必要に応じて土層観察用ベルトを残して精査し、層位ごとに掘りあげた。
- ※ 遺構内での遺物は、各埋土土層ごと一括して収納し、記録を要する場合にはフィールドカードを利用した。床面直上での遺物は実測図に記入し、写真撮影を行った。
- ※ 実測図の作成は、原則として $\frac{1}{50}$ で行い、必要によっては $\frac{1}{20}$ も併用した。実測班は作業員の



挿図4. グリッドおよび遺構配置図

中から6人で編成し、2人1組で実測した。実測班に対する指導は、高橋、藤原がその都度随時行った。

- ※ 写真撮影は原則として、埋土土層、柱穴、炉址、遺物出土状況、遺構完掘後全景は必ず撮影し、その他にも必要に応じてメモ的に撮影を行った。実際の撮影は藤原が担当した。
- ※ 遺物は全て現地で水洗を終了し、ラベル記入を一部残して室内作業に入った。
- ※ 室内での、土器の接合復元、遺物の実測トレース、土器片の拓本は全て室内整理作業員が行い、担当者の高橋が点検した。
- ※ 遺物の実測図は全て実大で作成し、報告書では縮尺して収録した。
- ※ 遺物の写真撮影、遺構写真の引き伸しは調査嘱託 宮 が担当した。
- ※ 報文執筆、報告書の編集は担当者の高橋が担当した。

以上の方法によって調査、報告という一連の作業を行った。

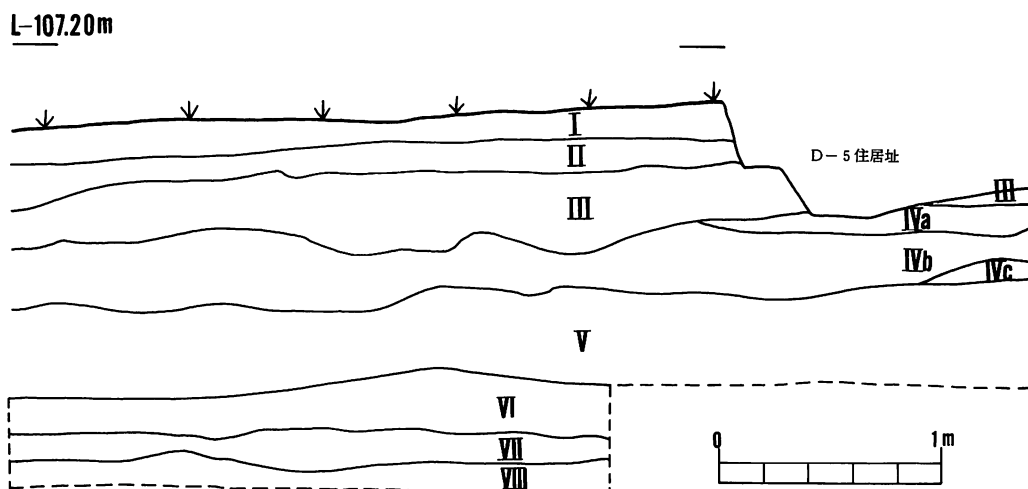
調査経過は次の通りである。

粗掘りは昭和53年5月8日より開始したが、前述の通り当遺跡が立地する段丘より上位の段丘上に館址（通称 佐々木館）が存在し、遺跡は館址の直下に位置するので、上位層において館址に伴う遺構、遺物の存在を予想し、検出に留意した。

第Ⅰ層である現在の表土、耕作土層を除去し、第Ⅱ層上面で柵列址状の遺構が検出された。柵列址を精査後、第Ⅱ層を除去した所、方形プランを呈する土層変化を二カ所で認めた。他に土壇状や溝状を呈する土層変化が認められた。これらの土層変化の部分を精査の結果、住居址3棟、土壇2基、溝址1条が検出された。溝址を精査中に埋土内より繊維土器の破片が出土し尖底部の破片が含まれていたことから、調査区域内に縄文時代早期末に比定される遺構の存在が予想された。第Ⅱ層での検出遺構を精査後、第Ⅲ層まで除去し、一部に十和田a火山灰が混入した土の広がりが見出され、何らかの遺構であろうと推定したが、プランが明確でない。更に北端部で溝状の土層変化がみられた。この溝址の埋土にも十和田aの火山灰の混入がみられた。結局この層での検出遺構は溝址が1条検出されたのみである。第Ⅲ層遺構を精査後、第Ⅳ層まで除去し、第Ⅲ層でプランが不明確であった、十和田a火山灰の混入した部分が、直径6mほどの円形プランを呈する遺構であることが判明した。更に北端部に近いグリッドでも楕円形プランを呈する土層変化が見出され、精査の結果住居址であった。第Ⅳ層遺構を精査後、第Ⅴ層上面まで除去し、北端部で第Ⅳ層が落ちこんだ窪地状の部分が二カ所みられた。精査の結果土壇であった。また本層上面より0.10～0.15m掘り下げた面で多量の繊維土器の破片が出土し、尖底部の破片が含まれていたため縄文時代早期末に比定される遺構の存在が予想され、検出に注意したが、6カ所で焼土が見出されたが住居址は見出されなかった。土器片や焼土は本

層上半で検出されたが、層位下半では遺物、遺構ともに発見されていない。第Ⅴ層は全層除去したが、第Ⅵ層は南部浮石の純層であるので無遺物層と考えたが、第Ⅶ層での文化層の存在を確認する必要を認めたので、第Ⅵ層と第Ⅶ層は調査区を市松状に掘り下げ、遺構、遺物が検出された場合、全面除去の方針で調査したが、遺構、遺物ともに検出されなかったため、第Ⅵ層以下には文化層が存在しないと断定し、調査を打ち切った。

その後、岩手県土木部二戸土木事務所の要請により、一部埋め戻しを行い、調査の全てを終了し、6月28日に器材を撤収した。



挿図5. 基本層序

第Ⅳ章 基本層序

沢内B遺跡での基本層序は次の通りである。土層名は上位層より第Ⅰ層、第Ⅱ層とした。

- 第Ⅰ層、現在の表土であるが、畑地として利用されており、耕作によって攪乱を受けている。シラス土壌を基調とし、シルト質であるが若干粒子が粗くサラサラした触感がある。小礫や細礫が混入し、色調は灰褐色を呈する。この土層は遺跡全面を覆っているが、東に寄るほど層が薄くなり、層厚は0.05～0.10mである。シラス土壌は、上位段丘の福岡段丘の構成層である八戸浮石凝灰岩が風化崩壊したものであり、斜面堆積の原因として、隣接する福岡段丘上に館が構築されたことに起因すると考えられる。調査済の他遺跡ではみられない土層である。攪乱によって浮き上がった遺物が若干含まれているが、原位置を保っているものはない。
- 第Ⅱ層、シルト質の黒色土であるが、浮石やスコリヤは混入していない。この層は他遺跡では現在の表土に相当する土壌である。遺跡全面で観察される土層ではなく、斜面下位の南東部が厚く0.20m位、斜面上位の北西部では全くみられず、流亡したものと考えられる。遺物は全く発見されていないが、本層下位面で、方形プランを呈する住居址が検出された。
- 第Ⅲ層、スコリヤ、白色浮石等の火山性降下物が多く混入した砂質の黒色土であり、風乾状態でもなお黒さを保っている。層厚は約0.30mを測り遺跡全面を覆っている。本土層の最下層で縄文時代後期や晩期の土器片が若干出土した。上田面遺跡の調査例ではこの土層の上面に十和田a火山灰の堆積がみられ、この土層も火山性堆積層である可能性が高い。
- 第Ⅳ層、地質関係では中礫浮石層と呼ばれる土層である。この土層は更に3層に細分が可能である。上層より順次つぎの様である。
- Ⅳ a - 黄色～黄褐色の小粒浮石が混入し砂質である。色調は褐色に近い。層厚は0.20mを測る。
- Ⅳ b - 小粒の黄色浮石が混入した砂質土である。色調は橙褐色に近い。層厚は0.30mを測る
- Ⅳ c - b層の下位面に断続的にみられる土層である。橙黄色～黄色浮石の純層である。俗に「アワズナ」と呼ばれ、層厚は0.10mである。
- 全体として締まりが良いが、攪乱を受けるとパサパサし、強く踏みつけてもなかなか固まらない。Ⅳ層上面で縄文時代中期とおもわれる土器片が出土し、住居址が検出された。下面では繊維土器の破片が若干発見されている。
- 第Ⅴ層、最大直径0.03m位の大粒の浮石を多く混入し、良く締まった砂質の黒色土で若干の粘性をもっている。層厚は0.50±と非常に厚く、遺跡全面を覆っている。この層の上面より0.10～0.20m 下位の面で繊維土器の破片が多く発見され、土器片の中に尖底部の破片が含まれていたため、縄文時代早期末に比定される土器包含層である。遺構としては焼土遺構が検出

されている。

第Ⅵ層、地質関係では南部浮石と呼ぶ大粒浮石の純層である。別名「ゴロタ」とも呼ばれ、色調は黄橙色～橙褐色までみられ、最下層では漂白されて白色化している場合もみられた。層厚は0.20～0.30mを測り、遺跡全面を覆っているが上面に若干の起伏がみられる。無遺物層であるが、この層上面で土壇が2基検出された。長瀬B遺跡の例では、縄文時代早期貝殻文土器使用時期に比定される住居址の全面を覆っていた。

第Ⅶ層、若干淡いチョコレート色をした、非常に粘性の強い粘土質シルトである。南部浮石降下時における埋没土に相当する土層であろう。層厚は0.10～0.15mを測り、遺跡全面を覆い、無遺物層である。

第Ⅷ層、クリーム色～黄橙色をした非常に粘性の強い火山灰性の粘土化土壌である。二の倉火山灰といわれる降下火山灰層に相当すると考えられる。層厚は確認していない。無遺物層である。

以上のように、沢内B遺跡の基本層序としてⅧ層に分類したが、調査済の周辺遺跡の基本層序とは、第Ⅰ層のシラス土壌を除けば基本的に同一である。

堆積土層と文化層の関係は次の通りである。

第Ⅱ層上面	柵列址状遺構	(近世～現代)
第Ⅱ層～Ⅲ層上面	方形堅穴住居址	(中世)
第Ⅱ層下面	溝址、土壇	(中世)
第Ⅲ層上面	溝址	(古代)
第Ⅳ層上面	円形堅穴住居址	(縄文時代)
第Ⅴ層中	焼土遺構	(縄文時代)
第Ⅵ層上面	土壇	(縄文時代)

この様に、約1.60mの堆積土層中で、7層におよび文化層を検出することができた。

第V章 調査結果

調査の結果、住居址6棟、溝址2条、土壇4基、柵列址2条、焼土遺構5カ所の遺構が検出された。遺物は土器、石器、鉄器の完形品や破片、土師器、陶器の破片が出土し、比定される時代も縄文時代早期末から中、近世に至る非常に長期に亘っている。

本項では、遺構、遺物に大別して説明を加える。

第1節 遺構

1. 住居址

〔C-2住居址〕（挿図第6図、PL2b）

本住居址はC-2グリッドに位置し、表土を除去後基本層序第Ⅱ層中で、常に湿気を帯びている黒色土の範囲が認められ、精査の結果住居址であることが判明した。北東部をB-2住居址によって破壊されているので、全体の平面プランは不明であったが、北東隅の柱穴と考えられる柱穴状ピットが検出されたので、全体プランが推定された。

検出された規模は、西壁の南北4.0m、南壁の東西4.7mを測る隅丸方形を呈する。南壁の東寄り1.5mは1辺1.5m位の方形張り出し部とおもわれる。即ち、東壁南寄りに1辺1.5mの方形張り出し部をもつ4.0m×3.5mの方形住居址である。

埋土の状況は、黒色土の基本層序第Ⅱ層に近似しているが、南部浮石が混入し、パサパサし粘性も少なく軟かい。B-2住居址の埋土と全く同じで、埋土土層や検出面では前後関係は不明であった。

壁高は、西壁のもっとも深い位置で0.45mを測り、西壁は床面に対して約70度の傾斜で検出上縁に続いている。壁直下の床面には一部で壁溝が検出された。床面は殆んど水平に近い平坦面であるが、張り出し部の床面は壁の外部に向かって次第に高くなり、非常に固く締まっている。

柱穴状のピットは周壁沿いに9コ、張り出し部に6コ、床面に3コの合わせて18コが検出されたが、本住居址に直接関連するのは、周壁沿いのP1～P9までと張り出し部のP10、11、13、14の柱穴状ピットである。柱穴の規模は直径0.2～0.4mの円形で、深さは0.2～0.4m位である。P6、P7の柱穴はB-2住居址の床で貼られていた。

床面中央やや東寄りに焼土、灰の堆積が検出された。焼土の範囲は楕円形を呈し、床土が0.1mの深さまで赤変しており、相当長期に亘って火熱を受けており、炉址と推定される。

焼土は、B-2住居址の壁溝によって東側部分が切られていた。焼土の中には焼骨の破片が多く混入しており、原形を保っているものはなく、全て白色化した細片である。

この住居址で発見された遺物は、埋土内で縄文土器の破片が得られただけで、床面では全く発見されていない。

〔B-1 住居址〕 (挿図第6・7図、PL2b)

本住居址は、B-2、B-3グリッドに位置し、C-2住居址と重複して検出された方形プランを呈する住居址である。検出状況は、C-2住居址と同様であるが、西壁、南壁はC-2住居址の埋土内であったのでとらえられず、床面の精査で壁溝が検出されたので、全体のプランを推定した。

検出された壁溝から規模を推定すると、南壁3.0m、北壁2.7m、南北2.6mを有し、若干ゆがんだ方形を呈し、C-2住居址の様な方形張り出し部は検出されていない。

埋土は単層であり、前述の様にC-2住居址との前後関係は不明である。埋土の土質は、南部パミスが若干混入する黒色土で全体として軟らかくパサパサで粘性もない。

壁高は、周壁の一部が確認された北壁西寄りで0.45m、東壁は0.2mを測る。この差は、自然地形が東に向う緩斜面であることに起因している。壁は床面に対して70度の傾斜で検出上縁に続いている。

東壁以外の三方壁の直下には壁溝が検出されている。壁溝の巾は、0.15～0.20m、床面からの深さは0.1～0.15mを測る。床面はC-2住居址の床面レベルと殆んど差がなく、基本層序第V層中位を床面としている。床面のレベル差は、0.03～0.04mの範囲で、ほぼ平坦で固く締まっている。

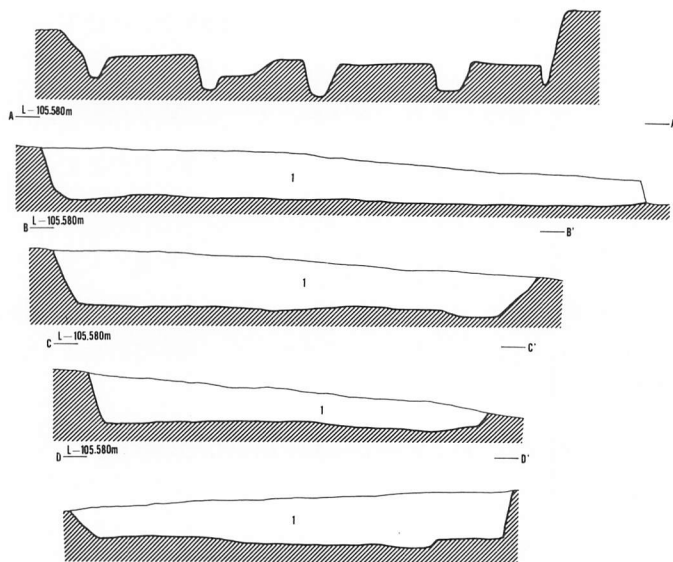
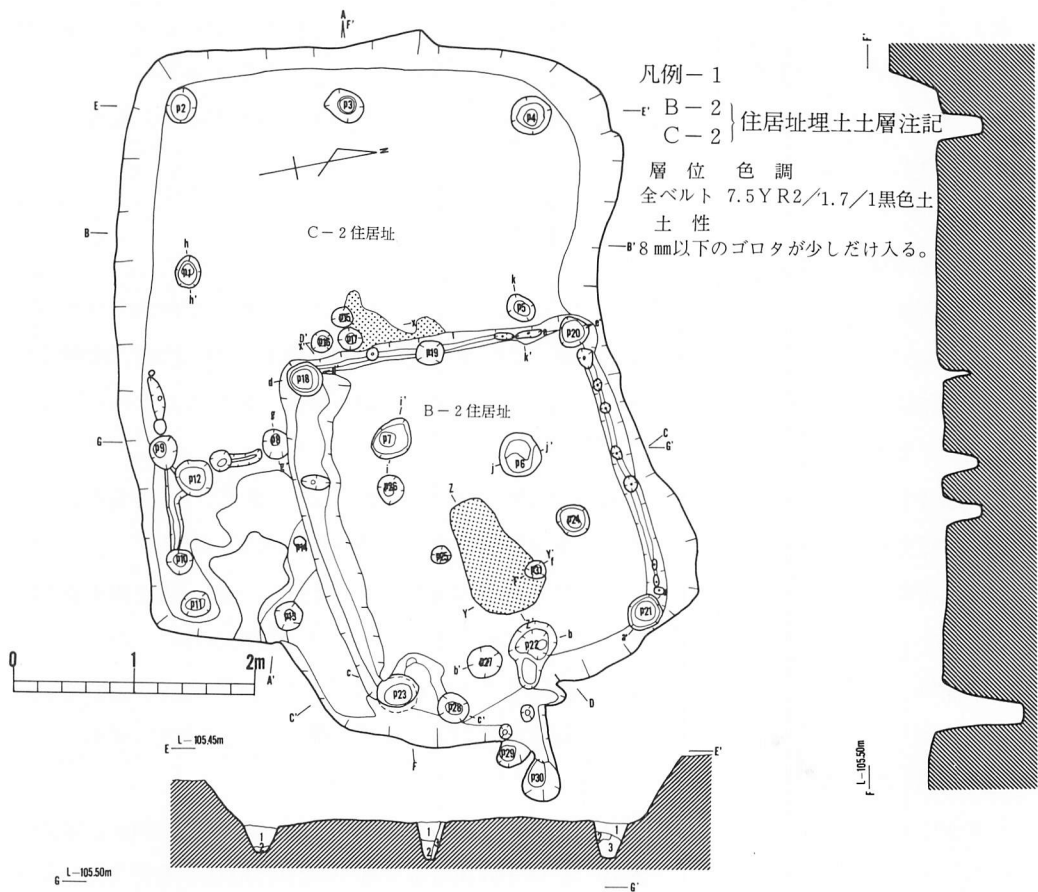
柱穴状のピットは、壁溝中心線上に7コ、床面に6コ、東壁外に3コ合わせて16コが検出されているが、その中で主柱と考えられるピットは壁溝内に検出されたP18～P23までの6コである。

床面中央やや東寄りに、床面より若干盛り上がっている焼土が検出され、炉址として考えた。焼土の範囲は木炭と灰を中心に東西両側にみられ、床土が0.1m赤変しており、相当長期に亘って使用されていたことが推定される。また、焼土や灰の中に多くの焼骨の破片が混入していたが、原形をとどめているものはなかった。

遺物は、埋土内より縄文土器の破片が得られたが、床面では全く出土していない。

〔A-2住居址〕 (挿図第8-A図、PL3a)

この住居址は、A-2グリッドに位置し、調査区域外にまたがって検出され、精査は検出

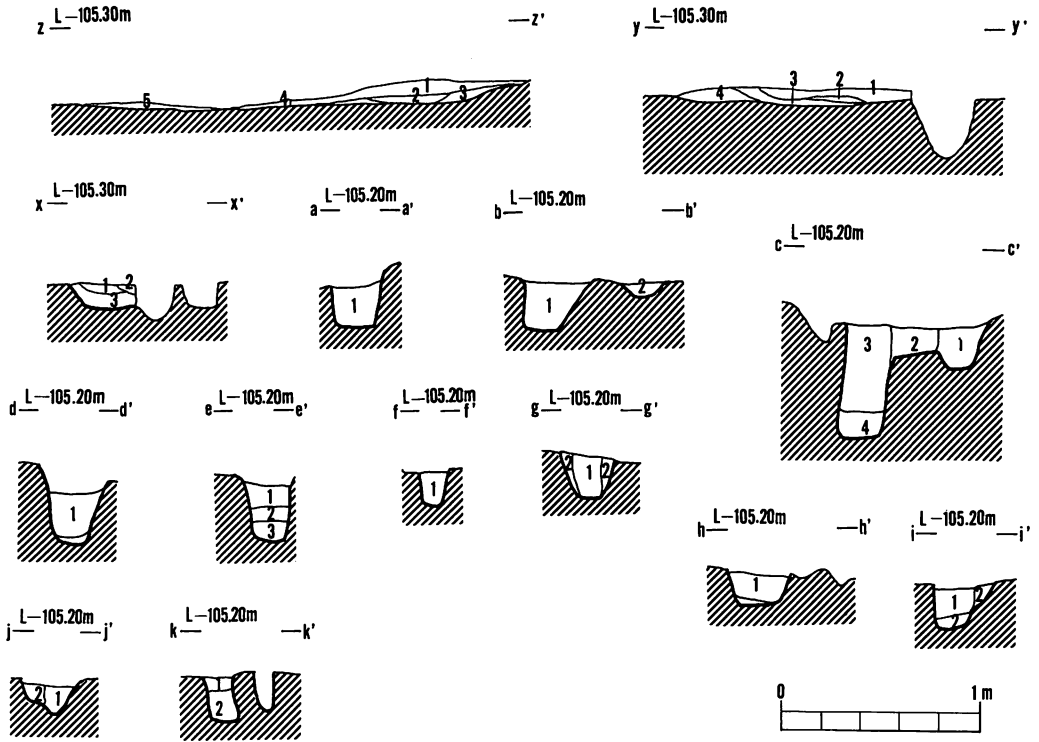


凡例-2

B-2・C-2住居址柱穴計測表

	縦	横	深さ		縦	横	深さ
—A' P 1	27	22	25	P 17	19	21	19
P 2	30	24	23	P 18	28	30	31
P 3	27	35	36	P 19	20	23	22
P 4	30	35	32	P 20	25	25	36
P 5	25	23	33	P 21	31	30	38
P 6	36	37	24	P 22	30	40	33
P 7	35	33	29	P 23	29	35	68
P 8	24	21	28	P 24	25	28	25
P 9	28	22	18	P 25	15	16	9
P 10	20	22	18	P 26	26	21	31
P 11	21	25	14	P 27	26	30	10
P 12	30	33	14	P 28	25	28	40
P 13	25	24	15	P 29	24	29	45
P 14	9	10	9	P 30	33	32	13
P 15	19	18	9	P 31	18	17	18
P 16	19	18	15				

挿図6. B-2・C-2住居址



凡例-1

B-2・C-2 住居址炉址土層注記

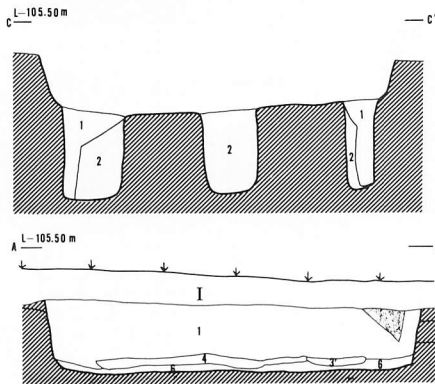
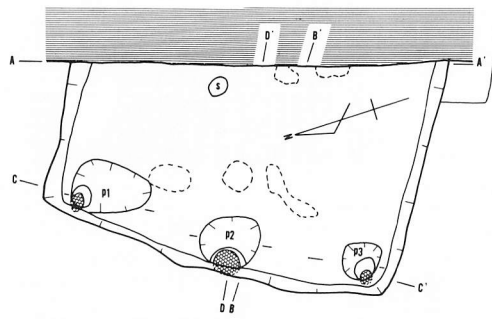
層位	色調	土性
1	7.5Y R4/4 褐色	焼土が入るが灰の方が大目。
2	10Y R4/3 黄褐色	灰、ネタネタ、2層、3層の間に炭化材入る。
3	7.5Y R2/1 黒色土	砂質、褐色系黒、粘性中。
4	7.5Y R2/2 黒褐色	炭化材が全部床直に若干3層入り込む。粘性中の弱。
5	5Y R5/6 明赤褐	汚れ焼土。

凡例-2

柱穴埋土土層注記

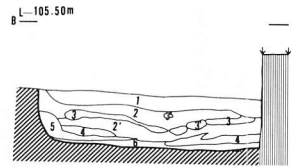
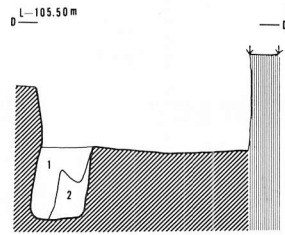
層位	色調	土性
P1	1 5Y R1.7/1 黒色土	バサバサの感あり、混入無、やややわらかくしめる。粘性小。
P2	1 7.5Y R2/1 黒褐色	混入物無、ややかため、粘性中、カステラ状断面。
	2 7.5Y R2/1 黒褐色	5mm土のゴロタが混る、断面やや粗、やわらかい、粘性中。
P3	1 5Y R1.7/1 黒色土	カステラ状断面、かた目のブロックあり、粘性中。
	2 5Y R1.7/1 黒色土	1より少し褐色系、やわらかい、粘性中。
	3 10Y R2/3 黒褐色	ゴロタが入る、やややわらかい、粘性強。
P4	1 7.5Y R2/1 黒色土	かた目のブロック入る、粘性小、1mm土の浮石少し。
	2 7.5Y R4/4 褐色土	純の壁土に似る、ネタネタ。
	3 7.5Y R2/1 黒色土	ややかた目のブロック入る、5mm土のゴロタが多目に入る。
P5	1 7.5Y R2/1 黒色土	かたい、粘性中、混入物無
	2 7.5Y R2/1 黒色土	やわらかい、ゴロタが少し、粘性中。
P6	1 7.5Y R2/1 黒色土	かた目の土のブロックが入り、全体も混りあり、4mm土のゴロタわずか、粘性小。
P7	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	1よりややかた目、やや明るく見える。粘性小。
	2 7.5Y R2/1 黒色土	ゴロタが多目、ガチッとかたい、粘性小。
P8	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	バサバサの感じ、ゴロタわずか、フカフカする、粘性小。
	2 10Y R2/1 黒色土	2mm土のゴロタ少々、かたくしめる、粘性小。
P18	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	混入物無、粘性強。
	2 7.5Y R1.7/1 黒色土	数mmの浮石が多く入る、やややわらかい、粘性に湿りあり、粘性強。
P20	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	混入物無、ややかたくしめる、粘性中大粒のゴロタが少し入り、表面粗、やわらかい。
	2 7.5Y R1.7/1 黒色土	2mm土の浮石わずか、粘性強、やわらかくしめる。
P21	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	1mm程の浮石少々、大小ゴロタわずか上部ややしめるが、全体もろい、粘性中、表面粗。
P22	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	1mm程の浮石少々、大小ゴロタわずか上部ややしめるが全体にもろい、粘性中、表面粗。
P23	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	混入物なし、かたくしめる、粘性強、10mm大のゴロタが入り、表面粗なり、(ボロボロ)、湿気あり、粘性強。
	2 10Y R1.7/1 黒色土	ややかたくしめる、粘性中、混入物無
P27	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	混入物なし、かたくしめる、粘性強。
P28	1 7.5Y R1.7/1 黒色土	混入物なし、かたくしめる、粘性強。
P31	1 10Y R1.7/1 黒色土	混入物なし、ややかたくしめる、粘性強。

挿図7. B-2・C-2 住居址柱穴土層図



凡例-2

A-2 住居址
 縦 横 深さ
 P₁ 40 65 68
 P₂ 42 50 63
 P₃ 33 32 81

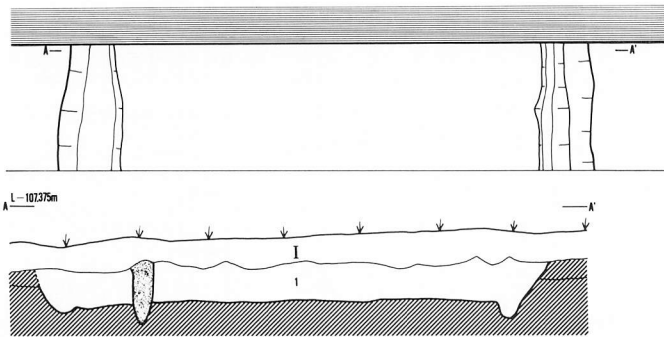


凡例-1

A-2 住居址埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5Y R2/1 黒色土	中振多し、10mm土南部パミスちよつと、ややかたくしまる。粘性中。
2	7.5Y R2/1 黒色土	中振入る（1層程でない）やや、やわらかい。粘性中。
2'	7.5Y R2/1 黒色土	ややかたくしまる。粘性やや強い
3	10Y R1.7/1 黒色土	ブロックとして入る。黒色土
3'	10Y R1.7/1 黒色土	灰白色のにじみをもつ。やや、やわらかい。粘性少。
4	7.5Y R2/1 黒色土	汚れゴロタ層、やわらかい。粘性中。
5	10Y R1.7/1 黒色土	やわらかい。ゴロタわずか。粘性中。
6	10Y R1.7/1 黒色土	黒色シルト。

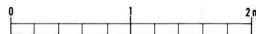
挿図8-A A-2 住居址



凡例-3

D-5 住居址埋土土層注記

層位	色調	土性
1	10Y R1.7/1 黒色土	シルト



挿図8-B. D-5 住居址

された路線内についてのみ行った。

検出状況は、基本層序第Ⅱ層中で土の軟かい部分が検出され、保水力があつて雨上がりにもなかなか乾燥せずに湿っていたので存在が確認された。

検出された規模は、南北上縁で約3.0m、東西は南壁で2.0mが検出されたが、調査区域外にまたがっているので、全体の規模は不明である。平面プランは方形もしくは長方形を呈すると考えられる。

埋土は基本的には2層に分類され、1層は基本層序第Ⅱ層の土質に近似し、中礫浮石が混入した黒色シルトであり、2層は1層に更に南部浮石の混入した土である。東西軸の土層図では変化がみられたのでそのまま記録したが、南北軸では層序として分類するだけの根拠が得られず、相違の明確な2層に分類した。

壁高はもっとも深い北壁、西壁で0.5mを測り、垂直に近い角度で床面に続いている。壁の状態は非常に良好で良く締まり固い。床面は、ほぼ水平に近く平担である。床面上では柱穴が検出され、掘り方の直径0.30～0.65m、深さは床面より0.65mを測る。据え方は、直径0.15～0.2m位で全て掘り方の底面に接し、掘り方、据え方ともに円形プランを呈する。確認された据え方の位置から判断すると、柱は住居址の壁際に寄せて立てられており、柱穴の立割りで観察すると、柱の上部が住居中央に若干寄る様に立てられている。

本住居址で得られた遺物は、埋土内からは縄文土器の破片と砥石が出土したが、床面では全く出土しなかった。

[D-5 住居址] (挿図第8-B図、PL3b)

本住居址はD-4、D-5グリッドにまたがって位置し、遺構検出の段階では遺構の存在に気づかず、基本層序の土層図作成のために壁面のクリーニング中にはじめて遺構の存在が判明した。調査区域内では約1.0m巾だけが検出確認され、確認された部分についてのみ精査を行った。粗掘りの段階で破壊したのは、全体の何%にあたるかは不明である。

遺構の掘り込み面は、セクションで観察すると北壁は基本層序第Ⅱ層、南壁では第Ⅲ層の上面であることから、実際の掘り込み面は第Ⅱ層中であろう。D-4 柵列址はD-5 住居址の埋土と床面を壊して掘り込まれている。

検出された規模は、南北上縁で直径4.4mを測り、東西は調査時の破壊のため不明である。検出された部分から推定すると方形もしくは長方形の平面プランを呈するであろう。

埋土は全層同じであり、ボサボサしたシルト質の黒褐色土で、基本層序第Ⅱ層と近似した土質であるが、基本層序第Ⅱ層より柔らかい。

壁高は、検出面より0.3m、現地表面より0.5mを測る。壁は若干の傾斜をもって壁溝に

続いている。壁溝は、南壁、北壁ともに検出されているが、南壁では巾が0.15～0.3mと不揃いで、深さは0.05mである。北壁では、巾約0.1m、深さ0.15mを測り大方揃っている。床面は一部に凹凸がみられたが、全体としては平坦であり踏み締めによって固く調査の段階では肌分け現象がみられた。

炉址、柱穴ともに検出されていない。

埋土内や床面上から遺物は全く発見されていない。

〔A-4 住居址〕 (挿図第9図、PL4a)

この住居址は、A-3、A-4、B-4の各グリッドに位置し、東半分は路線外にまたがって検出された住居址である。

検出状況は、粗掘りの際に十和田a火山灰がブロック状に混入した土の堆積が観察され、奈良時代もしくは、平安時代の遺構であろうと考えられたが、平面プランがとらえられず基本層序Ⅳ層の中礫浮石層上面まで掘り下げてプランを確認した。この様に十和田a火山灰の堆積がみられたことは、十和田a火山灰が降下した時代にも、掘り込みが深いために完全に埋没せずに若干窪みの状態であったことが推察される。

規模は、南北上縁直径で6.6mを測り、検出されたプランは半円状を呈するので、ほぼ正円に近い円形プランを呈するとおもわれる。検出されたのは全体規模の約半分と推定される。

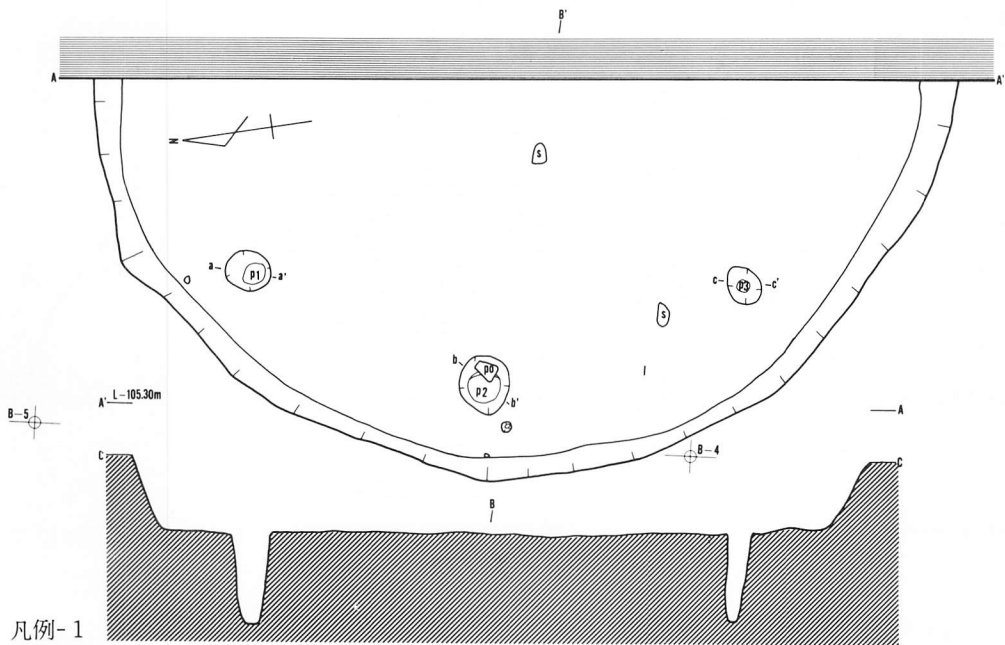
埋土は、基本層序第Ⅲ層が全面を覆い、Ⅲ層上面の窪みに十和田a火山灰が堆積している。埋土4層には、極暗褐色～黒褐色を呈するシルトに中礫浮石や南部浮石が多く混入した土であり、下層に行くに従って粘性が強くなる傾向がみられ、全体として良く締まり固い。壁際の埋土には壁の崩れによる南部浮石の混入が多い。

壁高は、検出面からの深さで北壁0.7m、南壁は0.6mを測る。壁の状態は良好であるが南部浮石層を掘り込んでいるので南部浮石の崩落がみられ、立上りは床面に対して約70度の傾斜を示し、若干上開きになっている。床面は基本層序第Ⅶ層の暗褐色の粘土質シルトであり、北側の床面より南側の床面が0.1mほど低い、凹凸がみられず、踏み締めによって固い。壁溝は検出されていない。

柱穴は3コ検出され、掘り方の規模は直径で0.3～0.5mの円形～楕円形プランを呈し、深さは0.5～0.6mを測る。柱穴の埋土は黒色土に南部浮石や中礫浮石が混入した土である。柱の据え方は検出できなかった。

炉址は検出されていないので、未調査部分に位置しているものと考えられる。

本住居址に直接伴う遺物としては、柱穴(P-2)の内部に埋没していた粗製土器の完形品が1個体のみであり、床面からは出土しなかった。埋土内では繊維土器の破片が発見され



凡例-1

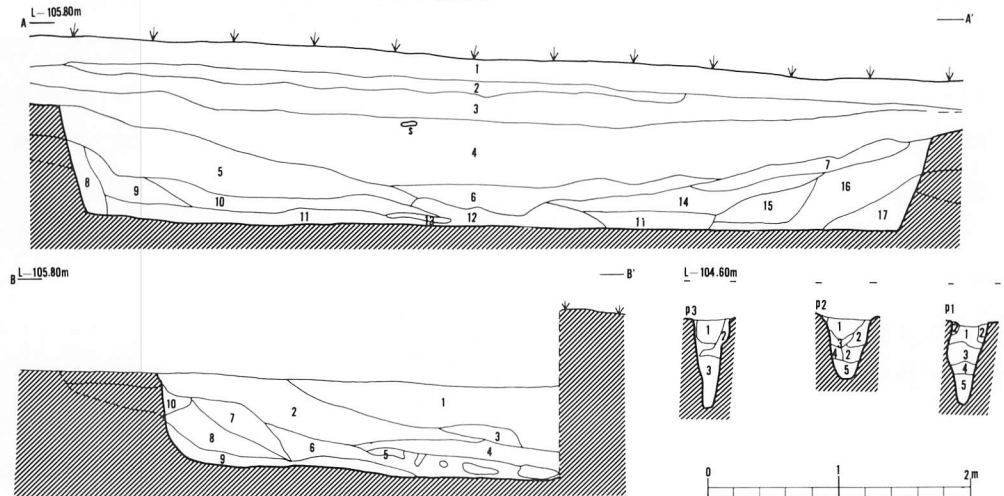
A-4 住居址埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR2/2	黒褐色 表土
2	2.5YR5/3	赤褐色 十和田 a、純な堆積でない(ラミナなし、ブロック状?)かたくしまる。
3	10YR1.7/1	黒色土 白色浮石混り、黒色土、かたくしまる、粘性中。
4	10YR1.7/1	黒色土 20mm土の褐色浮石が少し入る、粘性強、砂質。
5	7.5YR2/1	黒色土 中敷が沢山入り、基本層序IV-a-bにも近いがゴロタ大小がちよっと入る。かたい、粘性強。
6	7.5YR1.7/1	黒色土 中敷が少なくゴロタが多目に入る。
7	5YR1.7/1	黒色土 ゴロタが多く入る、中敷多く入る、かたい、粘性強。
8	7.5YR1.7/1	黒色土 ゴロタが多目に入る、粘性強、かたくしまる。
9	7.5YR2/1	黒色土 中敷多く入り、ゴロタわずか、かたい、粘性大。
10	5YR1.7/1	黒色土 9層よりやや黒味を帯る、ゴロタわずかかかたい、粘性大。
11	5YR1.7/1	黒色土 砂質が強い、ゴロタわずか、かたい、粘性大。
12	7.5YR3/2	黒褐色 褐色がかかる、15mm土のゴロタ少し、かたくしまる、粘性大、砂質弱い。
13	10YR7/6	明黄褐色 シルト質、やわらか目にしまる、粘性大、砂質弱い、上記5層に当る。
14	7.5YR2/1	黒色土 20mm以下の大粒のゴロタが多い、黒っぽく見える、かたい、粘性大。
15	5YR1.7/1	黒色土 20mm以下の大粒のゴロタが多い、かたくしまり粘性大。
16	7.5YR2/1	黒色土 10mm以下の中粒のゴロタが多い、かたくしまり粘性大。
17	5YR1.7/1	黒色土 比較的浮石少ない、ややかたくしまる、粘性大。

凡例-2

A-4 住居址

	縦	横	深さ
P ₁	32	36	66
P ₂	40	45	87
P ₃	28	33	67



挿図9. A-4 住居址

凡例-1

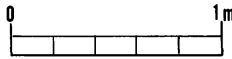
C-6 住居址埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR2/1黒色土	中振が全体に多い。褐色系に見える。20mm土のゴロタが全体に少し入る。かたくしまり、粘性中。

凡例-2

C-6 住居址土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR2/1黒色土	焼土のにじみ、中振多目、ゴロタ少し、かため。
2	5YR2/2黒褐色	焼土層、5mm土のゴロタ多目、中振少し、やわらかい。
3	7.5YR2/1黒色土	黒が目立つ、ゴロタなし、やわらかい。



B L-105.60m ——— B'



L-105.80m
A ——— A'



挿図10. C-6 住居址

縄文土器以外の土器片は含まれていない。

[C-6 住居址] (挿図第10図、PL4b)

本住居址は、C-6 グリッドで検出された小規模で掘り込みの浅い住居址である。

検出状況は、検出作業中には住居址の存在を明確にとらえられず、一部基本層序第IV a層を掘り下げ中に床直上に埋没していた完形土器が発見され、はじめて住居址の存在が確認された。確認された土層は基本層序第IV b層であるが、南西部のプランは検出作業の不手際により不明である。

規模は、長径3.2m、短径2.55mを測り、検出されたプランより推定すると、東西に長い楕円形の平面プランを呈する。

埋土は単層であり、全体的に中振浮石の混入が多く、少量ではあるが南部浮石の混入もみられ、褐色に近い色調を呈する。基本層序第IV a層に酷似している。

壁高は、検出面より0.2mを測るが、南西部は不明確である。検出された壁は垂直ではなく、若干の傾斜で床面に続いている。床面はほぼ水平に近く平坦である。床面は基本層序第V層上面であり、自然面よりは固く、踏み固められたものと推察される。

床中央やや東寄りに炉址が検出されたが、壁溝や柱穴は検出されなかった。柱穴については壁外の周囲も注意したが検出されなかった。

炉址は、地床炉であり、東側に長径 0.3 m、短径 0.1 m の細長い河川礫を配置している。石囲い炉としての可能性を考え、精査に注意したが、石の抜かれた痕跡は検出されなかった。焼土の範囲は、直径 0.4 m 位の円形に検出され、床土が 0.1 m まで赤変していたが、純焼土層というよりも他の土と混合しており、焼土の量は多くない。

本住居址に伴う遺物として、床面中央南寄りと西寄りから縄文土器が 2 個体発見された。他にも繊維土器の破片が出土した。

2. 溝 址

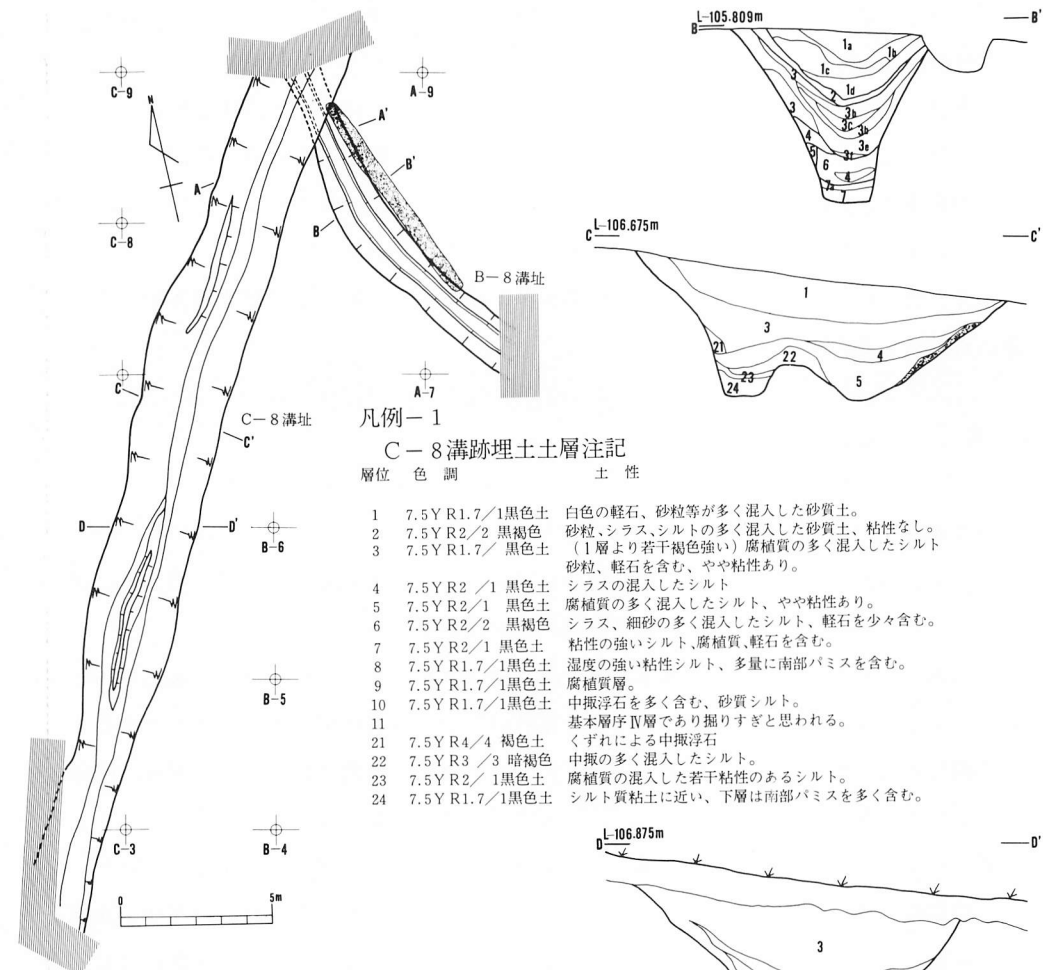
[C-8 溝址] (挿図第11図、PL5a)

この溝は調査区域南端 C-2 より北端の B-8 に至る全長 30m におよび、南は更に調査区域外にのびている溝址であるが、調査区域内のみ精査を行った。

検出面は、南半部では基本層序第Ⅱ層下面で確認されたが、全長に亘って検出されたのは基本層序第Ⅲ層上面である。切り込み面は第Ⅱ層下面から第Ⅲ層上面にかけてであろう。

規模は上巾のもっとも広い位置で 3.0 m、もっとも狭い位置で約 2.5 m を測る。深さは地表面よりの最深値で 1.4~1.5 m、南端部で検出面より 0.5 m、ほぼ中間の C-5 グリッドの位置で 0.9 m、北端部で 1.25 m を測り、北端部に寄るに従って次第に深くなっていく。現在の自然地形では、地表面が C-5~C-6 グリッドの付近がもっとも高く、南端、北端ともにこの地点より低くなっている。法面は溝底に近いほど狭くなっており、底面に対して 40~50度の傾斜を示している。C-6~C-7 グリッドの間の西側法面には中段を作りだしているが、東側法面にはみられない。D-4~D-5 グリッドの間は溝底が 2 条に分かれており、西側の溝底と東側の溝底の間には区切る土手がある。土手の高さは 0.1 m を測り、西側溝底レベルの方が高い。2 条に分かれた溝の前後関係は、埋土土層で観察すると東側の方が後に埋没していることが判る。溝の断面形をみると、掘り方上縁が広く、溝底が 0.3~0.5 m で比較的浅い箱薬研掘りといえることができる。

埋土は地点によって若干差があり、10~11層に分類されたが、全体として大同小異である。黒色から黒褐色のシルトに砂粒、中振浮石、南部浮石が混入した土が基調であり、相違点は混入物の多少、粘性の有無、色調の微妙な変化等である。最下層には腐植質の多く混入した粘性の強い黒色シルトの堆積がみられるが、流水を伴ったとする証明はとれていない。堆積土の層序は整然とした堆積状況を示しており、自然堆積によって埋没したことをあらわして

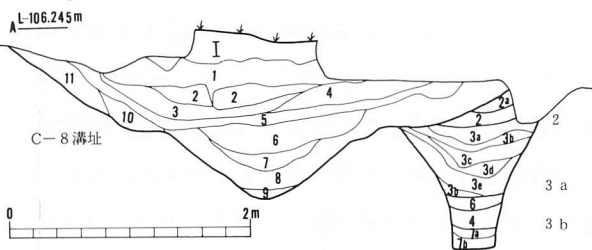


凡例-1

C-8 溝跡埋土土層注記

層位 色調 土性

- | | | |
|----|-----------------|----------------------------|
| 1 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 白色の軽石、砂粒等が多く混入した砂質土。 |
| 2 | 7.5Y R2/2 黒褐色 | 砂粒、シラス、シルトの多く混入した砂質土、粘性なし。 |
| 3 | 7.5Y R1.7/ 黒色土 | (1層より若干褐色強い) 腐植質の多く混入したシルト |
| 4 | 7.5Y R2/1 黒色土 | 砂粒、軽石を含む、やや粘性あり。 |
| 5 | 7.5Y R2/1 黒色土 | シラスの混入したシルト |
| 6 | 7.5Y R2/2 黒褐色 | 腐植質の多く混入したシルト、やや粘性あり。 |
| 7 | 7.5Y R2/1 黒色土 | シラス、細砂の多く混入したシルト、軽石を少々含む。 |
| 8 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 粘性の強いシルト、腐植質、軽石を含む。 |
| 9 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 湿度の強い粘性シルト、多量に南部バミスを含む。 |
| 10 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 腐植質層。 |
| 11 | 7.5Y R4/4 褐色土 | 中振浮石を多く含む、砂質シルト。 |
| 21 | 7.5Y R4/4 褐色土 | 基本層序IV層であり掘りすぎと思われる。 |
| 22 | 7.5Y R3/3 暗褐色 | くずれによる中振浮石 |
| 23 | 7.5Y R2/1 黒色土 | 中振の多く混入したシルト。 |
| 24 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 腐植質の混入した若干粘性のあるシルト。 |
| | | シルト質粘土に近い、下層は南部バミスを多く含む。 |



凡例-2

B-8 溝跡埋土土層注記

層位 色調 土性

- | | | |
|-----|-----------------|---|
| 1 a | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 全体として砂質である、白色の軽石、南部バミス粒の混入がみられる。しまりは良い。 |
| 1 b | 7.5Y R2/2 黒褐色 | 黒色土より若干赤味あり、質的には1 aと同じ。 |
| 1 c | 7.5Y R2/3 極暗褐色 | 幾分粘性のあるシルトが混入している。その他質的に1 aと同じ。 |
| 1 d | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 1 b層と殆んど同じであるが非常に軟かくフカフカしている。砂質。 |
| 2 | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 十和田 a pumise が混入した黒色土層で軟かい、全体的に砂質で褐色シルトの混入もみられる。南部バミスの混入はみられず |
| 3 a | 7.5Y R2/1 黒色土 | 軽石岩、十和田 a (若干) を含む砂質シルトである |
| 3 b | 7.5Y R2/1 黒色土 | 軽石粒を多く含む、十和田 a は全く含まない。砂質シルト。 |
| 3 c | 7.5Y R2/1 黒色土 | 中振浮石 (汚れている) を多く含む層で全体としては砂質である。 |
| 3 d | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 3 b 層と殆んど同一様、若干赤味が強い。 |
| 3 e | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 3 c 層同様であるが中振浮石を多く含む。 |
| 3 f | 7.5Y R1.7/1 黒色土 | 非常に多くの南部バミスと中振浮石を含む。 |
| 3 g | 7.5Y R2/2 黒褐色 | 非常に多くの中振を含む、若干しまり強し。 |
| 4 | 7.5Y R5/6 明褐色 | クスレによる南部浮石の集積単層。 |
| 5 | 7.5Y R5/6 明褐色 | 若干粘性のあるシルト質火山灰層。この部分は掘りすぎによって露出した地山層。 |
| 6 | 7.5Y R2/2 黒褐色 | 非常に硬くしまった層で南部バミスを多く含む |
| 7 a | 7.5Y R3/2 黒褐色 | 流水によって洗浄を受けた川砂堆積層である。 |
| 7 b | 7.5Y R3/2 黒褐色 | 流水によって堆積した粘土質シルト。 |

挿図11. B-8・C-8 溝比

いる。

埋土内より得られた遺物は縄文時代の繊維土器の破片が主であるが、D-6グリッド付近の埋土中位層で「雁又鍬」が1本発見されている。

[B-8 溝址] (挿図第11図、PL5b)

この溝址は、A-6から遺跡の北端B-8に亘って検出され、長さ12mにおよぶ溝址であり北端はC-8溝址によって破壊されている。南端は次第に東に向きを変え、更に路線外にのびているので全長は不明である。

検出状況は、本遺構の位置付近は、基本層序第Ⅲ層が耕作によって削られている部分が多く、場所によっては耕作土の下層が基本層序第Ⅳ層の中礫浮石層の上面である場合もあり、部分的に認められる第Ⅲ層の上面で遺構が検出されているので、切り込み面は第Ⅲ層上面もしくは第Ⅱ層中であろう。

規模は、検出面上縁の巾で最大巾1.7m、最小巾1.3m、検出面からの深さはもっとも深い北端で1.5m、もっとも浅い南端で1.2mを測る。溝底レベルは南端部と北端部では0.15mの差がみられ、北に向うほど低くなっている。溝の横断面についてみると、溝底に向かって次第に狭くなってきた法面が、上縁より1.0m位下がった位置で0.3m～0.5mまで狭くなりそれより下位の法面は垂直に近く、溝底の巾は0.3m～0.4mである。底面には凹凸がみられず平坦である。断面形でみると上部薬研掘り、下部箱掘りである。

埋土は大別すると6層に分類される。すなわち、埋土1層は基本層序第Ⅱ層とⅢ層の混入した土であり、埋土2層は十和田a火山灰をブロックとして含む土である。埋土3層は中礫浮石を多く含む土であり、4層は崩落した南部浮石の純層である。さらに5層は南部浮石が混入し良く締まった土、6層はシルトと川砂の交互層である。それらの土層はさらに細分された場合もある。この溝の埋土最下層には、シルトと川砂の交互層がみられるので流水を伴っていたことは確実に用水路として利用されている。堆積土は整然とした層序を示し自然状態で埋没したことを表している。

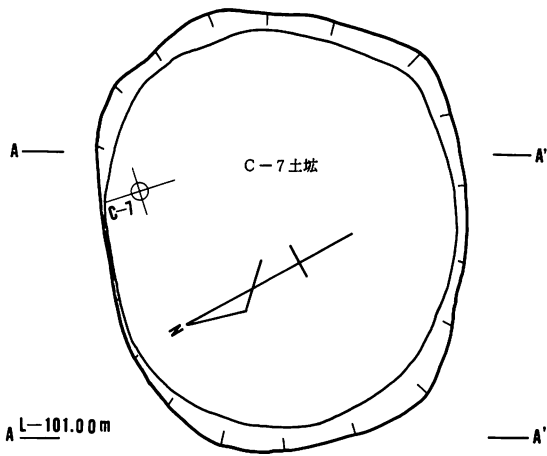
埋土内で発見された遺物は全て縄文時代の繊維土器の破片である。

3. 土 壇

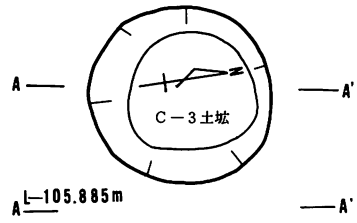
[C-3 土壇] (挿図12図、PL6d)

この土壇は、C-3グリッドで検出され、検出面は基本層序第Ⅲ層の上面で確認された。

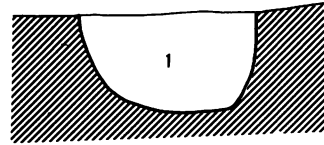
規模は、検出面上縁直径0.9m、深さは検出面より0.5mを測り、上縁より底面が若干狭



A 101.00m



A 105.885m



凡例-1

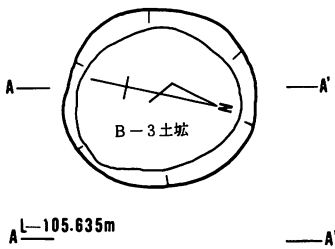
C-7 土壇埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR2/1 黒色土	砂質シルト、中振粒、砂粒少量のゴロタを含む
2	7.5YR1.7/1 黒色土	砂質シルト、南部パミスが大量に混入し他に砂粒も混入している。
3		基本層序、第IV層、中振浮石層
4	7.5YR2/2 黒褐色	中振浮石が大量に混入している。
5	7.5YR2/1 黒色土	シルト
6		基本層序第V層と同じ
7		6層に南部パミスが大量に混入した土。
8		基本層序第VI層、南部浮石層

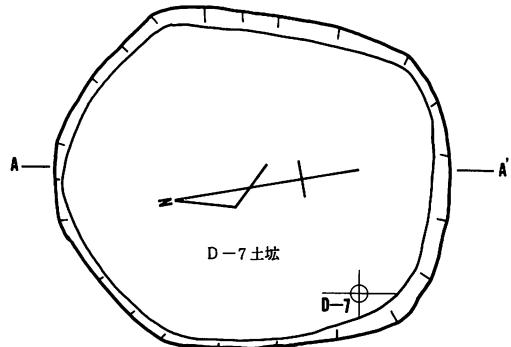
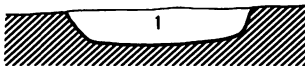
凡例-2

D-7 土壇埋土土層注記

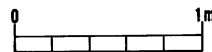
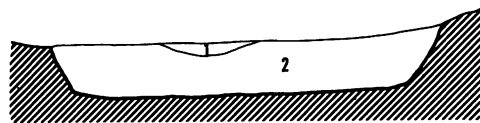
層位	土性
1	埋土2層よりやや赤味をおびる。
2	基本V層とほとんど同じ、やややわらかくしまる、粘性大。



A 105.635m



A 105.65m



凡例-3

C-3・B-3 土壇埋土注記

層位	色調	土性
1	7.5YR2/1 黒色土	シルト、軟かい。

挿図12. 土壇

く、断面形はバケツ形を呈する。平面プランは円形である。

埋土は単層で、基本層序第Ⅱ層に酷似する黒色土に砂粒や南部浮石を多く混入したシルトである。

遺物は全く出土していない。

〔B-3 土坑〕 (挿図第12図、PL6c)

本土坑はB-3グリッドに位置し、遺構検出確認面は基本層序第Ⅲ層の上面である。

規模は、上縁直径で1.0m、深さ0.2mを測り、平面形は円形を呈し、断面形では底面が狭く浅い土坑である。

埋土は単層で、砂質の黒色土で少量の南部浮石が混入している。締まりもなく、全体としてボサボサした粘性の少ない土質である。

遺物は全く出土していない。

〔C-7 土坑〕 (挿図第12図、PL6b)

この土坑の検出状況は、C-8溝の精査中に東側法面と溝底に基本層序第Ⅵ層の南部浮石を欠いている部分が検出され、土坑の存在が判明した。従ってC-8溝址によって大半が破壊されているので、残存が確認された東側の一部と、土坑底面付近だけの部分的な精査である。

検出された全体の規模は、東西2.3m、南北2.0m、切り込み面の確認された深さ0.5mを測り、平面プランは楕円形を呈する。上縁より底面の方が若干狭く、断面形はビーカー形を呈する。

埋土は、基本層序第Ⅴ層とした南部浮石と黒色土の混入した若干粘性のある土に酷似しており、相違点は幾分軟かく、少し南部浮石の混入が多いことである。基本層序第Ⅳ層の中振浮石層は全面覆っていた。

出土遺物は、埋土下層より繊維土器の破片が出土した。

〔D-7 土坑〕 (挿図第12図)

本土坑は、遺跡北西部D-7グリッド付近に位置し、第Ⅴ層の土器包含層を精査後、第Ⅵ層の南部浮石層の上面で南部浮石を欠いている部分が検出された。

実際の遺構掘り込み面が第Ⅵ層南部浮石層の上面もしくは第Ⅴ層中と考えられる。

規模は、東西1.8m、南部2.1m、検出面からの深さ0.3mを測る。平面プランは南北に若干長い五角形状を呈する。埋土はC-7土坑の埋土と全く同じで、基本層序第Ⅴ層に酷似

した土質であるが、第Ⅴ層と比較した場合、全体として幾分軟かく、粘性が強い。底面は暗褐色シルトの第Ⅶ層上面でありほぼ平坦である。

遺物は、胎土に繊維の混入された尖底土器が出土した。

4. 柵列址状遺構

本遺構は、A-3 からD-4 に達するD-4 柵列址、B-2 からA-2 に達して南折しさらに東に折れるB-2 柵列址の2条が検出されている。正確には柵列址であるかは不明であるが、柵列址に非常に酷似しているので一応柵列址状遺構とした。

これらの柵列址は、表土層下の基本層序第Ⅱ層の上面で検出され、本遺跡ではもっとも新しい時代に比定される遺構である。

[D-4 柵列址] (挿図第13図、PL6a)

規模は、巾0.2m、深さ0.2m、長さ1.0～1.5mの布掘り溝を柵の一単位とし、全部で11単位が検出されている。一単位の溝の中には2本～5本の柵木を埋め込んでいる。柵木の埋め込み角度は現地表に対してほぼ直角である。

埋土は、表土のシラス土壌が基調であり、変化はみられない。遺物は出土していない。

[B-2 柵列址] (挿図第13図、PL6a)

本柵列址はD-4 柵列址と若干違い、布掘り埋め込みの場合と、単独打ち込みの場合がみられる。東端で南折し、5.5mでさらに東方向に折れている。布掘り溝の規模はD-4 柵列址と同様である。埋土はD-4 柵列址と同様である。遺物は鉄片が出土している。

5. 焼土遺構・土器包含層 (挿図第14図)

焼土遺構は全調査区域内で8カ所検出されているが、それらはD-5、D-7、C-6、C-7、B-6、B-7の各グリッドに位置している。これらの焼土は全て同一の土層内において検出された。レベルでは高低差がみられるが、これは地形が東に向かう緩斜面に起因するもので、人為的なものではない。

検出された土層は、基本層序第Ⅴ層の上面から0.05mの範囲である。焼土の広がりはいくつによって差はあるが、0.4～0.8m位の円形に広がっている場合が多かった。焼土の厚さは0.1～0.15m位が多い。住居址に伴う焼土である可能性を考え、住居址プランの検出に注意したが

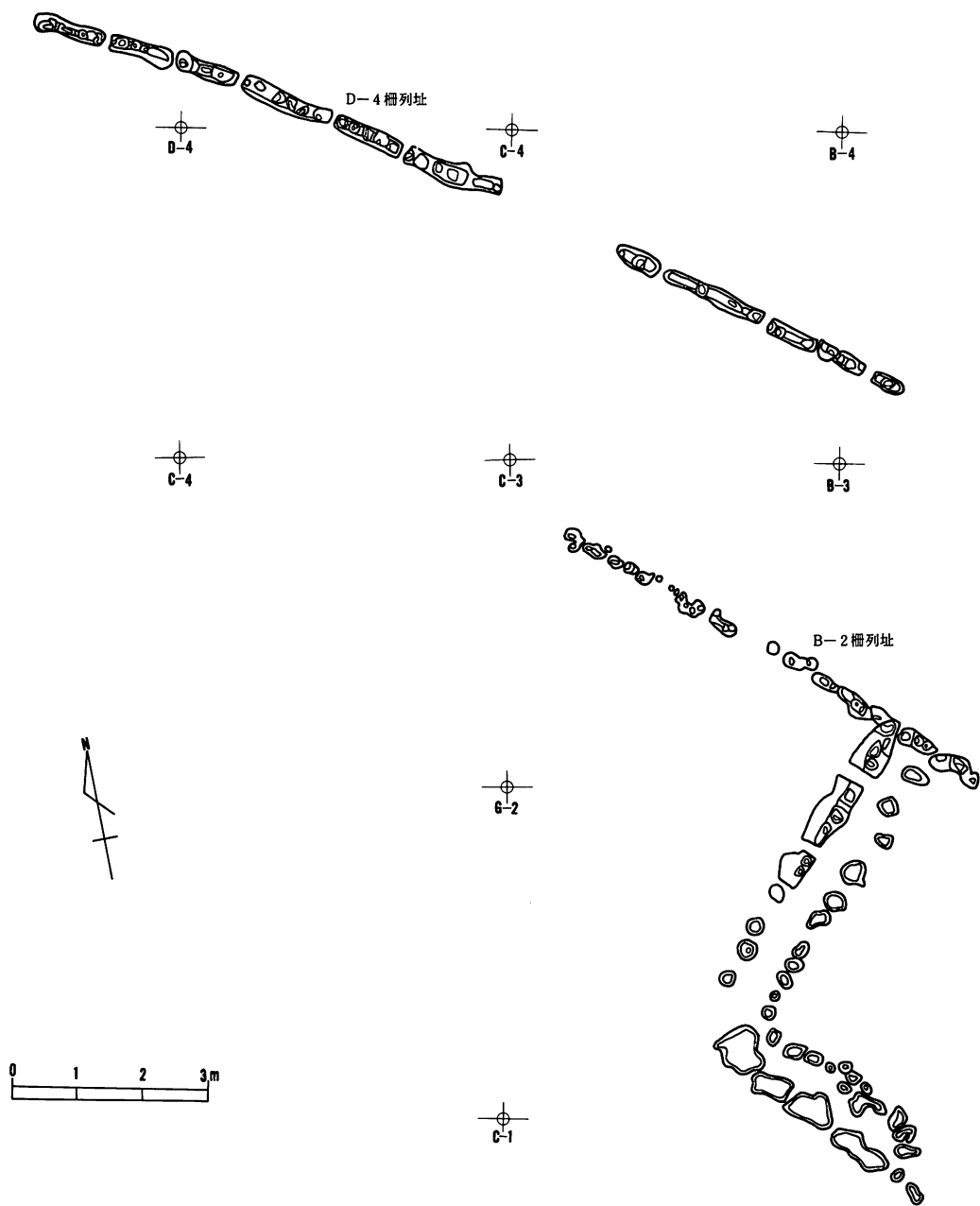
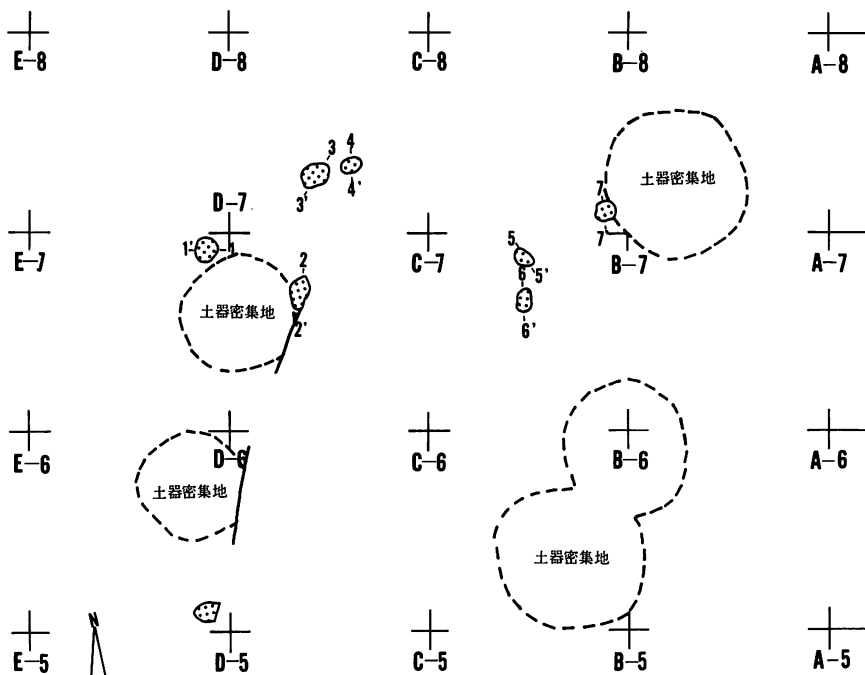


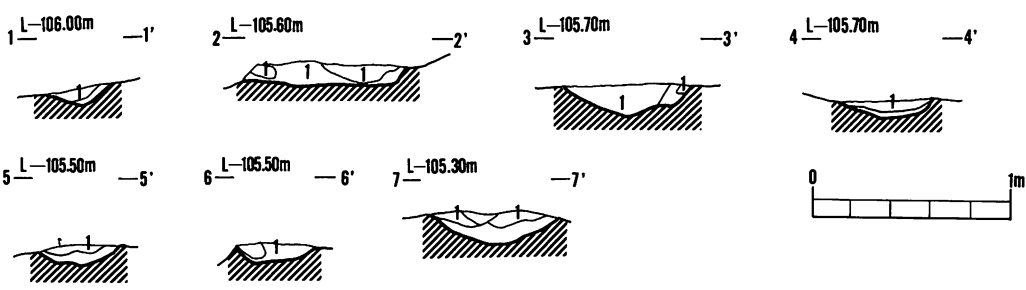
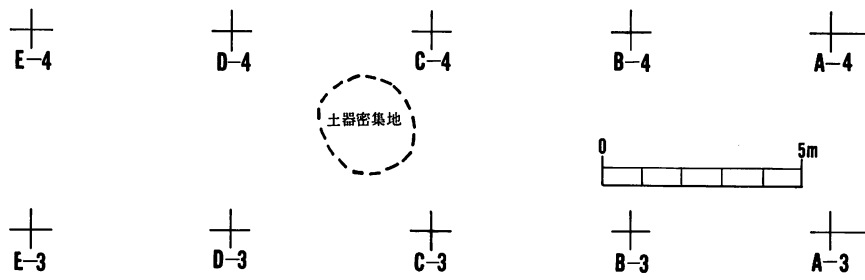
插图13. D-4 · B-2 柵列址



凡例-1

早期土器包含層焼土土層注記

層位 色調 土性
 1 5 YR5/8明赤褐色土 焼土、ゴロタ含みであり、V層の焼土であろう。
 V層以外の混入無、他は漸移的に上下のV層に移るので明確に区分しえず。



挿図14. 焼土遺構・土器密集地

住居址は検出されなかった。性格はそれを確定づける資料を欠いているので不明である。

焼土の検出された基本層厚第V層は、層厚の約 $\frac{1}{2}$ （0.1～0.15m）が繊維土器の包含層である。その中でも6カ所に密集し、焼土遺構とは至近距離に位置している。土器片の中に含まれていた底部破片の中に丸底に乳頭状突起のついた破片が5コ体分含まれているので、大半は縄文時代早期末に比定される土器であろう。これらの土器が遺構に伴う可能性を考え、精査に注意したが、前記の焼土以外には確認できなかった。

焼土遺構と土器包含層との直接的な関係は不明である。

第2節 遺物

1. 土器

土器は復元個体（一部復元個体を含む）10個体以外は全て破片であり、破片の中には口縁部33個、体部3206個、底部29個の各部位が含まれている。

沢内B遺跡出土の土器は、大別すると縄文土器、土師器、陶器の3群からなり、その中でも縄文土器がもっとも多く、全体の99%を占める。縄文土器の中では胎土に繊維の混入した繊維土器の破片が多く出土し、主体を占めている。本遺跡出土の土器分類では繊維土器の細分に重点をおいて行った。分類は、文様や地文の種類によって3類に大別しさらに7グループに細分を試みた。しかし、出土層が0.1～0.15mと薄層であるので、時間的に差がなく共伴土器の可能性が強く、グループがそのまま時期差を表しているのではない。繊維土器以外の縄文土器は縄文が施文された土器と、口縁部や体部に種々の方法で施文されている土器の2種類に細分される。しかし、胎土に繊維の混入しない土器は数も少ないので、あまり細分することはさけた。土師器の破片は7個だけであるので一括して説明を加えた。陶器の破片はわずか3個だけであるので若干の説明を加えただけである。

沢内B遺跡出土土器の分類基準には以上の様な事柄に留意し次の通りである。

- | | | |
|-------|-------------|--------------|
| 第 I 群 | 縄文土器 | 1) 斜縄文 |
| 第 1 類 | 繊維土器 | 2) 撚糸文 |
| A. | 体部に沈線文 | 3) 羽状縄文 |
| 1) | 口縁部文様帯をもたない | 4) 原体末端処理が明瞭 |
| 2) | 口縁部文様帯をもつ | C. その他 |
| B. | 体部縄文 | 口唇部に刻み目をもつ |

第 2 類 繊維の混入しない土器

- A. 体部が縄文だけによる施文
- B. 縄文以外による施文

第 II 群 土 師 器

土師器片を全て一括

第 III 群 陶 器

陶器の破片を一括

なお、本報告書には実測図は全て収録したが、拓本図は、スペースの関係で分類されたグループのなかで代表的な土器片だけを収録した。

第 I 群 縄文土器

第 1 類

胎土に繊維の混入した土器群である。さらに 3 グループに細分される。

A 種 (挿図第 15-1、18-1・2・3、P L 7-1、10-1・2・3)

体部に沈線文の施された土器で、完形土器 1 個体と 3 個の破片が含まれ、このグループの土器は全て手捏ねの小形土器である。出土層位は、(1) は D-7 土壇埋土、他は B-8 溝址埋土内よりそれぞれ出土した。さらに細分が可能である。

[1] 口縁部文様帯をもたずに、体部全面に申または棒状工具の先端によって、不規則な沈線が施されている。沈線は縦方向だけの場合と、斜めとか横方向にも施された破片もある。全体の器形は、丸底に乳頭状突起のつく鈍角尖底土器である。口唇は丸味をもち、口縁は小波状を呈する。内面調整は、指頭による押圧となでがなされ、ザラザラした触感があり、器厚は 0.5 cm を測る。胎土には砂粒の混入がみられ、繊維の混入は非常に少ない。色調は褐色を呈し、部分的に黒斑がみられるが焼成は良い。

[2] 口縁部に文様帯をもち、沈線の施し方には規則性がみられる。半截竹管で、口縁に平行する沈線と直交する沈線を引き、その両側に互いに逆方向を向く 2 本の平行山形文が施されている。小破片のため器形は不明であるが、破片のカーブから推定すると丸底に近い底部形態とおもわれる。口縁部は直立し、口唇は若干丸味をもつが平担になでられている。内面調整はなでとおもわれるが、全体としてザラザラしている。器厚は 0.4 cm を測り、色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

B 種

体部全面に縄文の施文された土器群であり、繊維土器の 99% を占める。これらの土器片の出土層位は基本層序第 V 層の上半部で出土したもので、本遺跡内で検出された遺構の埋土内で出土した繊維土器の破片も、本来は同じ層に包含された土器であろう。4 グループに大別

され、さらに細分される。

- [1] (挿図第15-2~8、16-9・10、18-4~16、19-17、P L 7-2~6、9-1・2、9-5~8、10-4~16)

体部に斜縄文の施された土器で、単節と複節に細分される。

a：単節斜縄文の施文された土器である。地文は原体R-L、L-Rともにみられ底部まで齊一に施されている。器形は丸底に近い鈍角な尖底深鉢と推定される。口縁部は外反するもの、直立するものともにみられ、波状を呈するものはない。口唇は平坦な破片が多いが、一部に丸味をもつものがある。口縁部に0.5 cm巾位の無文部をもち、肥厚する破片もある。胎土には砂粒と、少量の繊維が混入する。器厚は0.5~1.0 cmであり、内面調整はなでのみでザラザラしている。焼成は良好である。

b：複節斜縄文の施文された土器である。地文は原体L-R-L、R-L-Rともに使用され、体部上半では齊一に、下半から底部にかけては不整に施文されている。復元された土器から形態を推定すると、丸底に小突起のついた鈍角尖底深鉢形であろう。口縁部は外反気味のもの、直立するものがあり、施文された後に口唇がなでられ、肥厚している破片が多く、口縁部上端に無文部を残すものはない。胎土には砂粒と繊維が混入し、内面はなで調整で幾分ザラザラした破片もある。器厚は0.6~0.8 cmで焼成は良好である。

- [2] (挿図第19-18~20、P L 11-18~20)

体部に撚糸文の施された土器である。数は少ない。次の様に細分される。

a：斜行する不整撚糸文の施文されたものである。原体はL-Rを使用し、各条間は密着している。小破片であることと、底部を欠失しているので器形は不明である。口縁部は外反し、口縁には小起伏がみられるが波状というほどではない。口唇は丸味をもつ。胎土には砂粒と繊維が少量混入している。器厚は0.8 cm前後で口縁部が若干薄い。内面は指頭押圧となどで調整がなされ、少し凹凸がみられる。焼成は良好である。

b：縦走する撚糸文の施文されたグループである。原体はL-Rを使用し各条間には0.1 cm~0.2 cmの間隔がみられる。口縁端には0.3~0.5 cmの無文部を残す。口縁部は直立し、口唇は平坦になでられている。小破片であるので器形は不明である。胎土には少量の雲母、砂粒、繊維が混入されている。器厚は0.9 cm位で内面調整はなでがなされ良好であるが、焼成は良くない。

- [3] (挿図第16-11・12、19-21~29、P L 11-21~29)

体部に羽状縄文の施された土器である。さらに細分される。

a：同一の原体または別の原体を使用し、回転方向を変えて羽状に施文されている。原体にはL-R-L、R-L-Rの複節とR-Lの単節がある。このグループは全て縦方向の羽

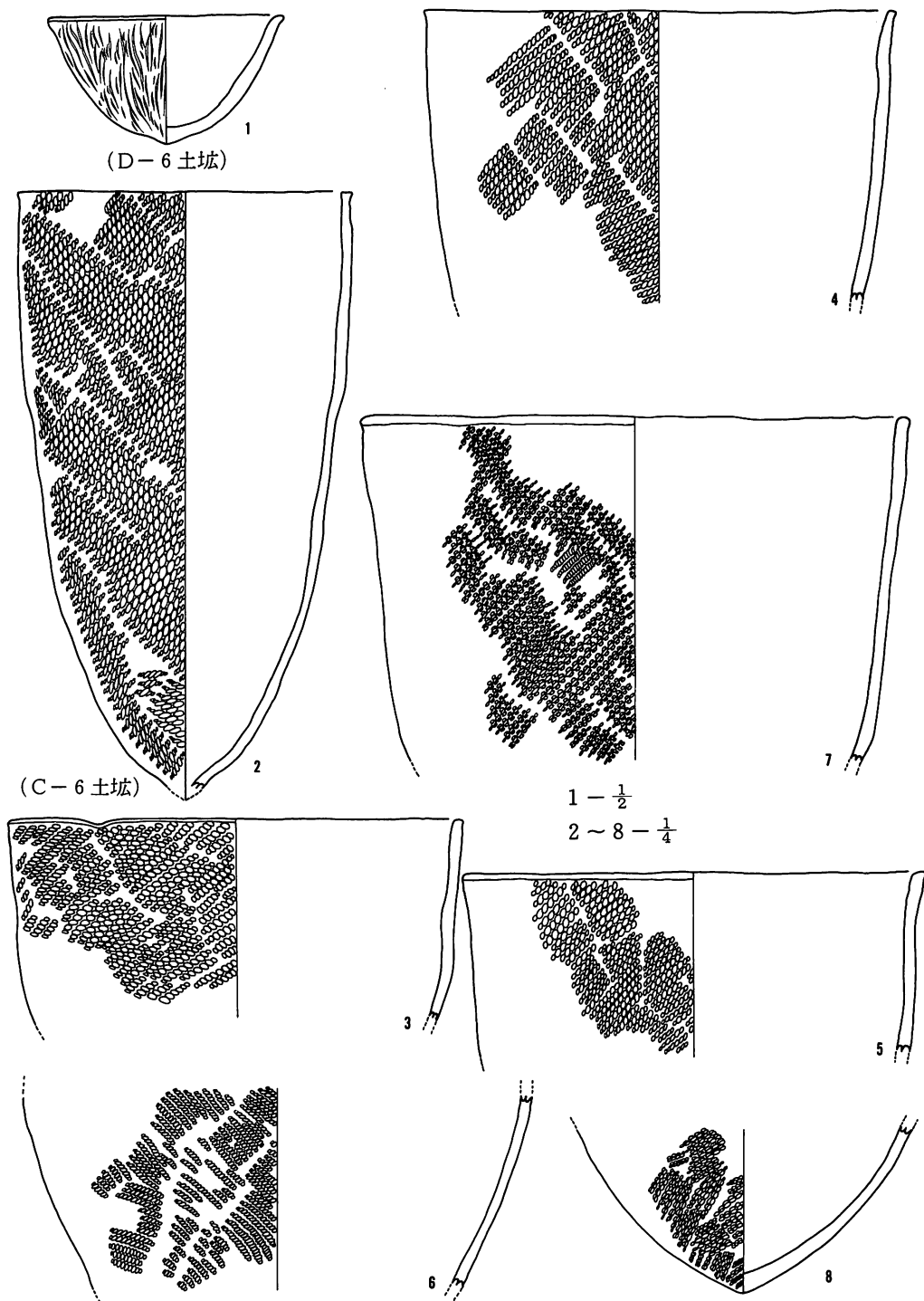


插图15. 土器实测图

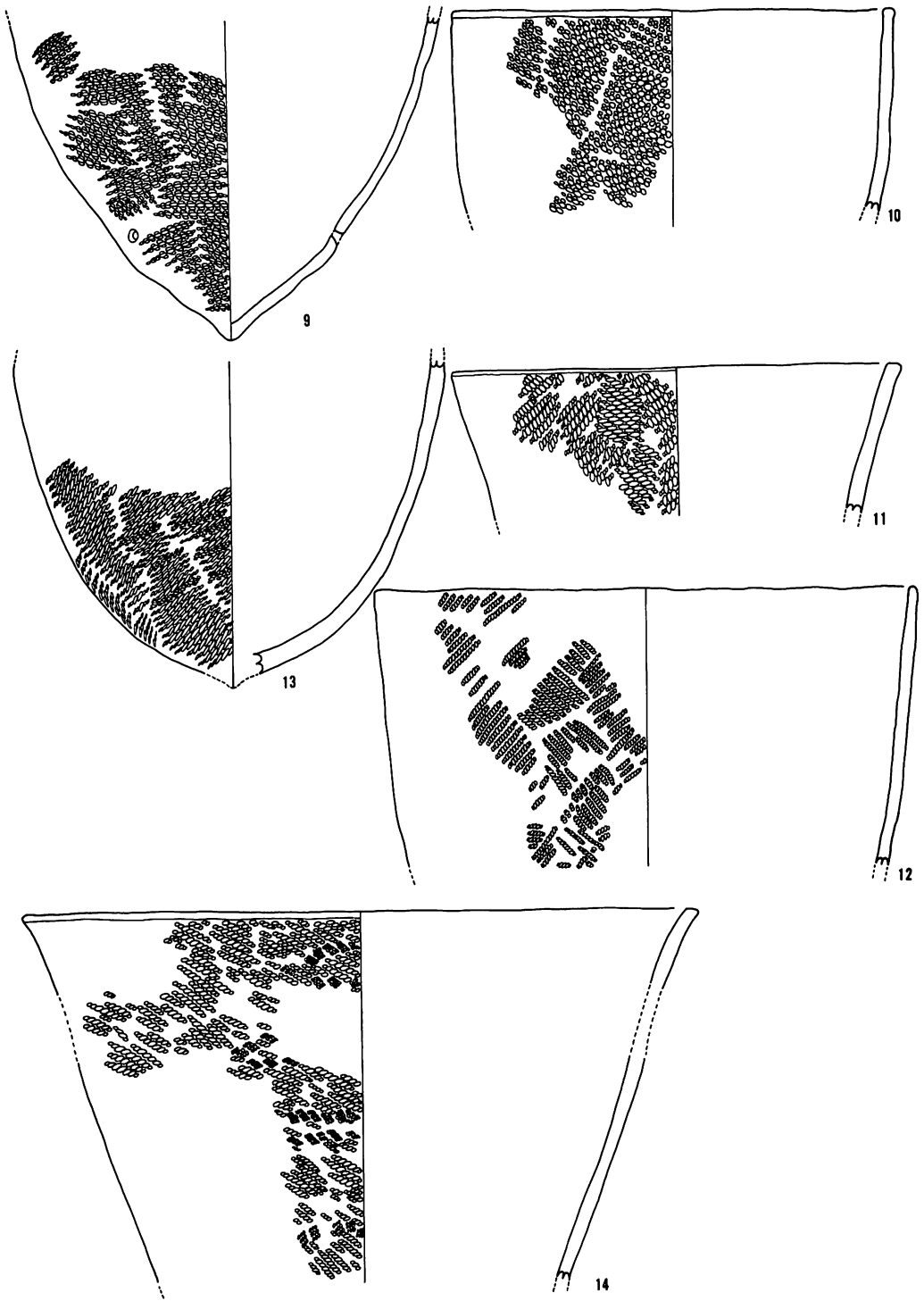
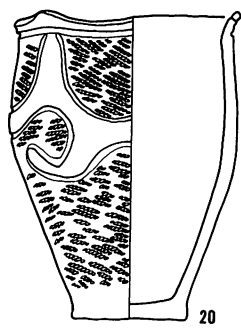
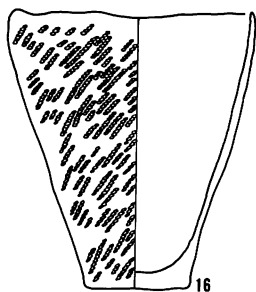
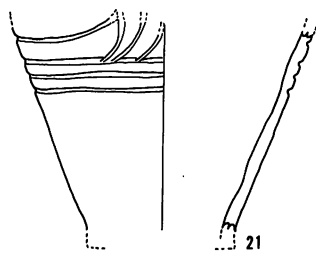
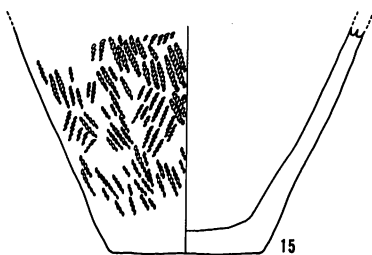


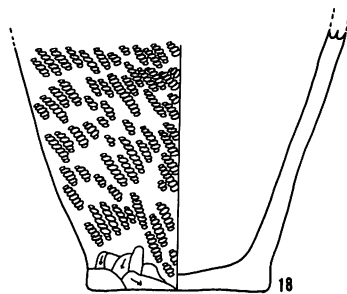
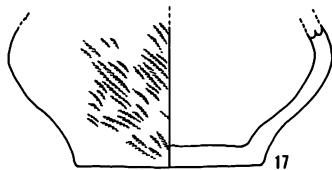
插图16. 土器实测图 $\frac{1}{4}$



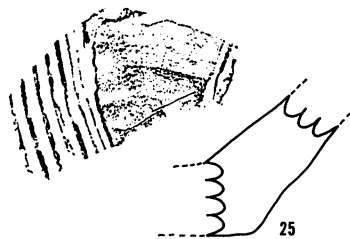
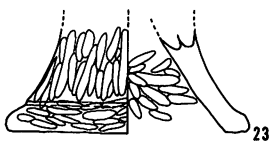
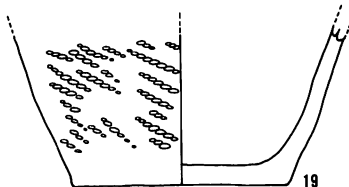
(C-6 住)



(A-4 住)



(C-6 住)



15 · 16 · 18 · 19 · 20 · 21 — $\frac{1}{4}$
 17 · 22 · 23 · 24 · 25 — $\frac{1}{2}$

挿図17. 土器実測図

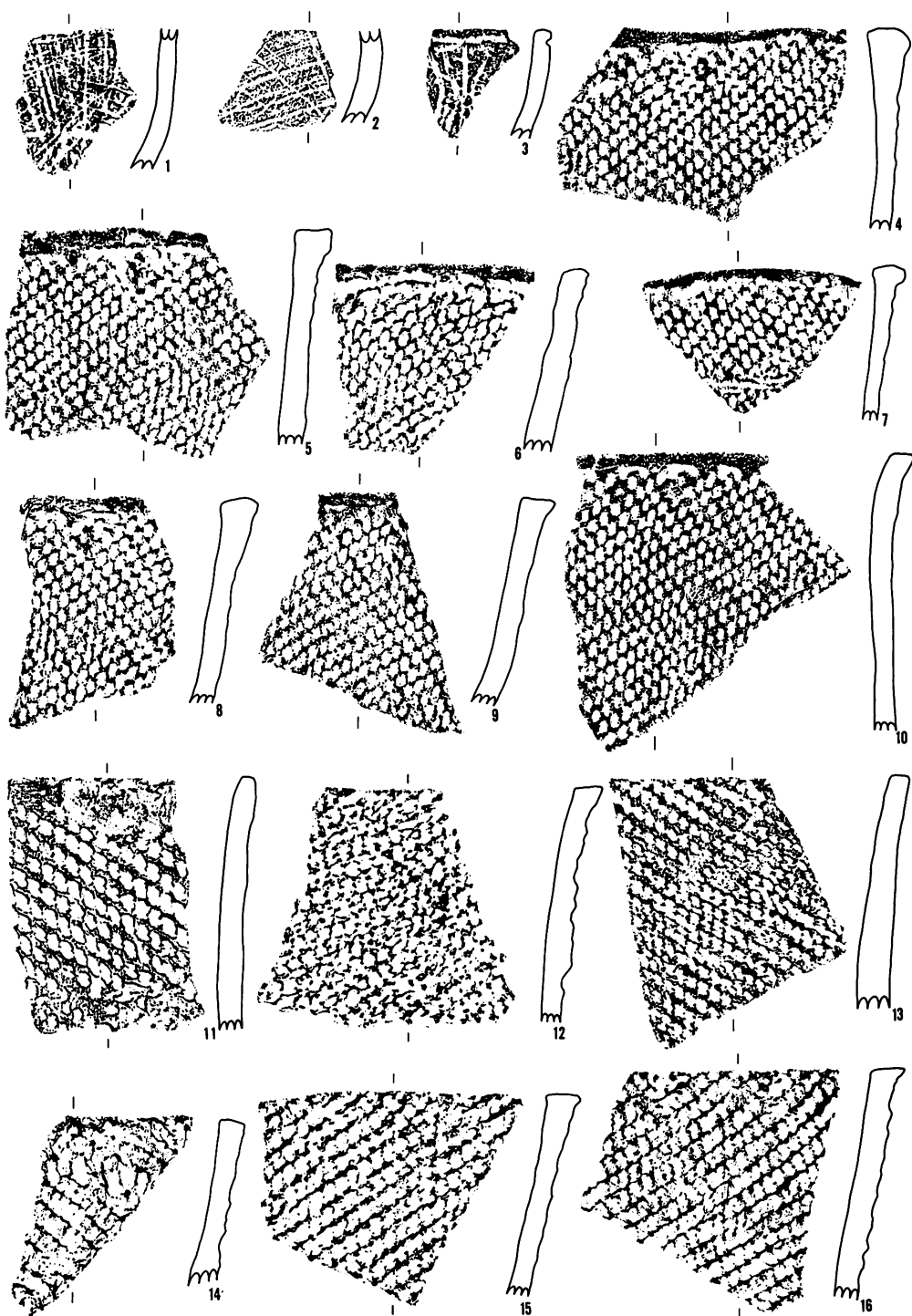


插图18. 土器拓本图 $\frac{1}{2}$

状を呈する様に回転されている。小破片であるので器形は明確でない。口縁部は外反気味で、口唇は丸いもの、丸味をもつもの、平坦なものがある。胎土には少量の砂粒と繊維が混入されている。器厚は0.6～0.9 cmで体部が厚くなる傾向がある。内面の調整は指頭による押圧となでだけであり、幾分凹凸がみられザラザラした触感がある。色調は褐色を呈するが、一部に黒斑がみられ、焼成は良くない。

b：撚りの違う2本の原体の末端を連結させて回転し、羽状縄文を施文している。原体はL-R、R-Lの単節である。このグループは全て横方向の羽状縄文である。小破片であるので器形は不明である。口縁は外反気味かもしくは直立である。口唇は丸いもの、平坦なものがある。胎土には砂粒と少量の繊維が含まれる。器厚は0.6～0.8 cmで内面調整はなでだけでザラザラしている。焼成は良好である。

[4] (挿図第16-13・16、19-30~32、20-33~38、P L 11-30~32、12-33~38)

ここには原体の末端処理の明瞭な土器を入れた。本来は斜縄文の一種かとも考えたが、本報告書では1グループとしてとらえた。原体はL-R-Lの複節、R-Lの単節が使用され、原体の末端を別の縄や、同じ縄の一部で結束して回転させたものである。別の縄にはL-R、R-Lの単節、Lの無節を使用している。復元個体でみると器形は鈍角尖底深鉢形である。口縁は直立するものが多く、口唇には丸いものと、平坦なものがある。胎土には砂粒と繊維が少量混入している。器厚は0.4～0.6 cmで内面はザラザラしている。焼成は良い。

C種 その他 (挿図第20-38、P L 12-38)

この土器は口唇部に刻み目をもつものである。口唇を外側に若干そぎ、その口唇に篋状工具の押圧による刻み目がつけられている。口縁部の内面が外反しているので、口縁上端に寄るに従って器厚が薄くなる。体部縄文は剝離しているので不明である。小破片であるので器形は不明である。胎土には砂粒と繊維が混入している。器厚は0.9 cm、口縁部0.6 cmを測る。内面はザラザラし焼成も悪い。

第2類

胎土に繊維の混入しない土器群である。さらに文様で2大別される。

A種 (挿図第17-15~19、20-39~48、P L 8-2~8、12-39~48)

ここには縄文だけが施文された、粗製土器を一括した。出土層位は基本層序第Ⅱ層から第Ⅳ層上位面迄の範囲である。Ⅱ層、Ⅲ層で出土した遺物の中には耕作による攪乱で下層より浮き上がった土器片も含まれているであろう。

体部地文は原体L-R、R-Lの単節が使用されている。複節はみられない。器形は復元土器では深鉢形であり、浅鉢形や他の器形を呈するものはない。口縁部は外反するもの、内湾

するもの、直立するもの等がみられ、口縁部の内面をそいで薄くした例が1点ある。口唇は丸いもの、平坦なものがみられる。胎土には粗砂が多く混入し、中には雲母が混入した破片が含まれている。器厚は0.5～0.7cmが多く、内面は良くなでられている。色調はクリーム色に近いものから、褐色まで各種みられる。中には黒斑のみられる破片もある。焼成は良好である。

B種

このグループは、体部や口縁部に縄文以外の文様が施文された土器である。さらに3グループに細分が可能である。

[1] (挿図第17-20、20-49・50、21-51・52、P L 8-1、12-49~52)

ここには口縁部に磨消部をもつ土器を入れた。

口縁部に口唇と平行する沈線を引き、口唇と沈線間の縄文を全て磨消している。さらに体部も沈線で区画し磨消を行っている。器形は全て深鉢形である。口縁部の内面には隆帯をもつものがあり、さらに表面の口縁部にも隆帯を作りだし、丸棒による刺突痕をもつものもみられる。波状口縁を呈し、突起部に窓をもつ場合もある。口唇は全て丸い。胎土には雲母や粗砂が混入し、器厚は0.5～0.7cm位が多い。色調は褐色～暗褐色が多く、内面は良くなでられ平滑である。焼成は良好である。

[2] (挿図第17-21、21-53~56、P L 12-53~55、13-56)

ここには、縄文をもたずに沈線だけによる文様のものを入れた。器表全面が良く研磨され、非常になめらかである。文様は竹管状工具を使用して3本の沈線を引いて施文している。口縁部は外反しかつ波状を呈し、口縁突起部には竹管側面圧痕による刻み目がつけられている。器形は鉢形である。胎土には砂粒の混入が多くみられる。器厚は0.5cm位で内面調整はなでであるが粗雑である。色調は黒色に近く、全体的に黒斑が多く焼成が悪い。

[3] (挿図第21-57~61、P L 13-57~62)

非常に細い原体を使用しているものと、前二者に属しない縄文土器を入れた。原体は非常に細いL-R、R-Lの単節である。口縁部に平行沈線を引き、口縁部文様帯と体部を区画し、口縁部上端と沈線間に縄文を施す場合としない場合がある。口縁は外反するものも多く、口唇部には刻みや突起をもつものがある。器厚は0.3～0.4cm位である。胎土は良く精選され、焼成も良い。

第Ⅱ群 (挿図第17-22・23、21-63~67、P L 8-9、13-63~67)

ここには土師器を一括した。

土師器の破片は9個出土しているが、復元された個体はない。器種別では甕形の破片8個、

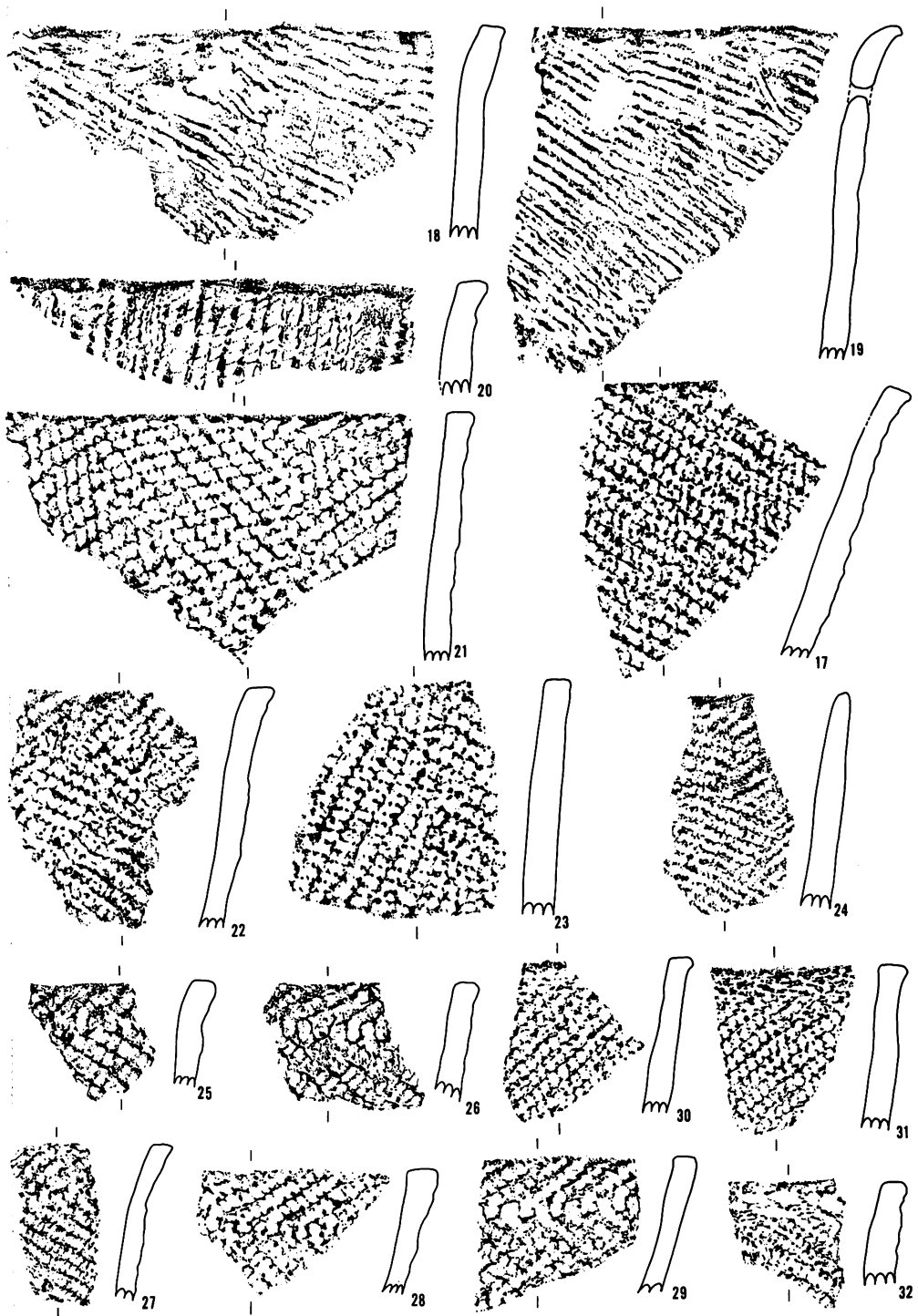


插图19. 土器拓本图 $\frac{1}{2}$

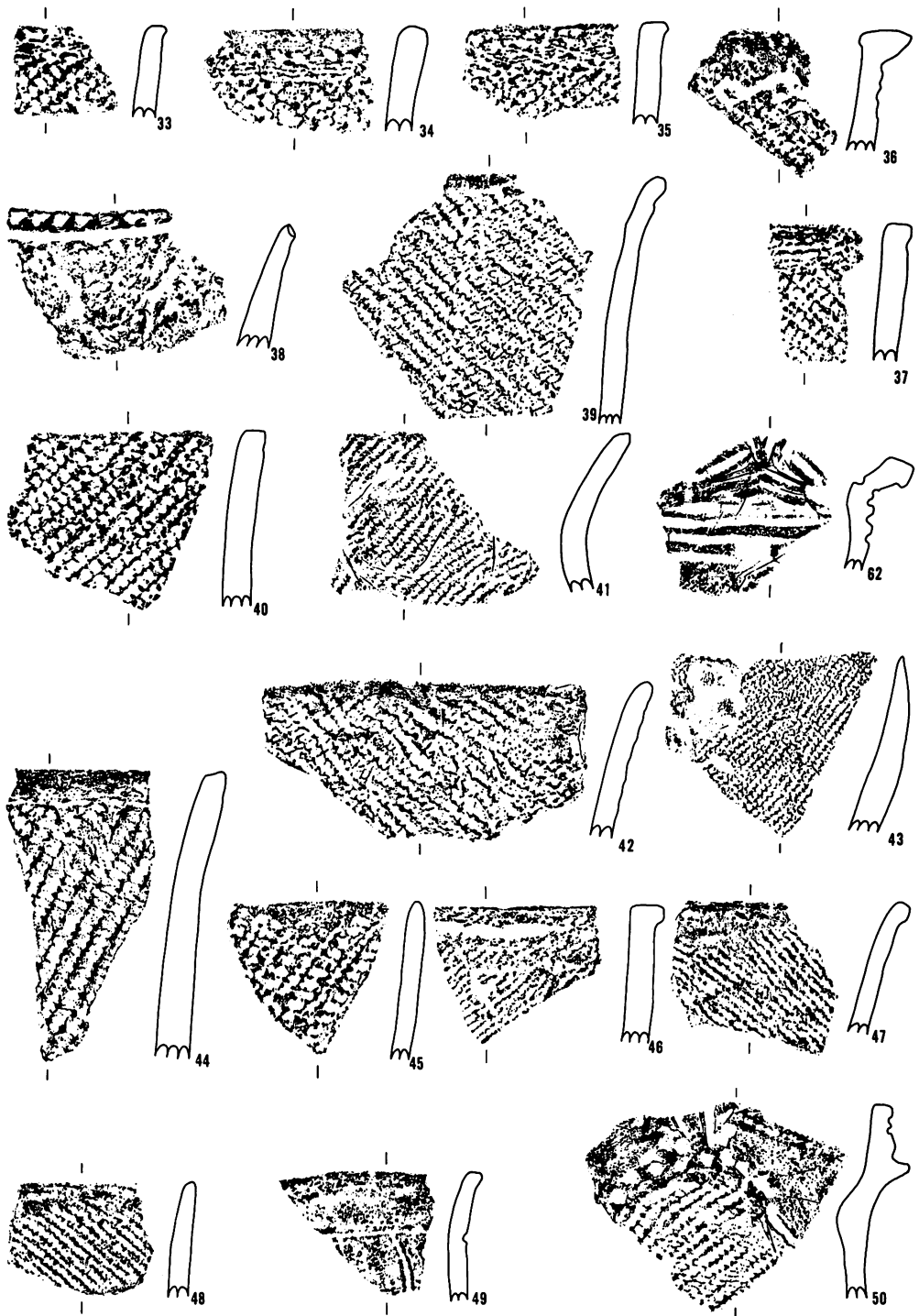


插图20. 土器拓本图 $\frac{1}{2}$

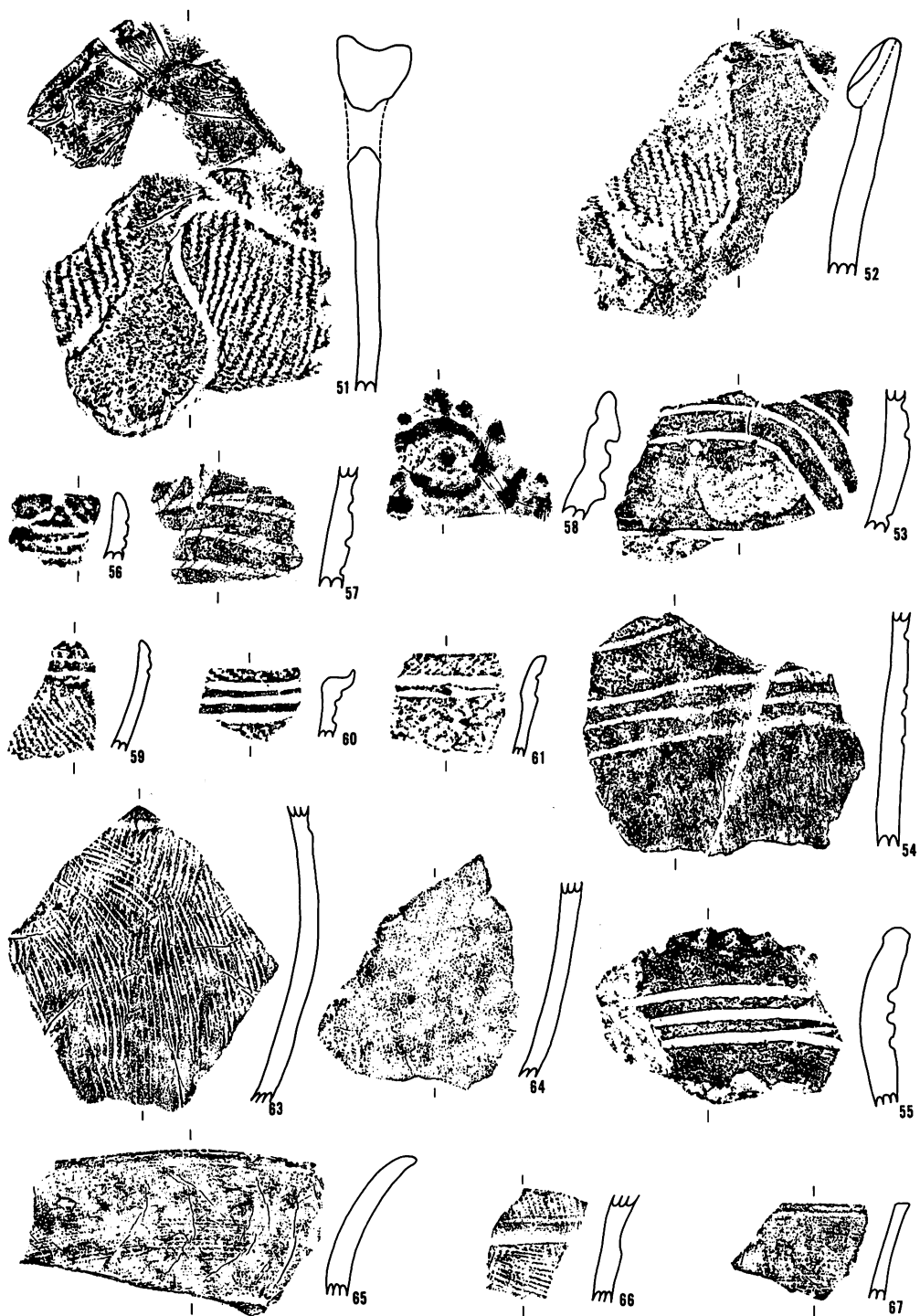


插图21. 土器拓本图 $\frac{1}{2}$

坏の破片が1個である。甕形の破片では、刷毛目調整痕をもつもの7個と、なで調整痕をもつもの1個が含まれる。刷毛目調整痕をもつ破片の頸部には明瞭な段をもち、外面は縦、内面は横方向の刷毛目である。胎土には砂粒や雲母の混入がみられ、色調は褐色を呈する。焼成は良好である。

なで調整の破片は、外面縦、内面横方向のなでが観察される。胎土には砂粒の混入がみられる。色調は橙褐色で焼成が良い。

坏は、内面は磨き黒色処理がなされ、底部外面は篋削り、口縁部は横なでである。胎土には多くの砂粒が混入している。色調は褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。焼成は良い。

第Ⅲ群 (挿図第17-24・25、P L13-69~72)

ここには陶器の破片を一括した。摺鉢1個体、甕底部破片、施釉陶器片各1個の破片が含まれている。いずれも小破片であるので、全体の器形等は不明である。摺鉢の胎土は若干の粗砂が混入するが良く精選されており、色調は灰色を呈する。外面篋なでによる調整痕がみられ、内面は摩耗によって調整痕は不明である。櫛目は8本以上1組の工具によって付されている。焼成は良い。甕の底部破片は小破片であるので詳細は不明である。焼成は非常に良い。施釉陶器は小破片であるので器形は不明である。釉は鉄釉かと考えられるが、光沢がなく、内外面ともに咆立ちがみられる。以上の陶器はいずれも産地不明である。

2. 石 器

石器は、明らかに使用痕や加工痕として認められたものを含めて51点が発見された。調査面積も少ないので数が少ない。内訳は次の様である。

1. 石鏃	9点	6. 磨石	12点
2. 石錐	1点	7. 石錘	1点
3. 石匙	12点	8. 砥石	1点
4. 搔器	6点	9. 石製品	2点
5. 石斧	6点	10. 名称不明	1点

本報告書では、出土した上記の石器、石製品は全て、実測図、写真ともに収録した。なお、各石器の法量計測値は第1表を参照されたい。

[1] 石鏃 (挿図第22-1~9、P L14-1~9)

石鏃は9点発見された。9点の中には有柄のもの5点(1~5)、無柄3点(6~8)、アメリカ式1点(9)が含まれている。有柄のものには完形品はなく、全部が先端部と柄部の

図版番号	写真番号	器 種	出土地点	層 位	法 量				石 質
					長さ cm	巾 cm	厚み cm	重量 g	
1	1	石 鏝	A - 5	II	3.8	1.7	0.6	2.95	硬質頁岩
2	2		C-7土坑	埋 土	3.0	1.3	0.7	2.6	硬質頁岩
3	3		C - 2	IV-上面	2.8	1.3	0.4	1.3	硬質頁岩
4	4		B - 6	III-下面	2.6	1.8	0.6	1.85	珪質頁岩
5	5		D - 6	IV	2.9	1.9	0.5	1.85	珪質頁岩
6	6		C - 5	III-下面	2.2	1.5	0.5	1.25	石質凝灰岩
7	7		B - 6	V	2.0	1.4	0.6	1.05	鉄石英岩
8	8		A - 7	IV	3.0	1.6	0.4	1.05	珪質頁岩
9	9		C - 6	III-下面	3.6	1.4	0.4	1.25	珪質頁岩
10	10	石 錐	B - 5	III-下面	3.3	1.8	0.8	2.95	凝質石質 凝 灰 岩
11	11	搔 器	C - 4	III-下面	2.8	1.7	0.4	1.75	凝質石質 凝 灰 岩
12	12		B - 6	V	3.3	1.7	0.4	3.95	硬質頁岩
13	13		表 採		3.1	1.9	0.6	2.8	珪質頁岩
14	14		B - 7	V	5.0	3.8	0.9	17.85	珪質頁岩
15	15		B - 6	III	5.5	3.8	0.9	19.8	凝 灰 質 珪質頁岩
16	16		B - 7	V	3.6	2.8	0.8	6.75	粘 板 岩
17	17	石 匙	B - 6	V	4.0	5.4	0.7	11.25	硬質頁岩
18	18		D - 5	III-下面	3.8	6.6	0.9	15.2	硬質頁岩
19	19		C - 5	V	3.5	2.8	0.6	5.15	珪質頁岩
20	20		B - 5	V	3.5	3.1	0.6	4.6	珪質頁岩
21	21		B - 6	V	10.0	2.3	0.9	17.15	硬質頁岩
22	22		C - 6	III-下面	6.4	2.3	0.7	7.85	珪質頁岩
23	23		B - 4	V	5.9	2.4	1.0	11.1	珪質頁岩
24	24		C - 6	V	5.3	1.8	0.5	4.65	珪質頁岩
25	25		A-4住	埋 土	5.5	1.5	0.4	5.1	珪質頁岩
26	26		A-4住	埋 土	5.2	1.6	0.2	2.75	珪質頁岩

図版番号	写真番号	器種	出土地点	層位	法量				石質
					長さ cm	巾 cm	厚み cm	重量 g	
27	27		C-7土塚	埋土	5.1	1.5	0.7	6.45	珪質頁岩
28	28		C-3	Ⅲ-下面	5.2	1.8	0.6	5.1	珪質頁岩
29	29	石斧	B-5	V	9.0	4.8	2.9	195	安山岩
30	30		〃	V	4.9	3.6	1.0	31.2	安山岩
31	31		C-2住	貼床下	4.0	3.0	1.0	25.45	蛇紋岩
32	32		B-5	Ⅲ	4.5	4.0	2.1	65	閃緑岩
33	33		A-3	Ⅱ	5.0	6.3	3.0	145	輝緑岩
34	34		D-5	Ⅲ	9.3	4.3	2.0	170	角閃石 安山岩
35	35	石製品	D-3柵上	埋土	2.3	1.4	3.6	20	珪質緑色 凝灰岩
36	36		B-2	Ⅳ	9.8	2.2	1.8	80	硬砂岩
37	37	磨石	A-5	V	14.8	8.8	4.8	1,020	輝緑岩
38	38		D-5	V	13.5	6.8	4.8	640	安山岩
39	39		B-6	V	8.2	6.2	5.2	290	安山岩
40	40		B-6	V	15.0	7.8	6.8	1,100	安山岩
41	41		B-6	V	16.8	8.0	7.0	1,160	石英安山岩
42	42		C-7土塚	埋土	8.5	5.8	4.7	320	安山岩
43	43		B-6	V	9.0	6.6	5.2	430	石英安山岩
44	44		B-6	V	9.0	4.8	4.3	330	安山岩
45	45		A-4	V	17.8	6.5	5.6	720	安山岩
46	46		B-7	V	11.0	7.9	5.0	610	斑粒岩
47	47		C-4	V	11.0	7.9	5.7	545	硬砂岩
48	48		B-3	V	6.6	7.4	6.8	580	石英安山岩
49	49	石錘	C-6	V	9.5	6.0	1.8	195	石英安山岩
50	50	名称不明	A-6	V	15.9	10.3	2.0	430	粗粒泥質 硬砂岩
51	51	砥石	A-2住	埋土	13.5	5.5	4.5	665	安山岩

表1 石器計測表

一部を欠失している。欠失の程度を勘案して考えると、全長で3.0 cm以上、基部の巾1.3～1.8 cm位、厚さは0.4～0.6 cm位である。柄の基部は挟り込みが浅く、全体的に太く大きい。出土層位はⅡ層～Ⅳ層上面まで各層位で出土し、2はC-7土坑埋土内で繊維土器の破片とともに出土した。無柄のものは、先端部を欠失しているものが多いが長さ2.2～3.0 cm、巾1.4～1.9 cm、厚み0.4～0.6 cmである。形状は三角形を呈するもの2点(6、7)、挟り込みのあるもの1点(8)に細分される。三角形を呈するものの内6は両面に一次剝離面を残し、刃部調整も粗雑である。他の1点(7)は若干厚目で断面菱形を呈し、刃部調整も入念に行っている。基部に挟り込みをもつ1点(8)は長目で、挟り込みも深く0.4 cmを測る。出土層位はⅢ層(6、8)、Ⅴ層(7)である。アメリカ式石鏃が1点(9)出土しているが、出土層位はⅢ層下位である。非常に細長く、基部の両側面に挟り込みをもつものである。

[2] 石錐 (挿図第22-10、P L14-10)

石錐は1点だけである。フレークの両側面を表裏両面に剝離させて刃部を調整している。つまみの部分は、二次加工を加えていない。

[3] 石匙 (挿図第22-19～21、23-22～28、P L14-19～21、15-22～28)

石匙は12点発見され、横形4点(17～20)、縦形8点(21～28)に細分される。横形はⅤ層で3点(17、19、20)、Ⅲ層で1点(18)が出土した。Ⅴ層での出土が多く、Ⅴ層で出土したものはつまみに対して使用刃部が左傾斜である。使用刃部の調整は、裏面からの片面剝離調整が多いが、裏面にも剝離している例もみられる。裏面には一次剝離面を残している。裏面にも剝離するのは、使用刃部の調整だけではなく、つまみ部調整との関係がありそうである。19、20は小形で特徴的な形態である。縦形のもののもっとも長いもの(21)で10 cm、もっとも短いもの(26)で5.2 cmである。巾は2.0 cmを超えるものもみられるが、1.5～1.8 cmがもっとも多い。刃部の調整は、左側面の裏面にも二次的な剝離加工を施し、非常に鋭角に調整している例もみられる(21、23、24、25、27)。右側面は表側のみ剝離し刃部は鈍角である。表面の稜線は巾に対して $\frac{1}{3}$ 位の所に位置している場合が多い。縦形石匙の中には、先端部が直線を呈するものと、円弧を呈するものがあり、先端部が直線を呈するものはⅤ層からの出土が多い。27は先端部を石錐として使用された痕跡をもつ。26は非常に薄い剝片を利用している。

[4] 搔器 (挿図第22-11～16、P L14-11～16)

搔器と考えられる石器は、6点発見されている。これらは先端部使用2点(12、16)、側面使用2点(11、15)、先端と側面使用2点(13、14)に細分される。出土層位は先端部使用2点と先端と側面使用1点(11)の3点がⅤ層より出土し、2点は(14、15)Ⅲ層、1点は(13)表採である。14、15、を除くと比較的小形のフレークを利用し、先端部または側面

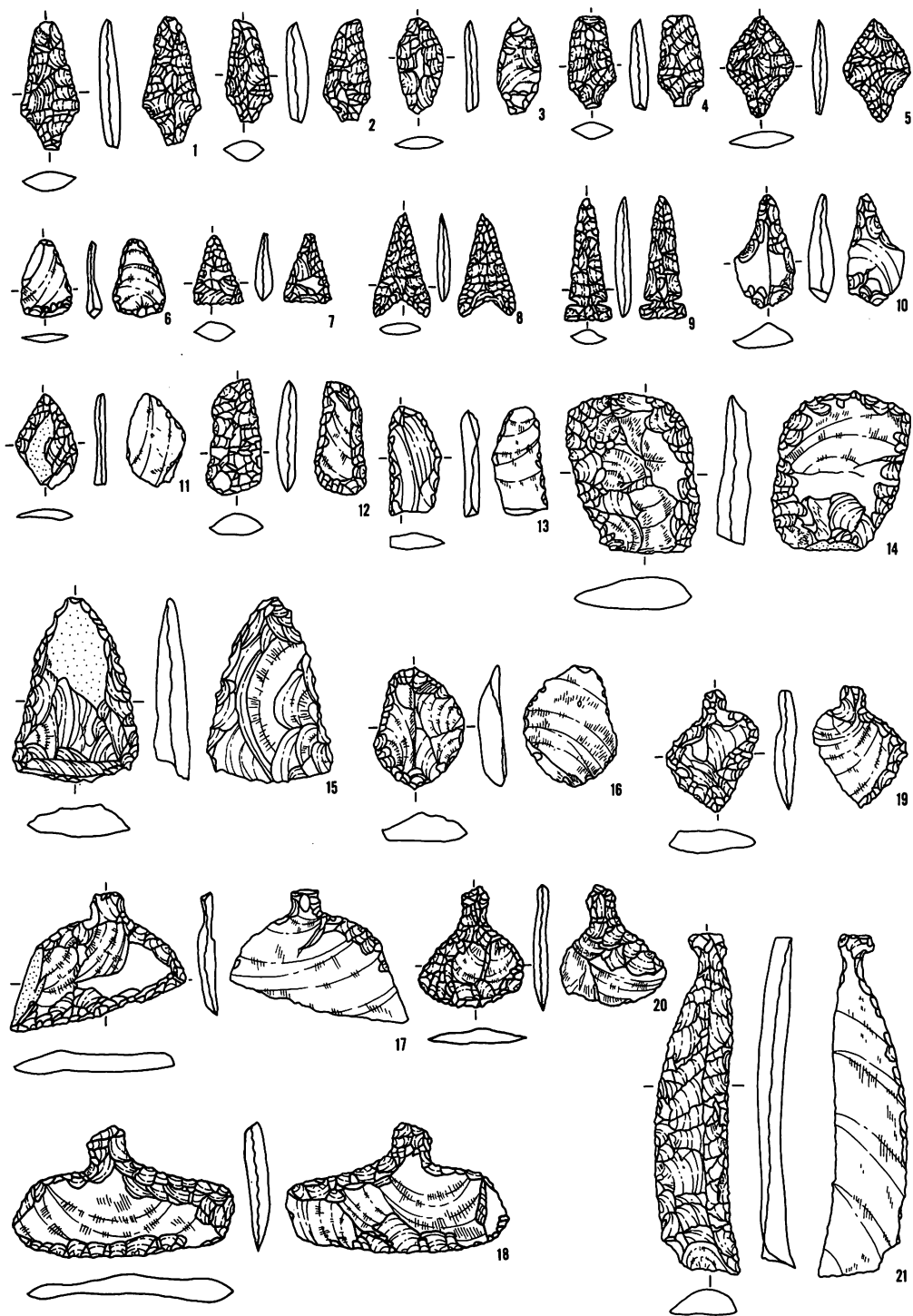


插图22. 石器实测图 $\frac{1}{2}$



插图23. 石器实测图 $\frac{1}{2}$

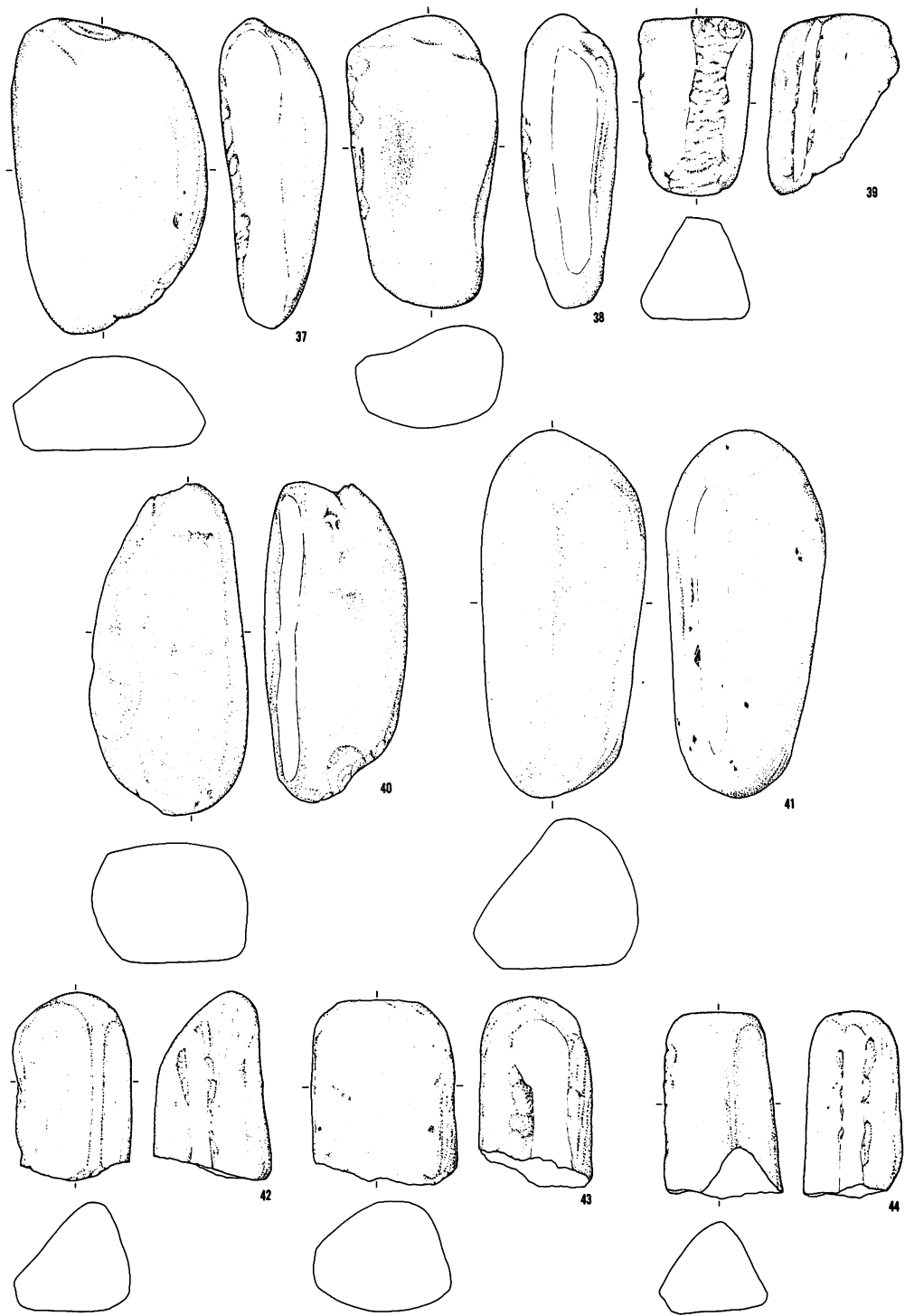


插图24. 石器 $\frac{1}{3}$

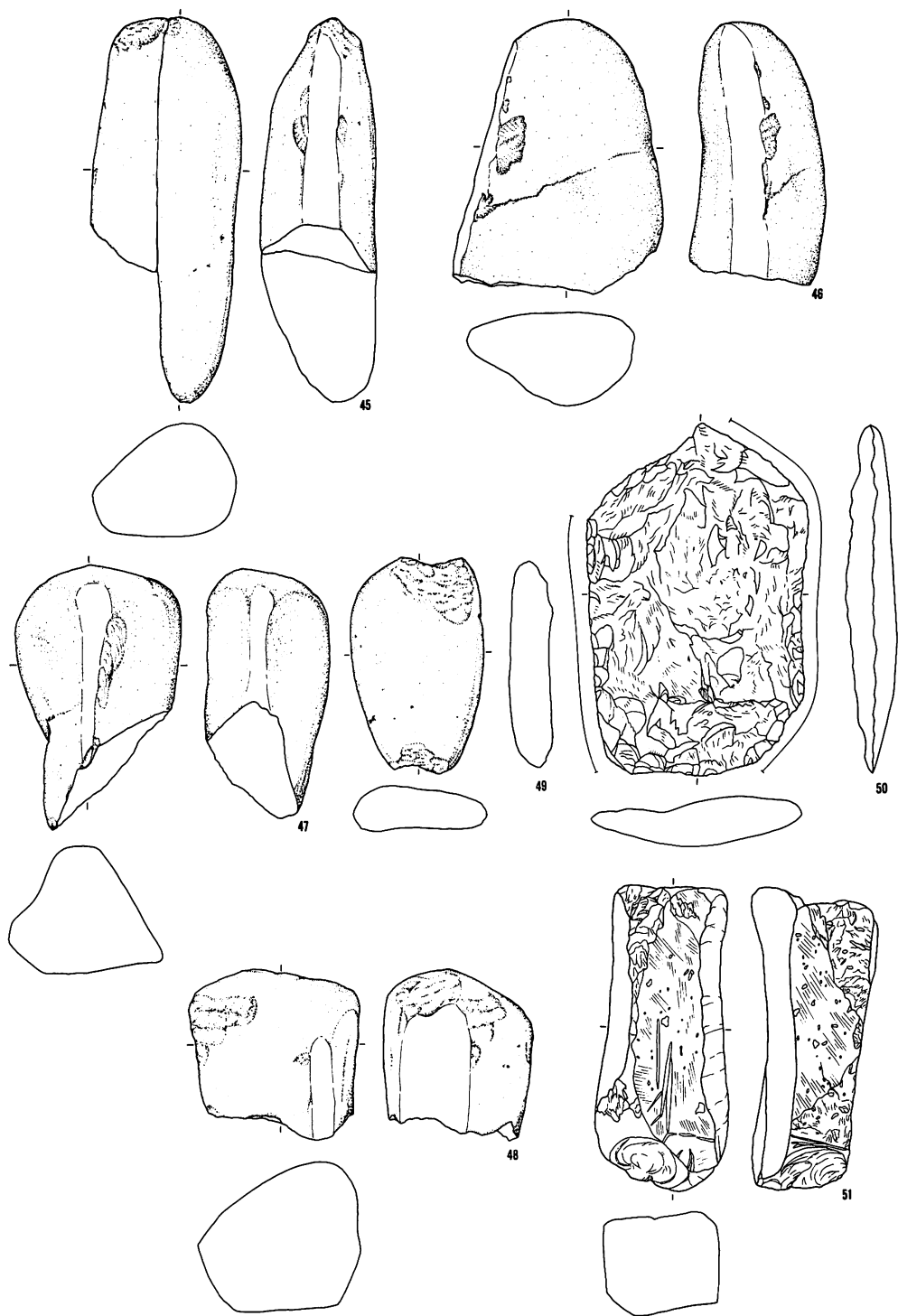


插图25. 石器 $\frac{1}{3}$

を剝離して刃部を調整している。15は1部を欠失しており、14はフレークのバルブの部分を残して他の3方向を加工しており、一部両面に剝離されている。

[5] 石斧 (挿図第23-29~34、P L 15-22~28)

石斧は完形品、破損品を含めて6点出土している。これらの中で全面磨製4点(32、33、34、35)、半磨製1点(30)、局部(刃部と木端)磨製1点に細分される。全面磨製石斧は3点が頭部を欠失し、1点は刃部を欠失している。32は比較的小形で薄く、刃部には使用擦痕が良く残存している。33、34は肉が厚く製作され刃部にはやはり使用痕がみられる。35は刃部を欠失しており、体部表面の風化が著しいので細部は不明であるが、頭部先端が次第に細くなっている。半磨製としたのは、本遺跡唯一の完形品で体部上半より頭部にかけて自然面を残している。比較的肉厚で短い。短いのは製作時からか、使用による摩耗によるものかは明確でない。刃部は使用による摩耗がはげしく、刃先は丸く、刃部は直線を呈せず円弧を描いている。31は木端1面と刃部のみを研磨した石斧であり、30のものと同一層より出土した。長く板状の自然礫を使用し、先端を両面より研磨して刃部としたものである。

[6] 磨石 (挿図第24-37~44、25-45~48、P L 14-19~21、15-22~28)

河川礫の側面に摩耗面を有する磨石が完形品で5点、欠損品で7点の合計12点出土した。C-7土坑の埋土内で繊維土器の破片とともに発見された以外は全てV層の遺物として発見された。この礫器は側面形が半円形や、長半円形、棒状を呈し、断面形は不等辺三角形を呈する河川礫を使用し、最長の稜線を巾1.0cm位の平坦面を作り出して使用面としたものである。使用面の両側縁には打痕剝離面をもつ例(37、42、44、45、46、47、48)や、側面に磨き面をもつ例(44、45、47、48)がみられる。本遺跡の例では、もっとも長いもので(45)17.8cm、巾6.5cm、厚さ5.6cmである。もっとも小形のもの(39)で長さ8.2cm、巾6.2cm、厚さ5.2cmである。使用面は殆んどの場合は1面のみであるが、中には2面(47)、3面(48)を使用面として作り出している場合もある。また、凹み石として併用された例(38)もみられ、側面に凹穴をもつものがみられる。

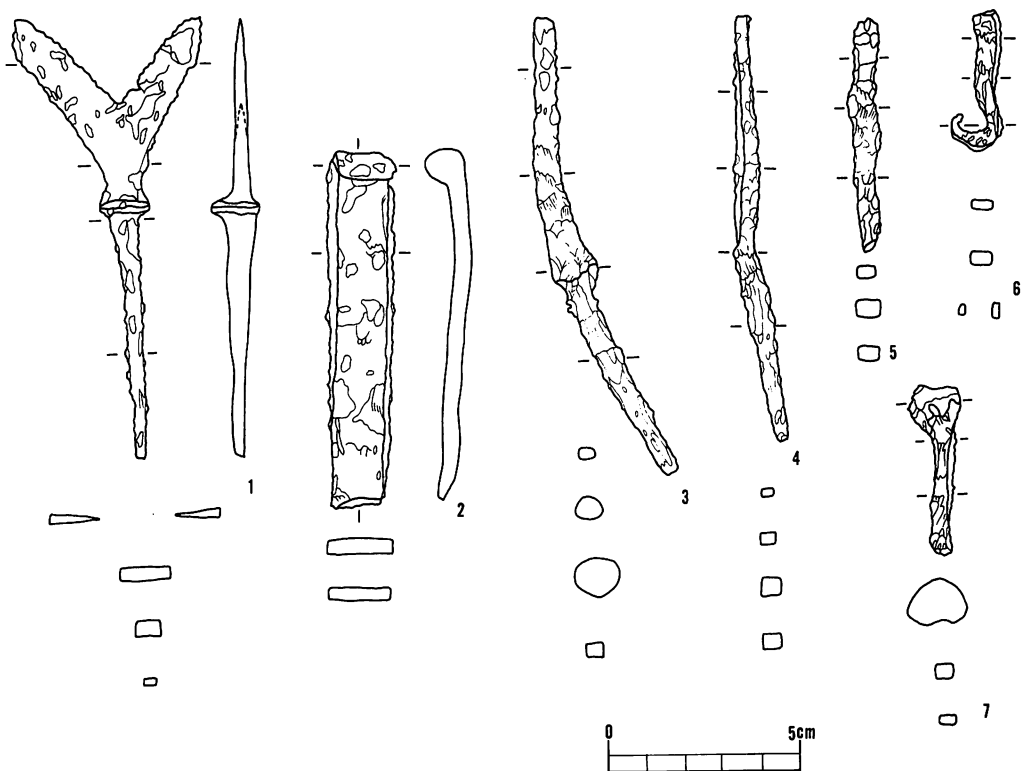
[7] 石錘 (挿図第25-49、P L 16-49)

石錘は1点出土した。扁平で楕円形を呈する。10cm×6.1cmの河川礫の両端を打ち欠いて凹みをつけ、紐がかりとしたものである。

[8] 砥石 (挿図第25-51、P L 16-51)

A-2住居址の埋土上部より出土したもので1点のみである。平面形が長方形、断面形が方形を呈するもので、中央部は各長辺ともに使用による砥減りがはげしく、凹んでいる。使用面は5面にみられる。

[9] 石製品 (挿図第23-35・36、P L 15-35・36)



挿図26. 鉄器実測図

35は全面研磨され、穿孔をもつ石製品の欠損品である。装飾品の一部と考えられる。36は細長い棒状を呈する礫の両端に打痕のある石器が発見された。黒色を呈する異物が付着しているが何んであるかは不明である。用途、性格ともに不明である。

[10] 名称不明石器 (挿図第25-50、P L16-50)

この石器は周囲を打ち欠いて、片面にのみ自然面を残したもので、長径16cm、短径10.4cmの大きさで、略長方形を呈する。性格、用途ともに不明である。

3. 鉄器 (挿図第26-1~7、P L13-1~7)

鉄器、鉄製品は全部で7点出土した。形状から判断される名称は、1は雁又鍬、2は楔、5~7は角釘である。3、4はともに細長いものであるが、断面が前者は丸、後者は角を呈し、両者ともに先端は尖っている。用途、時代、名称ともに不詳である。1の雁又鍬はB-8溝址の埋土内より出土したものである。他の鉄器はすべて第I層、第II層で粗掘りの際に発見された。

第Ⅵ章 ま と め

前章においては、本遺跡で検出された遺構や出土遺物について事実記載のみを行った。本章では、遺構・遺物について若干の考察を加えてまとめたい。

第1節 検出遺構と火山灰および浮石の関係

本遺跡では、米沢段丘の構成層を1.6m掘り下げ8層に分類し、その構成層の中に埋存する7層の文化層を検出したが、これらの文化層には新しい方から十和田a火山灰、中振浮石層、南部浮石層が介在している。本遺跡の場合には、精査の段階で攪乱を受けた痕跡は観察されていないので、段丘構成層と文化層の関係を知る為には都合の良い遺跡である。

沢内B遺跡の遺構検出面と二戸市地域の他遺跡での調査例とを総合して考えると、二戸市地域の米沢段丘面の構成層と文化層の関係がほぼ把握できる。ここでは、各火山灰や浮石に関連する遺構と時代について概括してみる。なお、米沢段丘面の標準構成層については、本遺跡の基本層序の項で述べたのでここでは改めて触れない。

1) 十和田a火山灰

十和田a火山灰は、昭和53年に当埋蔵文化財センターが調査を行った上田面遺跡で自然堆積層が観察されており、これによれば、本遺跡基本層序第Ⅲ層に相当する土層の上面に、若干の起伏がみられるが層厚15cm±で堆積している。遺構との関係でみた場合には、ロクロ未使用土師器を伴う住居址（奈良時代）では、埋土上半もしくは遺構上面を覆っている場合が多く中には全く観察されない場合もみられる。ロクロ使用土師器を伴う住居址（平安時代）では、埋土下半で床面に近接する土層かもしくは埋土内にブロックで混入している。

この様な状況は、長瀬遺跡群、荒谷B遺跡、中曽根遺跡、堀野遺跡等の発掘調査によって確認されており、遺構検出の際の目安となっている。

沢内B遺跡の場合には、B-8溝址の埋土上位層、A-4住居址の埋土上面にブロックで混入していた。

2) 中振浮石層

米沢段丘構成層の中では、標準的浮石堆積層の一つであり「アワ砂」と呼ぶ純層堆積を挟み、3層に細分することも可能である。

この土層を掘り込んでいる住居址は、奈良・平安時代の住居址のみならず、長瀬D遺跡の縄

文晩期住居址、沢内遺跡の縄文後・晩期住居址、荒谷遺跡の縄文中期末住居址、荒谷B遺跡の縄文後期住居址、本遺跡での縄文中期末住居址等縄文中期以降に比定されるもののみである。また、中曽根遺跡の報文によれば、縄文前期末の遺構、遺物が中振浮石層より下位の土層で検出されている。なお、本遺跡では遺構ではないが、中振浮石層より下位の土層中に鈍角尖底土器の包含層が存在する。

以上の事から考えた場合、中振浮石は縄文前期末から中期中葉にかけての時期に降下したものと推定され、縄文中期末に比定される住居址は中振浮石層の上面で検出される場合が多い。

3) 南部浮石層

南部浮石層もまた、米沢段丘構成層の中では標準的な浮石堆積層であり「ゴロタ」とも呼ばれている。この浮石層を鍵層とする遺構は、長瀬B遺跡で検出された縄文早期中葉貝殻文土器期に比定される住居址で、埋土として南部浮石が全面を覆っているのが検出された。本遺跡では、南部浮石層上面を検出面とする土塚が2基検出されており、埋土内より出土した土器から縄文早期ムシリI式期の土塚、同じく早期末の繊維土器を出土させる土塚である。

これらのことから考えて、南部浮石の降下時期は縄文早期白浜式併行期とムシリI式期の間ということになり、縄文時代早期が、南部浮石を挟んで下位の土層は早期前半、上位の土層は早期後半の各文化層に2大別される可能性が大きい。

米沢段丘では、この様に段丘構成層の中に堆積する浮石や火山灰によって、遺構の年代をある程度推定することが可能であり、これがまた二戸地域における米沢段丘に立地する遺跡で検出される遺構の特徴ともいえる。

当沢内B遺跡では、住居址や溝址等の遺構が検出されているが、時期決定の為の遺物を欠いている遺構が多く、前記の様な浮石や火山灰との対比の観点から時期を推定した場合もある。

第2節 遺 構

1. 住 居 址

本遺跡では6棟の住居址が検出されているが、平面プランによって方形4棟、円形もしくは楕円形2棟に大別される。方形住居址と円形住居址はそれぞれ遺構検出面が違い、時期差があることは明白である。ここでは方形住居址と円形住居址に分けて考えてみたい。

a、方形住居址

本遺跡で検出された4棟の方形住居址は次の様な共通する特徴をもっている。

- ①プランは方形であり、一部に方形張り出しをもつものがある。
- ②埋土が単層であり、構成物もほとんど同一である。
- ③柱穴は住居址の壁際に配置され、各隅には必ず配置される。
- ④遺構検出面が基本層序第Ⅱ層～Ⅲ層上面であり、ほとんど同位面である。
- ⑤出土遺物が極端に少ない。
- ⑥規模の小さい竪穴住居址である。

これらの共通点から考えた場合、時期的には大差のない時期と推定されるが、2棟が重複して検出されたことを考えれば、時間的な巾のあることは明らかである。本住居址の時期決定資料となりうる遺物は全く出土していないので比定される時期は不明であるが、他遺跡での調査例との対比から、若干の考察を加えてみたい。

二戸市地域における遺跡の発掘調査で検出された住居址の中で、方形プランを呈するのは時代的にある程度限定されている。即ち、縄文時代の住居址で方形を呈するのは、長瀬B遺跡で検出された早期中葉に比定される住居址であるが、本遺跡で検出された方形住居址と比較した場合、前述の様に検出面があまりにも違いすぎ、同時代に比定することは不可能である。縄文時代の住居址で早期中葉以外に比定される住居址では、方形を呈するものは検出されていないので比較できない。古代の奈良・平安時代に比定される住居址は一般的に方形プランを呈し、その中には正方形・隅丸方形・胴張隅丸方形・長方形・隅丸長方形・胴張隅丸長方形・台形等の変化がみられる。

本遺跡で検出された方形住居址と古代に比定される住居址と比較すると次の様である。

- ① 検出面にはほとんど差がみられず、基本層序第Ⅲ層上面で検出される場合が多い。
- ② 古代の住居址では埋土内に十和田a火山灰を含む場合が多いが、本住居址では含まない。
- ③ 古代の住居址では壁のいずれかに「カマド」をもつのが一般的であるが、本住居址にはみられず、床面ほぼ中央に焼土をもつ例がある。
- ④ 古代の住居址では土師器や須恵器を遺物としてもつが、本住居址では遺物をもたない。
- ⑤ 古代の住居址では各隅を結んだ対角線上に4本の柱穴をもつ場合が多いが、本住居址では住居址の壁際に配置され、本数も8本以上の場合が多い。
- ⑥ 古代の住居址に比較して一般に規模が小さい。
- ⑦ 古代の住居址では張り出しをもたないが、本住居址では方形張り出し部をもつ例が多く、一部にはもたない例も知られている。

等の相違点がみられる。これらを総合すると、古代の住居址とは異質な住居址であり、時代的

併行関係は考えられない。

本遺跡で検出された方形住居址と同じ特徴をもつ住居址は他遺跡でも知られている。岩手県内では北上市丸子館址、盛岡市太田方八丁遺跡、盛岡市繫Ⅲ遺跡、雫石町下平遺跡、二戸市内では長瀬遺跡群、家の上遺跡、下村遺跡等が知られており、とりわけ二戸市内での調査例が多く、岩手県内では北上市以南での検出例は報告されていない。岩手県以外では、秋田県大館市館コ遺跡、比内町谷地中「館」遺跡、柴平村七館遺跡、青森県では富山遺跡が知られている。これらの遺跡の立地を考えた場合、中世～戦国期にかけての館址や、館址の周辺遺跡での検出例が多いことは注目に値する。前記遺跡の発掘調査報告書や調査担当者からの御教示等から、方形住居址の特徴を考えると次の様である。

- ①方形プランを呈し、方形張り出しをもつ住居址と、もたない住居址がある。
- ②どの住居址もカマドをもたず、床面に地床炉の検出例がある。
- ③柱穴は全て壁際に配置され、各隅には必ず配置されている。
- ④出土遺物としては、宋銭や明銭、陶磁器を伴う場合が多く、土師器は全く共伴しない。
- ⑤年代については古代に比定した報文は全くなく、上限鎌倉、下限近世初期の間に比定されている場合が多い。

この様な特徴を本遺跡で検出された方形住居址の特徴と比較した場合、一致する点が多く、二戸市地域での同じ遺構と比較した場合もまた良く一致する。

以上のことから総合的に判断すると、古代の奈良・平安時代に比定される住居址とは認定しがたく、むしろ平安時代よりも新しい時代に比定される住居址である可能性が強い。本遺跡の場合には遺物が全く出土していないので時代を明示できないが、本遺跡が館址の直下に立地し、他遺跡の例では前述の様に館址や館址周辺遺跡での検出例が多いことを勘案して考えると、館址に伴う遺構である可能性も考えられる。この様な住居址の機能を考えた場合、住家と非住家に2大別される訳であるが、本遺跡や繫Ⅲ遺跡の例の様に床面に相当厚い焼土の堆積が認められる例や、床面から陶器や古銭が出土した例や、床面から萱類似の炭化物が検出された例等から住家として使用された痕跡をもつ例が多く報告されており、全てを非住家として考えるのは危険である。鎌倉時代より江戸時代までの民家が不明な現在、竪穴式である、規模が小さいことだけで非住家とするのは時期尚早である。土座居住居が昭和年代まで存在したことは衆知の事実であり、この種の住居址が土座居住居である。可能性は充分考えられる。また、繫Ⅲ遺跡では、掘立柱建物址の柱穴掘り方を壊して方形住居址が構築され、更に方形住居址が廃絶後に別の掘立柱建物址が重複している状態で検出されており、掘立柱建物址とは時代的共伴関係にあることは事実であり、掘立柱建物址と共伴してもなお、床面に焼土が堆積している例を考えれば、社会的階層による住家の一形態の可能性も考えられる。また、前述の様に北上市以南での検出

例がないことを考えれば、地域的な住居形態の可能性も考えられる。

いずれにしても、古代に比定される住居址とは全く異質の住居址であり、比定される時代も鎌倉時代以降と考えられ、相当長期に亘って使用された家屋の一形態と考えられる。

b、円形住居址

円形を呈する住居址は2棟検出されている。検出面は2棟とも基本層序第IV層上面であり、同時期もしくはそれほど時間差のない住居址と考えられる。時代決定の為の資料として、C-6住居址は床面直上で出土した2個体の縄文土器がある。C-6住居址で出土した土器の中の1個体は、口縁部上端と体部に沈線で区画された磨消部をもっており、大木式土器の編年に従えば、大木10式土器に併行する土器である。A-4住居址で出土した1個体は縄文だけが施文された粗製土器であり明確な時期は不明であるが、胎土、地文、器形から考えて縄文時代中期に比定される土器と推定され、2棟の円形プランを呈する住居址は、縄文時代中期末に比定される住居址である。2棟の住居址間には、壁高に大きな差がみられること、柱穴の検出された住居址と、されない住居址といった相違がみられるが、出土遺物や遺構検出面から同時期の住居址と考えられ、住居規模の差が内部構造に影響を及ぼしているものと考えられる。

2) 溝址

本遺跡では2条の溝址が検出されている。2条の溝址には埋土、切り合いから考えて時間的に差があることは明らかである。

埋土を比較した場合、C-8溝址は黒色～黒褐色のシルトが基調であり、十和田a火山灰は混入しないが、B-8溝址は埋土上位層に十和田a火山灰が混入している。また、切り合いでは、B-8溝址の北端部をC-8溝址が壊しているので、C-8溝址の方が新しいことは明白である。また、土層図で観察するとB-8溝址が完全に埋没した後にC-8溝址が掘削されていることが判る。どちらの溝址も年代を直接知る資料は得られていないが、C-8溝址埋土の中位面で「雁又鏃」が出土したことは年代を知る為の手懸りとなり得るであろう。また、本遺跡が佐々木館址の東向斜面に立地することや埋土内に流水を伴った痕跡がないことを考えれば若干小規模ではあるが、館址に伴う空濠である可能性が強い。

B-8溝址は、前述の様に北端部がC-8溝址に壊されているのでC-8溝址よりは古い溝址であるが、遺物として得られたのは縄文土器の破片だけであり、年代を示す資料は全く出土していないが、埋土の中に十和田a火山灰が混入していることを考えれば、二戸市内の調査例から古代の奈良・平安時代の遺構である場合が多く、B-8溝址も古代に属する溝址の可能性が強い。性格としては、流水によって沈澱したシルトと川砂の交互層が埋土最下層にみられたことから水路跡と考えたい。

3) 土壇

本遺跡では土壇が4基検出されている。4基の土壇は検出面の違いによって2時期に大別される。C-3土壇、B-3土壇は基本層序第Ⅲ層上面、B-7土壇、D-7土壇は基本層序第Ⅵ層上面で検出されており、前者2基の土壇の方が新しい時代の土壇である。

前者の土壇には年代決定となりうる遺物は全く出土していないが、検出面から考えた場合、前述の方形住居址の検出面とほとんど同位面で検出され、埋土に十和田a火山灰が混入しないことから、方形住居址と同時期位の時期に比定されるであろう。

後者2基は、基本層序第Ⅵ層の南部浮石層の上面で検出されており前者より古い土壇である。年代決定資料は、D-7土壇では胎土に繊維が混入し体部に沈線が施文された、鈍角尖底土器が出土し、土器形式ではムシリⅠ式に併行すると考えられる。C-7土壇で出土した土器は、胎土に繊維が混入し、地文として単節斜縄文の施された丸底風尖底土器である。これらのことからB-7土壇、D-7土壇は縄文時代早期後半に比定される土壇と考えられる。

4) 柵列状遺構

本遺跡では柵列状遺構が2条検出されているが、柵列址であるか否かは明確でない。本遺構の検出面は表土下第Ⅱ層上面であり、本遺跡ではもっとも新しい時代に比定される遺構であり、埋土が表土と同じ土性であるので、近世以降に比定される遺構かも知れない。

本遺構の性格については明確でないが、柵列址で布掘りをして柵木を埋め込んだ例は、古代城柵址での検出例は報告されているが、新しい時代の例は不明である。また、本遺跡のそれは斜面に対して直角に設けられた柵状の遺構で、柵木の埋め込み角度が地表面に対してほぼ直角であるというも腑に落ちない。もしかすると耕作による布掘り溝の可能性も考えられる。

いずれにしても、筆者は柵列についての知見をもっていないので、詳細に亘って言及することは控えたい。

5) 焼土遺構・土器包含層

焼土遺構は調査区域内で8カ所で検出されたが、検出面は全て同位面であり、第Ⅴ層上位面である。住居址内の炉址の可能性を考え、精査に留意したがプラン・柱穴ともに確認できなかったことから、屋外炉的な焼き火跡と推察される。また、焼土遺構検出面は縄文早期末葉に比定される胎土に繊維の混入した鈍角尖底土器の包含層であるので、焼土遺構の時期もまた縄文時代早期末葉に比定されるであろう。焼土遺構と土器包含層の直接的関係については不明である。

第3節 遺物

1. 土器

第V章第2節において本遺跡出土の土器をⅢ群2類5種に分類を試みたが、本項では時期決定と若干の考察を加える。

第1群

〔1類〕A種

この様な特徴をもつ土器は、蛇王堂洞窟第Ⅱ層出土土器、早稲田貝塚第3類土器、赤御堂貝塚第4地点第3類土器等に類例がみられる。本遺跡出土の土器と比較した場合、近似する点としては、全て沈線で施文されることであるが、相違する点としては、胎土に繊維を混入しない土器が主であること、底部形態が平底を呈するものが主であること等が考えられる。他遺跡ではこの種の土器をムシリⅠ式に近似する土器群としてとらえているが、本遺跡では前述の様に出土量も少ないので土器形式への比定は控えるが、他遺跡のこの種の土器群と時期的に併行関係にある可能性が強い。

本遺跡でのこの種の土器は遺構埋土内より出土したものであり、包含層よりの出土は全くないので、本来の文化層が不明であるが、他遺跡での出土例では、胎土に繊維を混入した縄文施文土器群に先行する土器群として把握されており、これが事実とすれば、本遺跡ではもっとも古い文化である。

〔1類〕B種

この様な特徴をもつ土器群は、崎山弁天遺跡B類土器、関谷洞窟第6層土器、蛇王堂洞窟第Ⅰ層土器、早稲田貝塚第6類土器、赤御堂貝塚第4地点第6類土器、日ヶ久保貝塚第Ⅲ群土器の一部、吉田浜貝塚第1類土器、南境貝塚第Ⅱ群第11・12類土器等に類例がみられる様であるが、岩手県北部地方での報告例はない。

上記の他遺跡の出土土器と比較した場合、全ての点で一致しているのではない。例えば、表斜縄文裏無文の尖底土器は、他遺跡では表裏縄文土器や表縄文裏条痕文土器と共伴して出土している場合が多い様であり、早稲田貝塚や崎山弁天遺跡の例でも共伴土器としてとらえている。羽状縄文土器は、早稲田貝塚では第4類土器より斜縄文土器と共伴するといわれ、崎山弁天遺跡でも共伴すると報告されている。宮城県では、船入島下層式土器より出現する様である。出現期の羽状縄文は非結束による羽状縄文を特徴とするといわれるが、本遺跡では非結束羽状縄文が主であり、結束羽状縄文は1例のみである。このことから考えた場合、結束羽状縄文の出現

期に近い時期に併行するものと考えられる。燃糸文は、早稲田貝塚第5・6類、蛇王堂洞窟第I層、関谷洞窟第5層A類の各土器に類例がみられ、前期的要素ともいえる様である。このことを総合して考えると、本遺跡のこのグループの土器は、表裏縄文土器、表縄文裏条痕文土器より新しい時代に比定される土器群と考えられ、底部形態として平底を含まないので、早稲田貝塚第6類や船入島下層式土器に近い土器群と考えられ、時期的には縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられるだろう。

〔1類〕C種

C種としたのは表面が剥落しているので地文が不明であるが、口唇部に刻み目をもつことで別種としたが、胎土や推定される器形ではB種と相違がみられず、本来はB種の中に一括されるべき土器である可能性が強い。B種と共伴する土器であれば、この種もまた縄文時代早期末～前期初頭に比定されるものと推定されるが、この種の土器は本遺跡では破片1個だけの出土であるので詳述することは控えたい。

〔2類〕A種

この種の土器は単独で時期を明確に把握することは困難である。一般には、縄文以外の方法によって施文された土器と共伴している場合が多い。本遺跡の場合は縄文以外の文様をもつ土器は、縄文時代中期末より晩期に比定されるものまで存在し、この種の土器も縄文時代中期末より晩期に比定されるものまで含まれているだろう。

本遺跡でのこの種の土器の中で特徴的なことは、胎土に雲母を含むものが多いことである。B種土器群でみた場合には、縄文時代中期末に比定される土器の胎土に雲母が混入されているのが観察され、胎土に雲母の混入した粗製土器は縄文時代中期末に比定されるものであろう。

〔2類〕B種

1) : 文様や器形から縄文時代中期末に比定される。大木式土器の編年に従えば大木10式土器に併行するものと推定される。

2) : このグループは縄文時代後期に属すると考えられ、十腰内I式に近い特徴をもつ。

3) : 地文・器形・文様等から縄文時代晩期に属する土器群であり、大洞式土器の編年に従えば、大洞BC・C₁・C₂式に含まれるであろう。

第II群土器

土師器を一括している。土師器の破片には、甕形や坏形の破片が含まれている。甕形の破片の中には刷毛目調整痕やなで調整痕をもつものが含まれている。数量も少なく、遺構に伴うものはない。古代に属する。

第Ⅲ群土器

陶器の破片を一括している。器形では、摺鉢・甕形・茶碗があるが、小破片であるので詳細は不明である。これらの遺物は方形張り出しをもつ方形住居址もしくは西方の館に関連する遺物と推定される。生産地は不明である。

2. 石 器

本遺跡の発掘調査で出土した石器および石製品は、砥石1個を除いた他のものは全て縄文時代に比定されるもので、点数は50点を数える。それらの中で特徴的な石器として、繊維土器群に伴う石器がある。即ち、石鏃1点、搔器3点、横形石匙3点、縦形石匙3点、石斧2点、磨石11点、石錘1点である。

これらの石器には、1) 石鏃が少ないこと。2) 石匙には横形・縦形ともに存在し数も同数である。3) 石斧は半磨製・局部磨製であり全面磨製のものを含まない。4) 磨石の出土が多く、凹み石と併用している例がみられる。5) 石槍が出土していないといった特徴がみられる。

本遺跡の調査範囲では、繊維土器に伴う住居址が発見されていないので、中心部を調査していないものと推定されるが、小範囲の調査でもなおこの様に多種の石器が出土したことは、繊維土器に伴う石器組成を考える為の手懸りとなり得るであろう。

馬淵川流域での同時期に比定される遺跡の報告例がないので比較検討することができないが、赤御堂貝塚での報告例に近い特徴がみられることは、注目する必要がある。今後、馬淵川流域での同時期に比定される遺跡が調査されることによって、繊維土器に伴う石器組成が次第に明確になってくるであろう。

いずれにしても、本遺跡の繊維土器は単独包含層より出土したものであり、これらの石器群もまた同一の土層より土器に伴って出土したことは、縄文時代早期末～前期初頭に属することは明白であり、岩手県北部の縄文時代早期末～前期初頭に属する石器群として好資料を提供したといえるだろう。

3. 鉄 器

本遺跡では鉄器は7点出土しているが、形状より名称の判るものは少い。その中でも雁又鏃は保存状態も比較的良好であり、形状から一見して判別される。その他のものの中には角釘が3点、楔と推定されるもの1点があるが、他の2点は名称、用途ともに不明である。方形住居址もしくは館址に関連する遺物であろうと推定される。

参 考 文 献

- | | | | |
|------|------------------------------------|-----------------|-------|
| (1) | 「上田面遺跡」 現説資料 | (財)岩手県埋蔵文化財センター | 昭和53年 |
| (2) | 「長瀬遺跡群」岩手県文化財発掘調査略報(昭和52年度分) | (財)岩手県埋蔵文化財センター | 昭和53年 |
| (3) | 上野 猛 「荒谷B遺跡」 | 岩手県教育委員会 | 昭和52年 |
| (4) | 関 豊 「中曾根遺跡」 | 二戸市教育委員会 | 1978年 |
| (5) | 草間俊一 「堀野遺跡」 | 福岡町教育委員会 | 昭和40年 |
| (6) | 板橋 源 「北上市丸子館調査報告書」 | 北上市教育委員会 | 昭和53年 |
| (7) | 吉田義昭
穴米光則 「太田方八丁遺跡」 | 盛岡市教育委員会 | 1978年 |
| (8) | 「繫Ⅲ遺跡」昭和52年度調査略報 | (財)岩手県埋蔵文化財センター | 昭和53年 |
| (9) | 「下平遺跡」昭和52年度調査略報 | (財)岩手県埋蔵文化財センター | 昭和53年 |
| (10) | 奥山 潤 「館コ発掘調査報告書」第1次、第2次 | 大館市史編さん委員会 | 1973年 |
| (11) | 奥山 潤 「谷地中「館」中野円墳状遺構発掘調査報告書」 | 大館市史編さん委員会 | 1973年 |
| (12) | 島山憲司 「比内町谷地中「館」遺跡発掘調査報告書」 | 比内町教育委員会 | 1978年 |
| (13) | 江上波夫他 「秋田県柴平村小枝指七館遺跡」館址所収 | 東大出版会 | |
| (14) | 杉山 武 「富山遺跡・永泉寺発掘調査報告書」 | 青森県教育委員会 | 昭和49年 |
| (15) | 芹沢長介
林 謙作 「岩手県蛇王堂洞窟」石器時代No.7 | | 1965年 |
| (16) | 佐藤達夫他 「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌43-2 | | 1958年 |
| | 佐藤達夫他 「早稲田貝塚」上北考古学会報告1 | | |
| (17) | 工藤竹久 「赤御堂貝塚発掘調査概要報告書」 | 八戸市教育委員会 | 昭和50年 |
| (18) | 草間俊一編 「崎山弁天遺跡」 | 大槌町教育委員会 | 昭和49年 |
| (19) | 後藤勝彦他 「関谷洞窟」社教シリーズ第14集 | 大船渡市教育委員会 | 昭和43年 |
| (20) | 及川 詢 「大船渡市史古代編」 | 〃 | 昭和53年 |
| (21) | 鈴木克彦 「日ヶ久保貝塚」 | 百石町教育委員会 | 昭和48年 |
| (22) | 後藤勝彦 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚」仙台湾周辺に於ける考古学的研究 | 宮城教育大学 | |
| (23) | 「南境貝塚第4次緊急調査報告」 | 宮城県教育委員会 | 昭和44年 |

前記以外の参考文献

- | | | | |
|------|------------------|--------|------------|
| 林 謙作 | 「縄文文化の発展と地域性—東北」 | 日本の考古学 | 河出書房 |
| 熊谷常正 | 「東北地方縄文時代早期後半の様相 | 遮光器8号 | みちのく考古学研究会 |
| | 条痕文系土器群の系譜」 | | |

伊東信雄	「宮城県—古代史」	宮城県史	宮城県
八木光則	「いわゆる「特殊磨石」について」		信濃28-4
塩釜女子高等学校	「平田原貝塚」		貝輪5号別刷
伊東信雄	「素山貝塚調査報告」復刻版		寧楽社
	「金山貝塚発掘調査概報」		宮城県教育委員会
草間俊一	「湧清水洞穴遺跡」		住田町教育委員会
草間俊一	「一本松能の沢遺跡」		盛岡市教育委員会
岩手大学考古学研究会	「大館町遺跡」		盛岡市教育委員会
山下孫繼 ^他	「岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書」		秋田県教育委員会
〃	「岩井堂岩陰遺跡発掘調査概報」		雄勝町教育委員会
北林八洲晴	「千歳遺跡13発掘調査報告書」		青森県教育委員会
	「小田野沢、下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」		青森県立郷土館

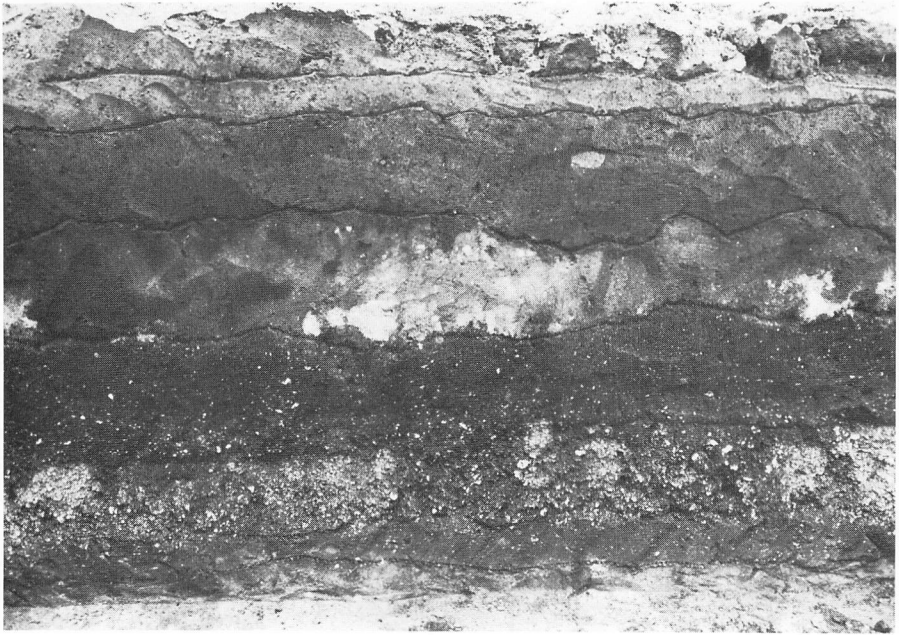


a. 調査前全景(北より)



b. 調査後全景(北より)

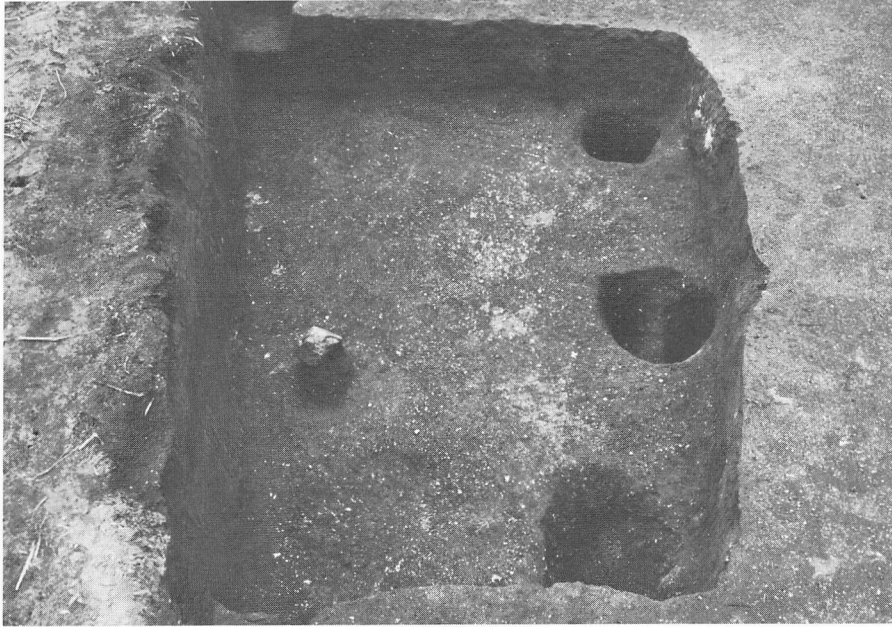
PL - 1



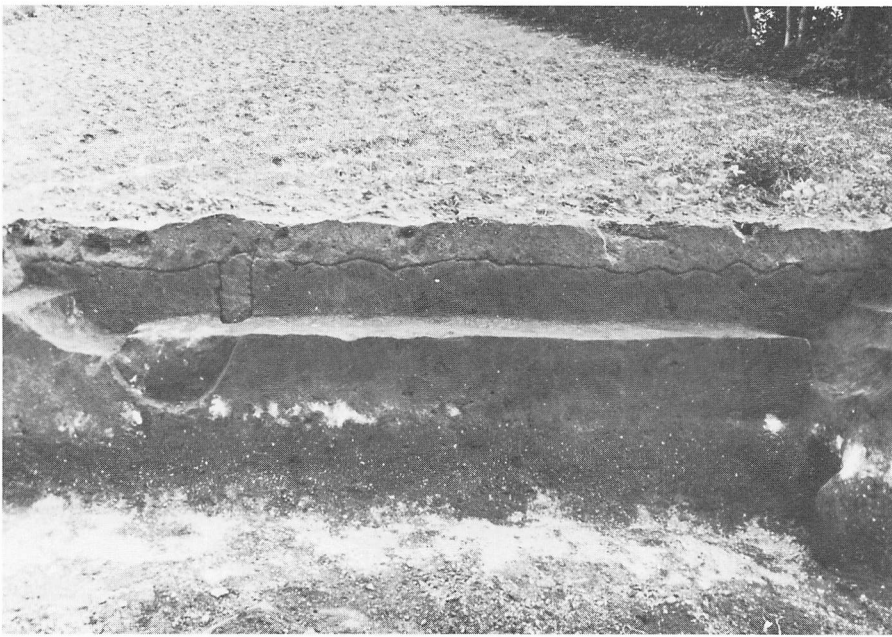
a. 基本層序(東より)



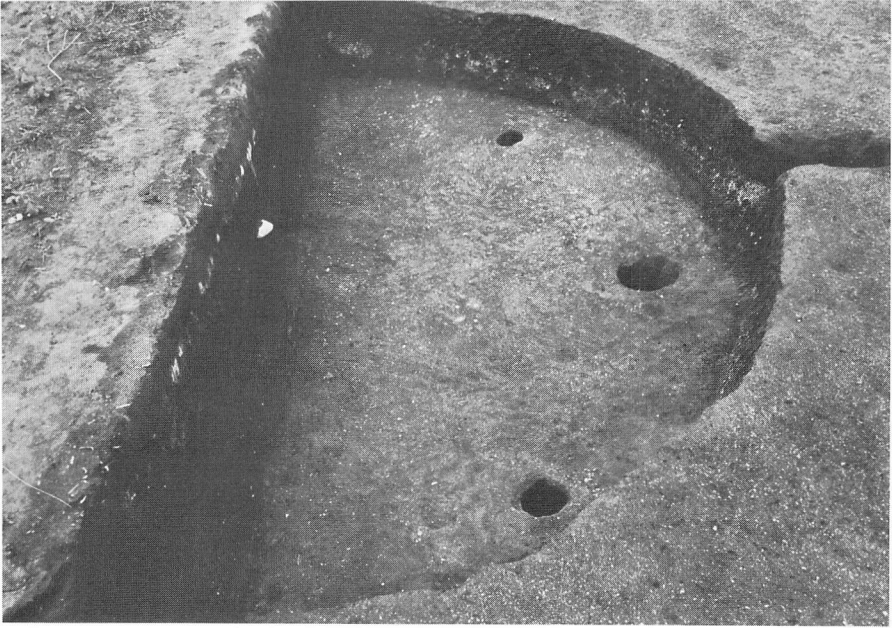
b. C-2・B-2住居址(東より)
PL-2



a. A-2 住居址(北より)



b. D-5 住居址(東より)
P L - 3



a. A-4 住址 (北より)



b. C-6 住居址 (東より)

PL-4



a. C-8 溝址(北から)



b. B-8 溝址(北から)

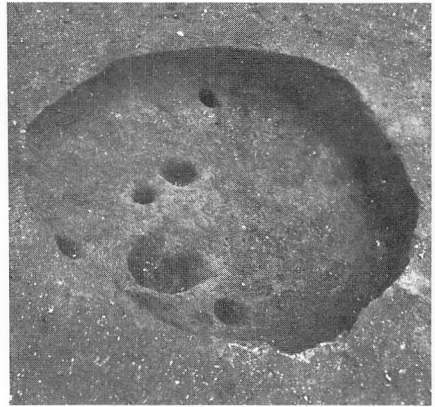
P L - 5



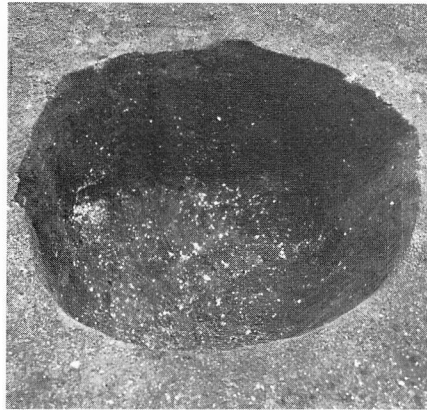
a. 柵列址 (西より)



b. C-7 (北より)

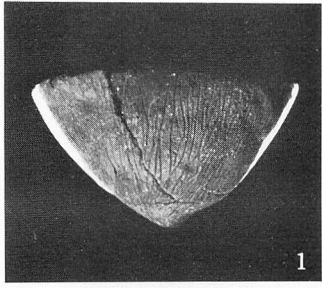


c. B-3 土坑

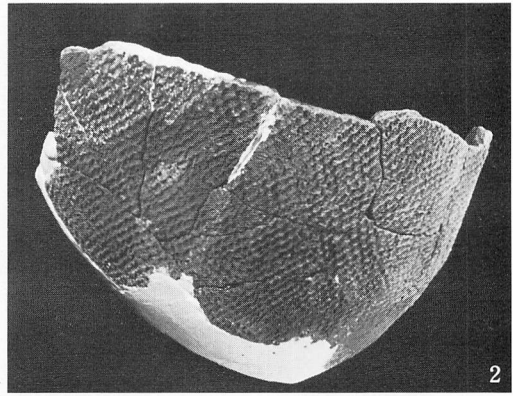


d. C-3 土坑

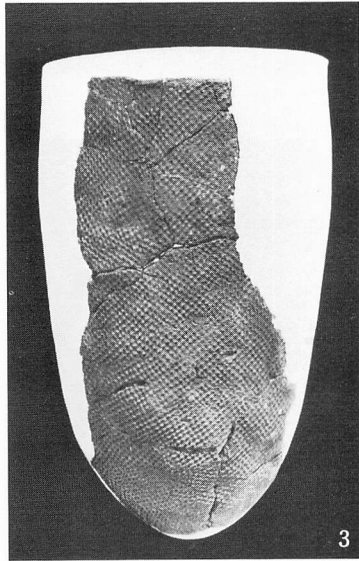
PL-6



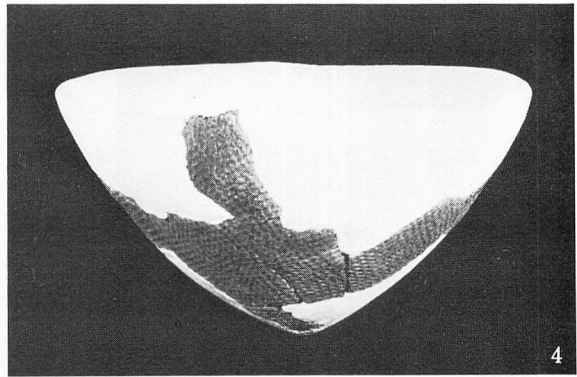
1 群 1 類 A



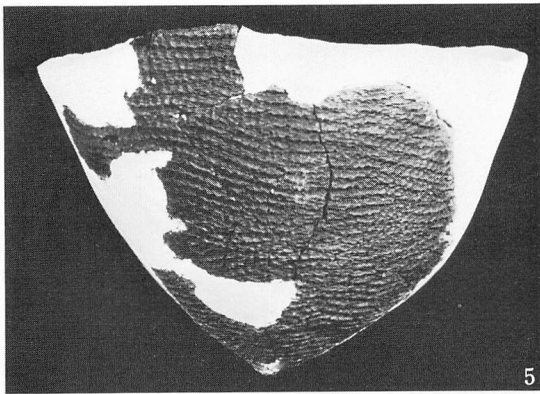
1 群 1 類 B-(1)



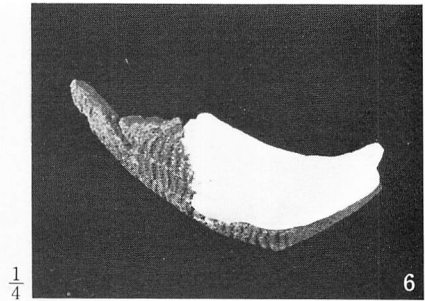
1 群 1 類 B-(1)



1 群 1 類 B-(1)

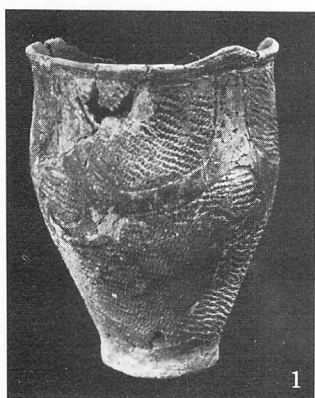


1 群 1 類 B-(4)



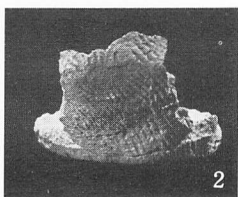
1 群 1 類 B-(1)

PL-7 尖底土器

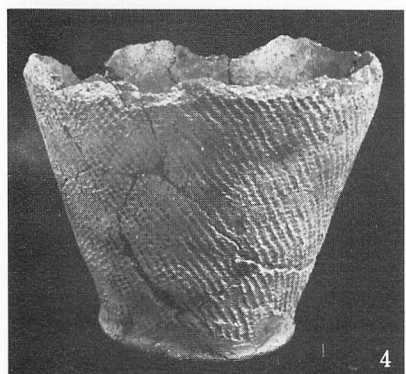
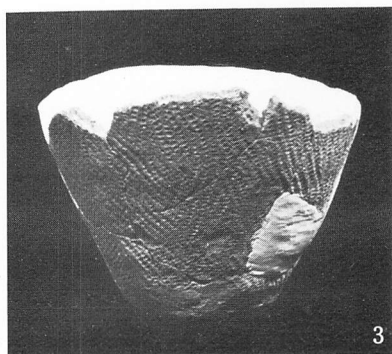


$\frac{1}{2}$

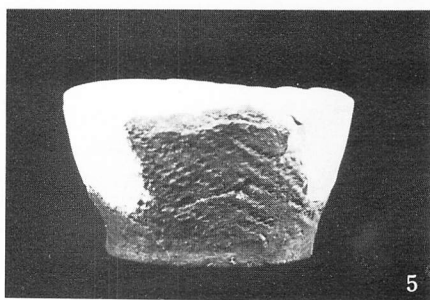
$\frac{1}{4}$



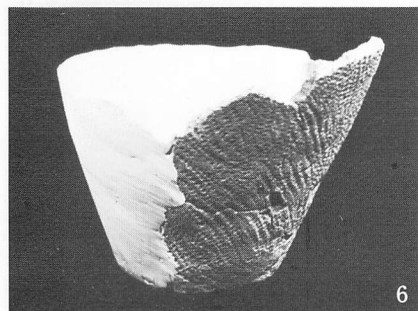
$\frac{1}{4}$



$\frac{1}{4}$



$\frac{1}{2}$

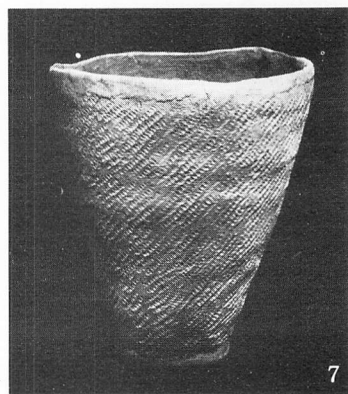


$\frac{1}{2}$

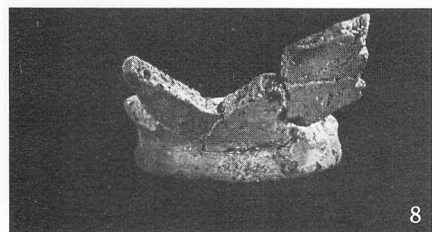
1-1群2類B

2-8-1群2類A

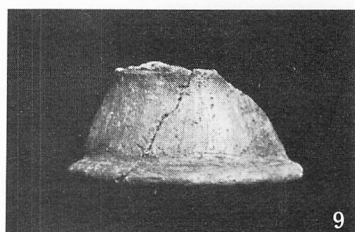
9-2群



$\frac{1}{4}$

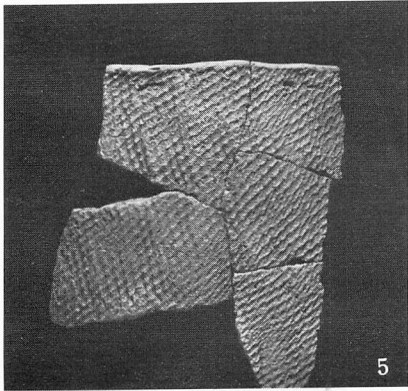
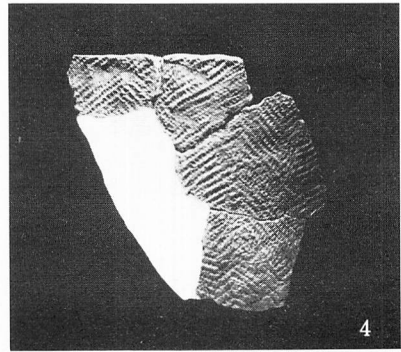
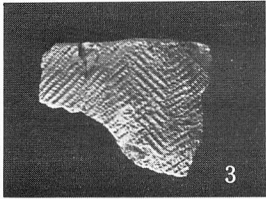
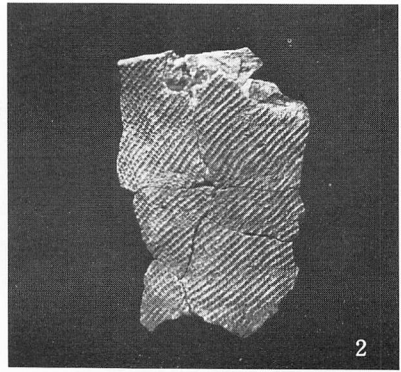
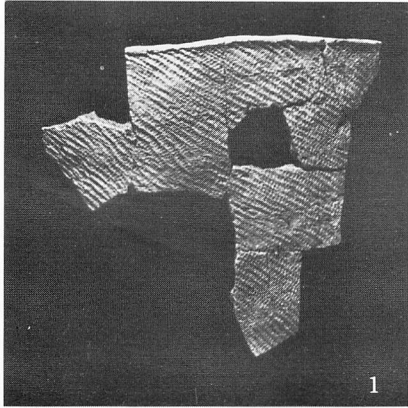


$\frac{1}{2}$

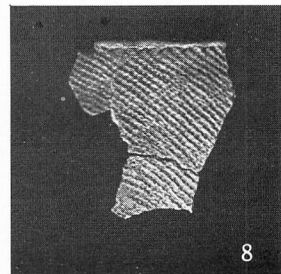
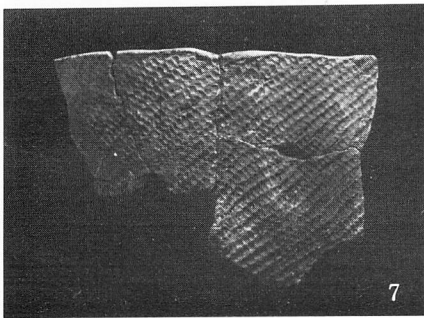
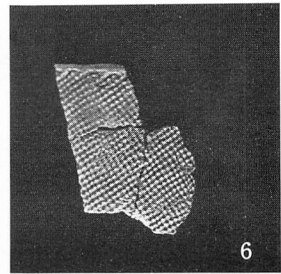


$\frac{1}{2}$

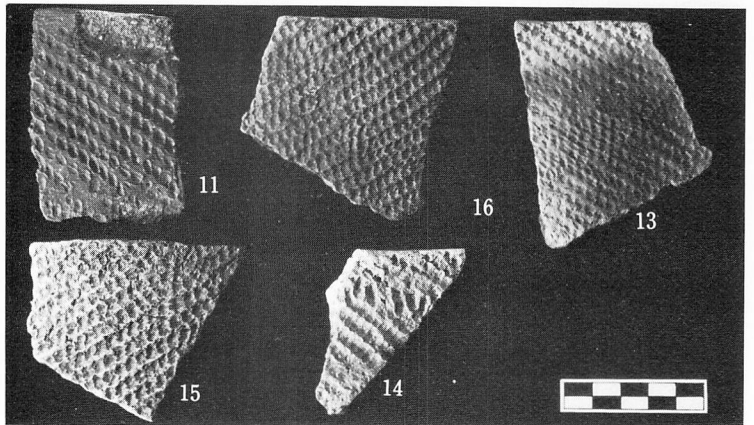
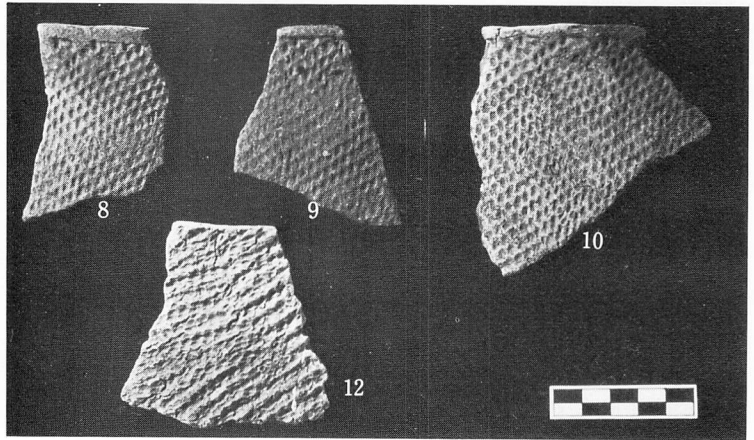
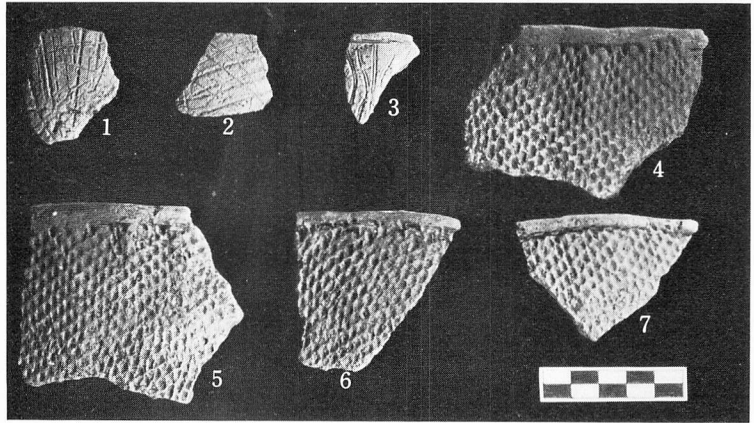
PL-8 土器



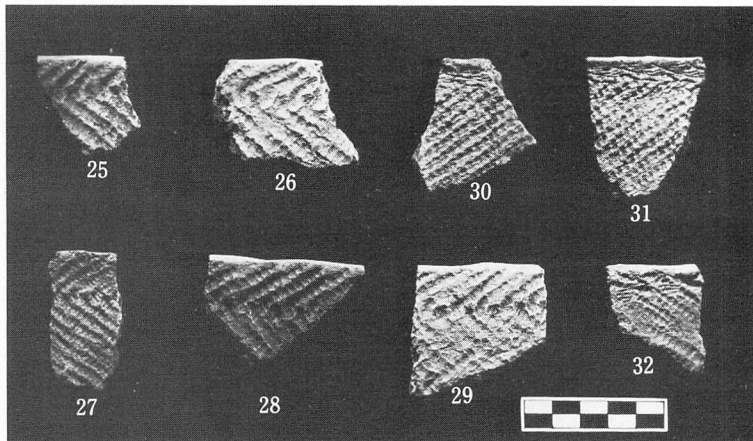
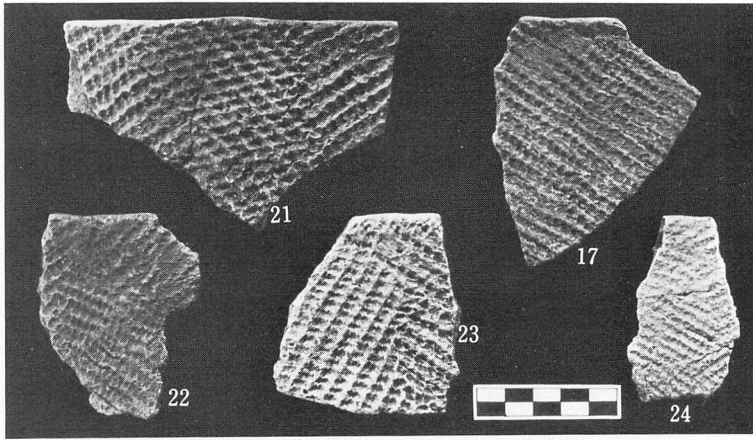
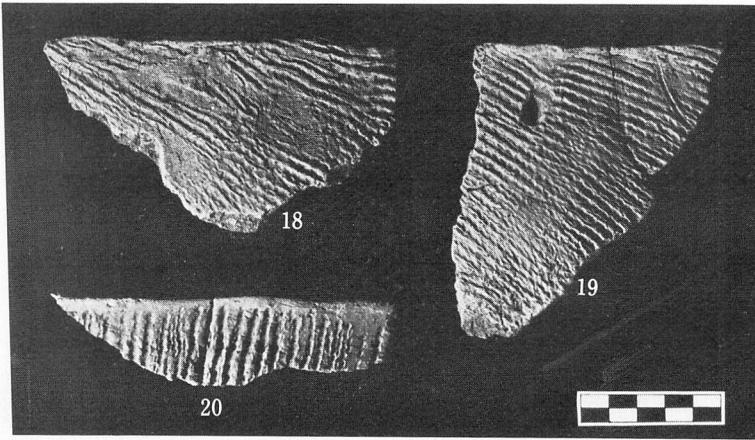
1・2-1群1類B-(4)
3・4-1群1類B-(3)
5~8-1群1類B-(1)



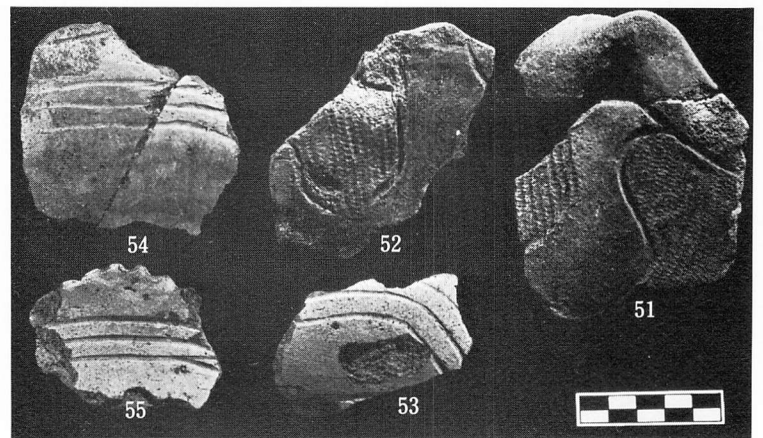
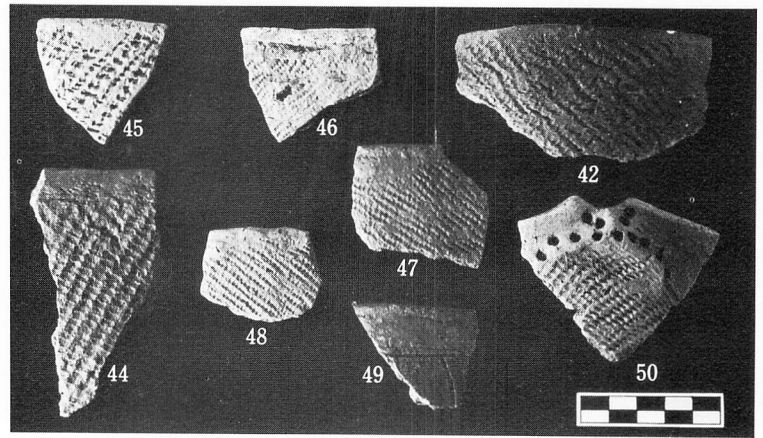
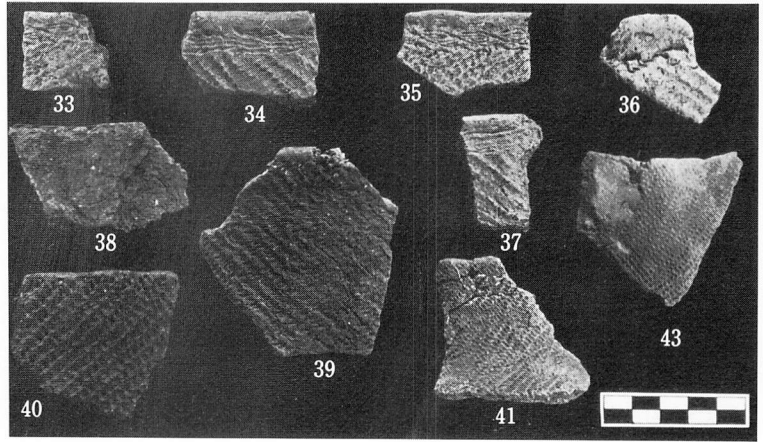
PL-9 土器片



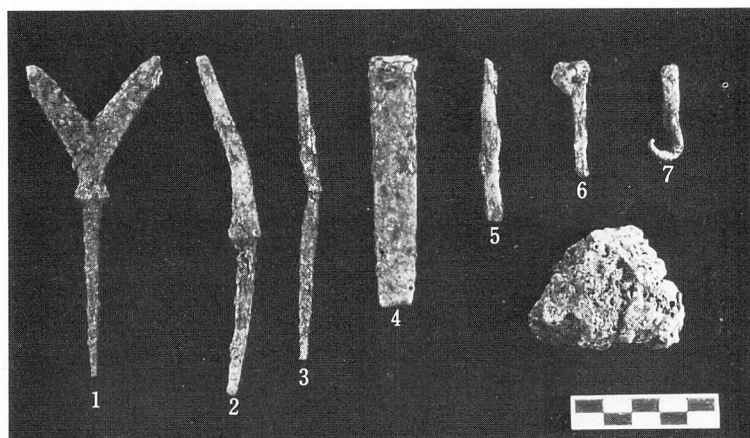
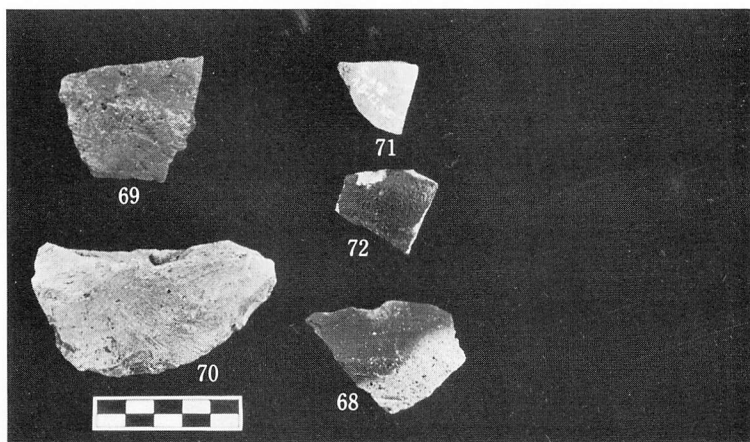
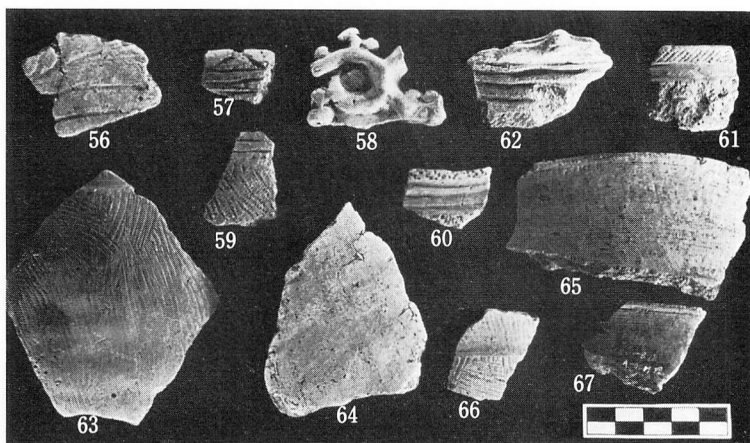
PL-10 拓本土器片



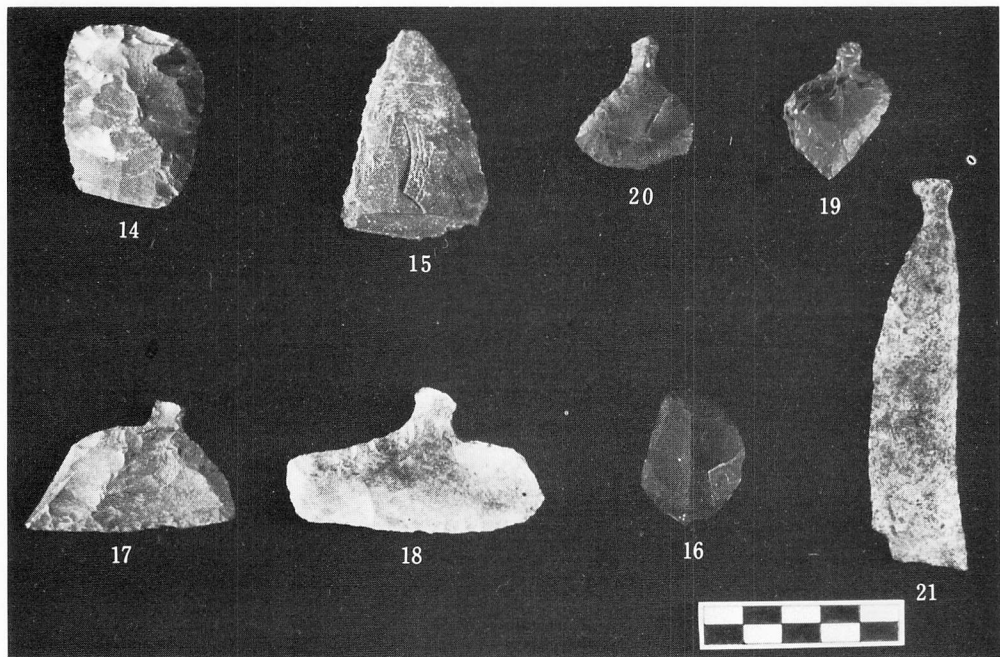
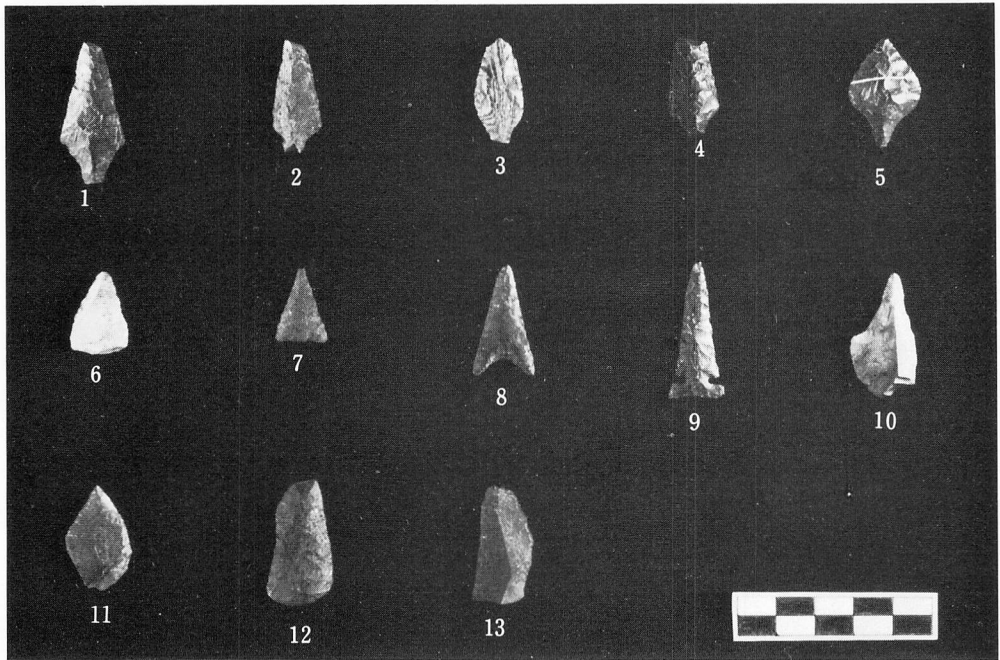
PL-11 土器片



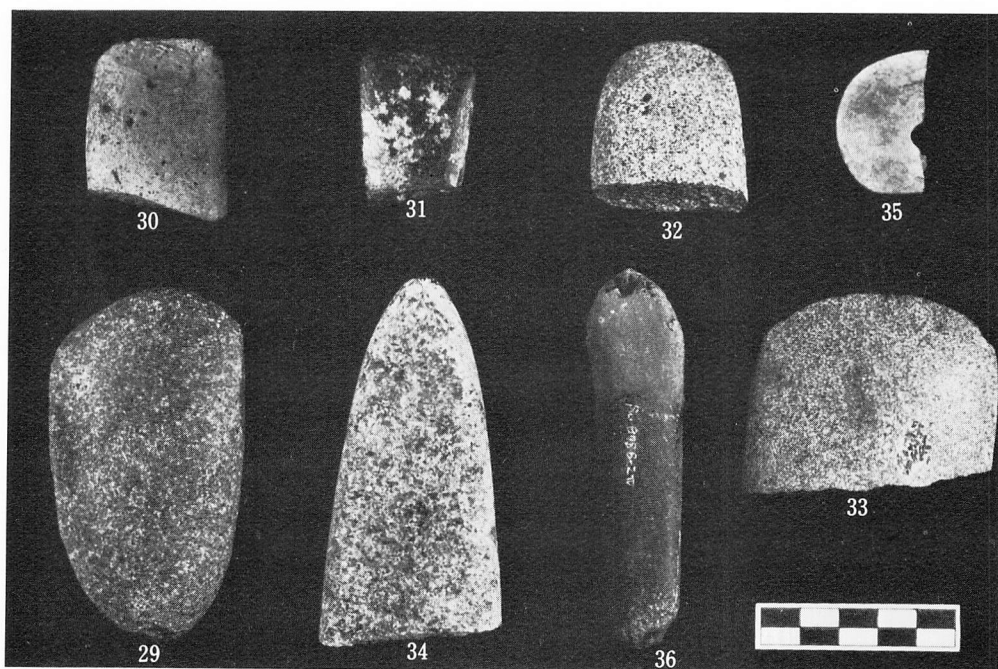
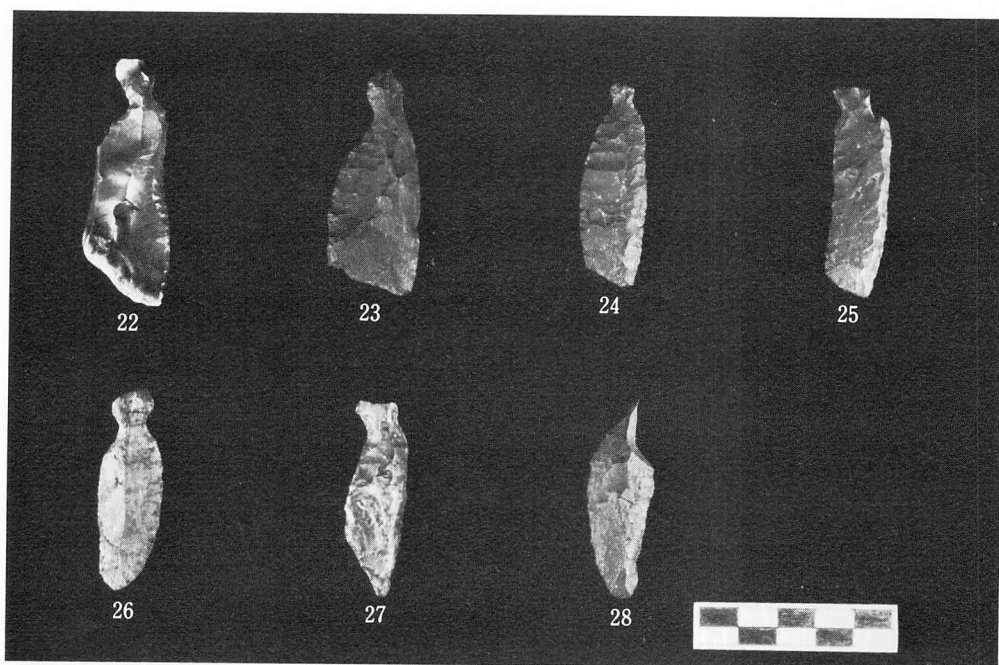
PL - 12 土器片



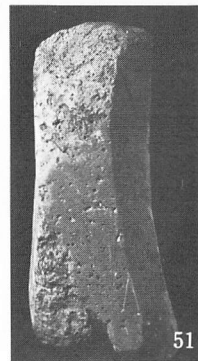
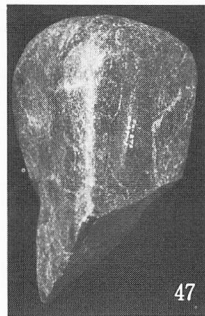
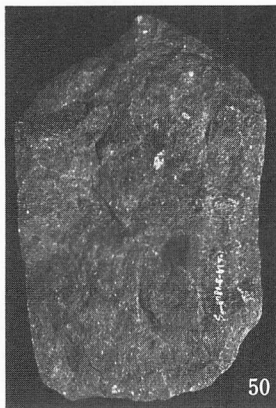
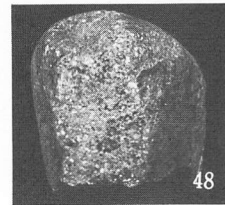
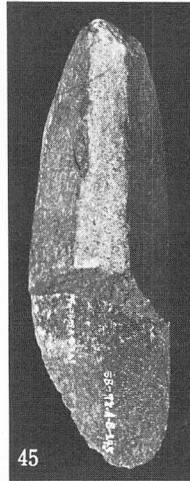
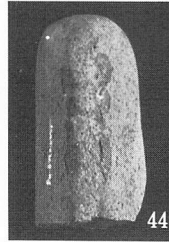
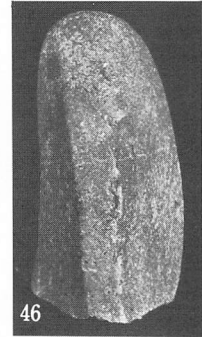
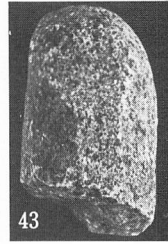
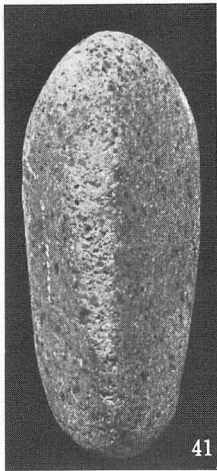
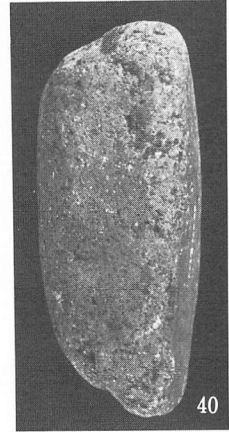
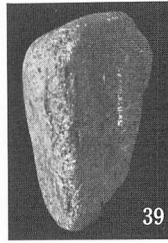
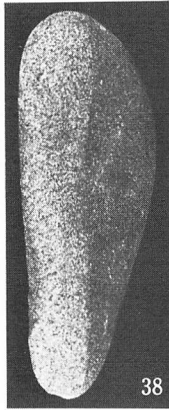
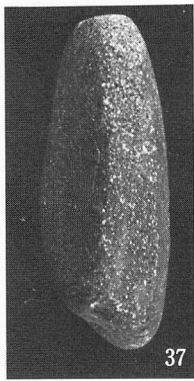
PL-13 土器片・鉄器



PL-14 石器 $\frac{1}{2}$



PL - 15 石器 $\frac{1}{2}$



PL-16 石器 $\frac{1}{3}$

岩手県埋文センター文化財報告書第7集

二戸市 沢内B遺跡

(昭和53年度)

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター
岩手県盛岡市向中野字向中野39-1
(〒020 TEL 0196-35-6622)

印刷所 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1978
